人間文化研究機構地域研究推進事業
「南アジア地域研究」

RINDAS
The Center for South Asian Studies, Ryukoku University
龍谷大学南アジア研究センター

RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 27

「インド抑留」と「ルソン戦逃避行」への道

―英領と米領における沖縄漁業進出と排日政策―

加藤久子

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・南アジア研究センター
The Center for South Asian Studies, Ryukoku University

研究テーマ：「南アジアの思想と価値の基層的変化」

Fundamental Changes in Thought and Values in South Asia

1990 年代以降、インド社会が大きく変容していることは、多くの研究等により指摘のなされているところである。それは、政治的には民主主義の展開と深化で語られ、また経済的には、市場経済の発展と生活状況の向上、そして負の側面としての格差の拡大でもって捉えられる。社会的には、各種の社会運動の登場と興隆に依って立ち、文化宗教的には、多様なアイデンティティの主張が並列的になされうる状況をもって表される。こうした変容は、インド、ひいては南アジア社会の思想と価値が、その基層から胎動・変化しているがゆえと捉えられるだろう。

本プロジェクトでは、「南アジアの思想と価値の基層的変化」との統一テーマを設定し、ひとつに、龍谷大学が豊富な研究蓄積を有する、南アジア地域社会における思想の長大な時間軸における系譜的研究から、またひとつに、具体的な状況についての現地調査に基づく価値の基層的変化に関する分析から、研究テーマへの接近を試みる。これら両観点の統合的な考察を行い、現代インド・南アジア社会の基底部分における変容の起点と推進力の解明を目指す。なかでも、現代インド･南アジア社会の変容を代表的に表象する「下層民の台頭」の様相に着目し、思想史との連関から、その背景と論理を探究し、現地調査から、人びとの生活状況や意識、価値の変化についての研究・分析を行っていく。

RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 27

「インド抑留」と「ルソン戦逃避行」への道

―英領と米領における沖縄漁業進出と排日政策―

加 藤　久 子

目　　次

口絵写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ i

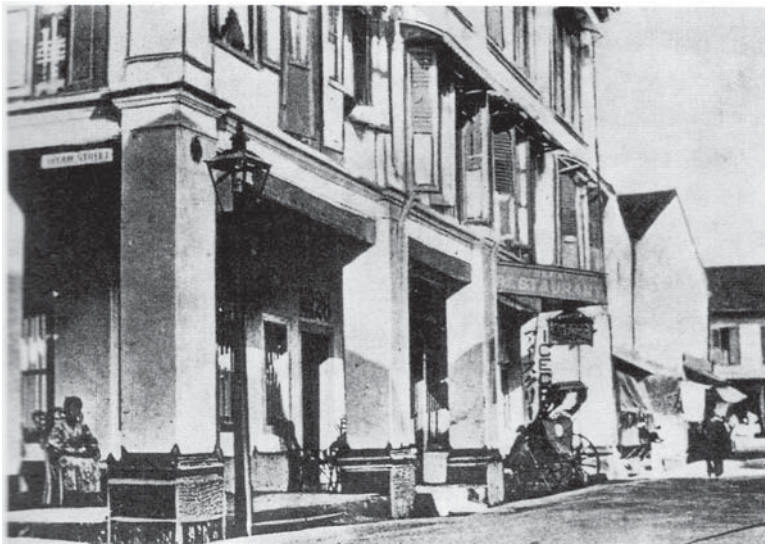
はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１章　糸満漁民と東南アジアへの出漁・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第２章　海峡植民地の日本人社会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

第３章　インドの日本人収容所で起きた囚われの秘録・・・・・・・・・・ 29

第４章　フィリピンの沖縄漁業と太平洋戦争・・・・・・・・・・・・・・・54



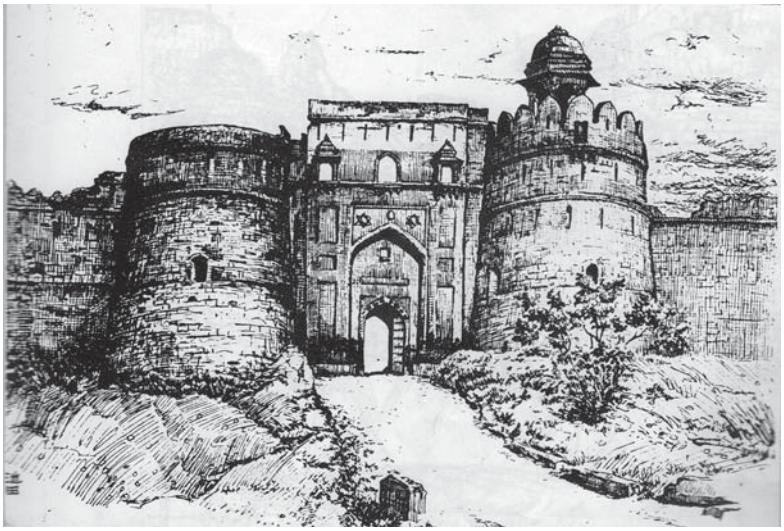
26 番娼館とからゆきさん（左）（『戦前シンガポールの日本人社会』1998 年）

1960 年代の糸満アンマー（撮影：東風平朝正、所蔵：糸満市教育委員会）

かつての日本人花街を示す街路表示
（撮影：加藤久子）

シンガポールの日本人墓地
（撮影：加藤久子）

『スケッチが語る印度抑留記』（インドワラ会、1982 年）より

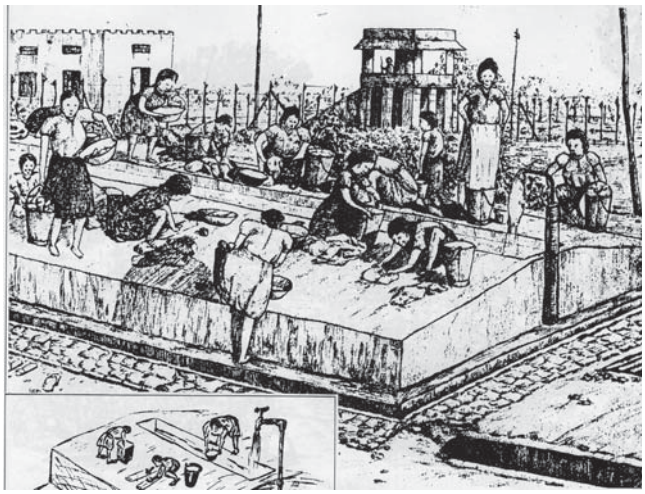


プラナキラ正門・作画　池田進

古城内のキャンプ・作画　高原正三郎

プラナキラでの干し物・作画　高原正三郎

デオリ収容所第 4 翼の建物群・作画　中司博



洗濯・作画　峯一男

炊事当番・作画　池田進

テントにこもる雨の日・作画　池田進

デオリでの火葬・作画　池田進

今も残る日本人が収容された旧デオリ収容所の集合家屋（撮影：加藤久子）

デオリ収容所時代の独房（撮影：加藤久子）

部屋の内部はデオリ収容所当時のままの現・インド中央産業安全保障部隊訓練センター
（撮影：加藤久子）

はじめに

「わたしはインドの収容所内にあったイギリス軍の捕虜病院で生まれたの。戦争中の昭和 19 年にね。一つ下の弟もおなじインドが戸籍ですよ。うちの家族は親戚も含めて戦前のシンガポールで追込漁の組に参加していて、太平洋戦争が起こった日に、父と叔父は操業中の船で裸のまま捕えられた。世の中は南方花盛りの時代でね、沖縄の男たちはそろってシンガポールやフィリピンに行っていたんです。姉たちはシンガポール生まれで、一家そろって捉えられてインドに連れていかれたの。

祖父の兄弟と両親の兄弟も一緒です。おじいの兄弟が 9 名、おばあの兄弟が 8 名、それに母の兄弟、父の兄弟を含めたら親族だけで 30 名もインドに抑留されたんです」。

2012 年 11 月。沖縄本島中部に位置する沖縄市住吉在住の宮里幸子さん（1944 年生まれ）さんの口からとびだす言葉に、私のメモが追いつかない。

第二次世界大戦中、インドの砂漠地帯に日本人強制収容所があったことを知る人は少ない。イギリスの植民地であったインド北西部のラジャスタン州「デオリ収容所」の夏は 50 度にのぼる酷熱の地だ。戦前からシンガポールやマレー半島、ビルマ（現ミャンマー）など英領植民地に住んでいた沖縄の漁民を含めた 3000 人近い日本の民間人は、開戦を境に「敵国人」となり一網打尽に捕えられ抑留されていたのだ。大戦開始から戦後にかけてのことである。イギリス植民地支配の中でもシンガポールは東南アジアの要所として機能していた。

そのシンガポールを拠点として営まれた糸満系漁民の外洋進出は 1917 年代であり、1925 年には現地水揚げ量の 95%を沖縄の追込み漁が独占していた。太平洋戦争直前のシンガポールの日本人漁業者は、鹿児島県出身の永福虎が経営する永福産業株式会社（追込網漁業、採貝業、流網漁業）を大手として、沖縄県人の個人資本による金城組、玉城組が追込網漁業を操業していた。1939 年のマレー半島における沖縄漁民は、本土資本の永福産業（688 人）、沖縄資本の大城組、金城組、その他（350 人）、全従業者 1038 人で、うち沖縄人漁夫は 825 人で 8 割余りを占めていた [1]。

東南アジア各地に在留していた沖縄漁民や民間日本人は、1941 年 12 月 8 日早朝、突然アジア太平洋戦争という侵略戦争に巻き込まれることになる。人びとは強制的に自由を奪われ、あるいは戦場へと追いやられた。東南アジア地域を占領地とする軍政計画は、1941 年 2 月のはじめから参謀本部によってひそかに進められていた。小畑信太大佐をトップに西村乙嗣中佐、東福清次郎主計中佐らからなる研究班が発足された [2]。開戦直前の 11 月 20 日に、占領地の自治回復、国防資源の急速獲得、作戦軍の現地自活を三大原則とした「南方占領地行政実施要領」[3]が決定された。第一の占領目的は物資獲得であり、石油、ゴム、天然ガスなどの豊富な天然資源の獲得であった。占領地は甲地区（蘭

印、英領マレー、ボルネオ、フィリピン）と乙地区（仏印、タイ）に区分し、甲地区の対策は資源確保、敵国への資源流出の防止、そして獲得に関しては在来企業を利用し、日本国の負担軽減の対策として、石油、鉱物資源（ニッケル鉱、ボーキサイト、クロム鉱、マンガン鉱など）の現地開発、通貨、配給、交易、輸送、対米英経済圧迫、陸海軍現地自活の具体策を明示した。乙地域に対しては甲地区の情勢展開を利用し、食糧資源の確保その他、日本国の要求を貫徹すべきことが定められた[4]。

最終目標はオランダ領東インド（現インドネシア）資源地帯の占領であったが、まずはその手前に立ちはだかるイギリス植民地であるマレー半島およびシンガポールを攻略する必要があった。その英領マレー半島のコタバルに敵前上陸したのが佗美浩（たくみひろし）支隊であり、真珠湾攻撃より先立つこと 1 時間以上前のことであった。12 月 8 日、午前 2 時 15 分、佗美浩支隊のコタバル第一次上陸部隊が敵岸に到着。午前 3 時 20 分、海軍機動部隊は真珠湾空襲第一撃を開始したのだ[5]。したがって太平洋戦争は真珠湾で切って落とされたという通説は正確ではない。コタバル上陸の指揮をとった佗美浩の手記によれば、「八ヒ〇一三〇（8 日午前 1 時 30 分）第 1 回上陸成功す。敵の抵抗激しく熾烈なる銃砲を聞く。なお船団は敵機の襲撃を受けつつあり」[6]。戦史記録によって多少の時間差はあるが、いずれにしても太平洋戦争はコタバル上陸によって開戦の火ぶたは切られたのだ。

シンガポール攻略を主目標とした陸軍の作戦計画に対し、海軍はフィリピン攻略を目標として、対米作戦を主としてきた。その構想は大正期以来フィリピンおよびグアムを占領したのち、太平洋で進行してくる米主力艦隊を邀撃するというものであった。そして真珠湾を開戦の初頭に奇襲するという作戦が着想され、連合艦隊司令官山本五十六によって具体化されたものだった。

アメリカの石油禁輸によって日本国内における石油の備蓄が減少していく中で、戦争への意識は陸海軍ともに一致し、固められていった。1941 年 9 月 3 日、大本営政府連絡会議が開かれ、開戦は「国定要領」として決定。1941 年 9 月 6 日、実質的に対米英戦争の開始を決定する御前会議が開かれ「帝国国策遂行要領」が決定された。海軍が想定していた「宣戦布告前の真珠湾奇襲」も最終決定され、開戦日は 12 月 8 日とし、おおむね 3 カ月で南方地域の占領をおえる計画が完成した[7]。犠牲は当然のこととして現地住民に課すこととされ、大東亜共栄圏実現に向けて日本は侵略戦争に突入していった。

米軍の砲弾が乱れ飛ぶ山中に放置され、飢餓と逃避行のフィリピンの戦場体験も、酷熱の砂漠地帯に囚われた英国領の「インド抑留」のどちらも、アジア・太平洋戦争を根拠にした日本の侵略政策に起因していたことは動かしがたい事実であった。

［注］

[1] 「南太平洋海域に於ける沖縄婦人実態調査」『沖縄県農林水産行政史』（第 18 巻・水産業資料Ⅱ）財団法人農林統計協会、1985 年、536 頁。

[2] 防衛庁防衛研修所戦史室『史料大本営叢書　陸軍部　大東亜戦争開戦経緯』〈5〉朝雲新聞社、1974 年、418～419 頁。

[3] 防衛庁防衛研究所戦史部『史料集　南方の軍政』朝雲新聞社、1985 年、91～92 頁。

[4] 「南方経済対策要綱」上掲『史料集　南方の軍政』129～131 頁。

[5] 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　マレー進攻作戦』朝雲新聞社、1966 年、256～258 頁。

[6] 『コタバル敵前上陸　われらかく戦えりシンガポール攻略戦』プレス東京、1968 年、47 頁。

[7] 歴史学研究会編『太平洋戦争史 4 太平洋戦争 1』青木書店、1972 年、106～110 頁。

第 1 章　糸満漁民と東南アジアへの出漁

1. サンゴ礁の海と大型漁法の出現

地先の海への入漁拒否

かつて兼城間切糸満村はサンゴ礁に囲まれた豊かな漁村だった。舟溜の海に面した道路を人びとは「ヤカラー通り」と呼んだ。海の勇者あるいは海に優れた男たちの住む通りを意味し、糸満漁民（イチュマン）は沖縄漁民の代名詞となった。

戦後は水産業発展の拠点として公用水面埋立事業が急ピッチで進められ、漁業都市へと発展した。南高干瀬（フェーンタカシ）、西高干瀬（ニシンタカシ）と呼ばれる魚たちの棲み家も、地名だけを残して今はコンクリートの下である。アンブシ（建干網）やパンタタカー（小型追込網）の漁家に育った上原皓吉さん（1919 生まれ）が、発見し開拓した糸満近海の漁場は 96 におよぶ。

「この干瀬の先はカマスが大漁したからカマサヤーヌサチ、これは赤いサンゴ礁だからアカヤナーと呼んだ」と、皓吉さんは自作の海図を広げて失われた周囲の漁場を説明してくれたものだった。ガザビシという干瀬の真ん中はナカンガジャ、そのとがった先はガジャトゥガイ、干瀬が曲がって浅瀬になったガジャマガイ、アンブシ（建干網）の好漁場で、干瀬を抱くように網を据えるからヒシダカー、水路（ンジュ）を横切る（キャー）ように網を張ると、沖に向かう底の魚が網にかかるので、その漁場はンジュキャーと名付けられたのだと、ウミンチュたちは自分の庭先のように周辺の海を知りつくして魚を追った。

隆起サンゴ礁の台地の上に形成された旧糸満は、海中に突き出したその台地の突端に、魚の寄り集まる御嶽・白銀堂(ヨリアゲノ嶽、シロカネの御イベ)を祀っている。周囲の海はいくつものリーフ（礁縁）に囲まれ、そのイノー（礁池）は魚類の宝庫であった。糸満の人びとは、この豊かなサンゴ礁の海を漁場とし、いまから 400 年をさかのぼる集落形成の当初から漁業を営んできた [1]。

王府時代の「勤農政策」の体制下にあったにもかかわらず、土地が狭いため農業による収益は不可能であり、首里王府は糸満に対して漁業を命じた。津々浦々漁猟が許され、藩主や高官に魚類を提供したと記録 [2]にあるように、いわば漁業は糸満の専売特許であった。古代琉球の漁（イサリ）時代から、石を積み上げた漁垣漁法、漁垣と網の併用時代を経て、鱶鰭、鰭、海参などの水産物の需要に応えて沿岸から遠洋への発展をとげる琉球の対中貿易時代、さらに廃藩置県以降は欧米諸国による貝殻類の需要に対応した潜水漁業の隆盛をみる。

2、30 隻のサバニ（剥ぎ小舟）が集い、舟の上から竹竿で海面を叩いて海中の袋網にサガアマア [3](小さなとびうお)を追い込む狩込網漁法を原型として追込み漁は発展してきた。水深 5 メートル前後のリーフ内の浅い漁場に袋網を設置し、その両側に魚を脅すためのわらを差し込んだ袖網を張り、15 人から 20 人の人員が手や足で海面をパンパン叩いて袋網に魚類を追い込む。シロイカ、クブシミ、カタカシ、エーグヮーなどの魚群を追い込むパンタタカー（小型追込み網漁)、さらに 1884 年、糸満の漁師、玉城保太郎による水中眼鏡（ミーカガン）の発明によって [4]、大型追込網漁（アギヤー）へと進展したのだった。

パンパンと叩くから「パンタタカー」と呼ばれるように、魚を追い「アゲル」から「アギヤー」、あるいは「廻高網（まわしたかあみ）」と呼ばれる大型追込網漁法は、潮の流れを受けるように袋網を設置する。両側の袖網は一方は海底の浅い場所に、もう一方を深い場所に張り、重石で固定して網の設定が終われば、深場に群れをなしているグルクンを「スルシカー石」と呼ばれるおどし縄を用いて追い込んでいく。スルとはクバ（ビロウジュ）のことで、白いクバの葉を数か所に結び付けた縄の先に 3、4 キログラムの石を結びつけた用具がスルシカー石だ。これを海中で上下させることによって、クバの葉がひらひらと舞い、石は海底に打ちつけられてコンコンと音を響かせ、魚たちを驚かせて一匹残らず袋網に追い上げたのである。白色系の色を嫌い、音におびえる魚の習性を利用して明治初期の糸満で考案されたといわれるが、戦後は木の棒にビニールテープを流し巻きしたおどし棒に変わり、クバの葉と石は姿を消した。

海の狩人たちの大胆なアギヤーは、大規模な人員とサバニを結集させて構成される。沖縄県水産試験場の調査報告書（1929 年調べ）[5]によると当時の組織は、舟（サバニ）8 隻、乗組員は 1 隻に 4 人から 6 人が乗り込む。収益の分配は袖網四張りを一人前半、袋網を三人前、従業者は技量によって人頭割りを受ける。漁は周年を通して行われるが、最盛期は 2 月から 5 月、および 8 月から 10 月である。

漁場は沿岸 5 マイル以内、水深は 8 尋から 25 尋（1 尋は左右に広げた両手先の間の長さ）と記されている。なお船団の構成は次第に大規模になり、南方出漁が盛んな時期には 40 人から 60 人を擁し、母船（運搬船）2 隻、子船（サバニ）4 隻を配して一組としている。

大型追込網漁という糸満漁民が編み出したこの独自な漁法は、同時に漁場探しと移動という課題を常に抱えていた。狭い漁場では捕りつくしてしまう漁法であり、周辺の海を安住の地とすることはできなかった。イチュマンの後には魚 1 匹残らないと敬遠され、資源の枯渇を恐れる周辺漁民とトラブルを引き起こし、出漁先の沖縄各地で入漁拒否に遭う。発展した漁法が必然的に抱えた火種であった。

宿命としての遠洋漁業とインド抑留への道

明治末期になると、糸満漁民は各地の漁協と衝突することになり、漁法の発展は漁場からの排斥の歴史でもあった。「本部（モトブ）村漁業組合の専用地先水面に対し入漁の手続きをすませてあるのに入漁を拒んだ」（『琉球新聞』1908・11・8）の一件にはじまり、大正期に入ると、糸満漁業者の入漁を許可するかどうかをめぐる、3 日間にわたる協議がなされ、他地域の漁民に危機感を抱かせた。組合代表の中には糸満漁業者に入漁権を与えると各組合の漁業を不振にし、将来の打撃も少なくないとの理由で承諾しないものが多く「更に本日も引き続き協議する由」（『琉球新報』1918・3・25）と、各組合の反発は強靭であった。

糸満漁民を受け入れる海は次第に狭くなっていった。歴史的にみても地先海面は各間切（旧間切は村から字に改正）の所有とし、他村の地先海面を使用するときは「叶金」という使用料を納める「海方切（うみほうぎり）」制度が根強く残っており、他の漁業者を入漁させるか、拒否するかの決定権は各漁協に委ねられていたのだ[6]。

1907 年 10 月に許可された「県下各地専用漁業権」によって、地先の海の権利が法的に保障されるにいたって、彼らは沖縄を離れざるを得なくなった。国策としての南進政策に組み込まれた海外出漁促進が拍車をかけるなかで、糸満漁民たちは南方の新天地に夢を託して糸満を後にした。糸満に所属するサバニの隻数は、明治期最後の 1912 年(641 隻)をピークに、1919 年(330 隻)、1926 年(300 隻)、1930 年(251 隻)と減少し、男たちは東南アジアの海を目指して渡っていった[7]。

国防国家建設に際して第二次世界大戦期「大東亜共栄圏」と称されたアジア全域は、欧米列強による植民地であり、日本の南方進出の重要な拠点であった。侵略、占領を目的とする国策によって、大型追込網漁という武器をもつ大勢の糸満漁民が送り出されていた。海水が清澄で、熱帯の海を操業適地とする潜水漁法が、沖縄と類似した南方海域にそのまま採用され、加えて漁具などの所要資材も小資本で成り立つ利点もあり、本土漁業の追随を許さないものであったからである。

期待通り彼らは広大な南方海域を独占し、周年操業によって大量の漁獲を誇っていたが、在留した日本人住民および沖縄漁民は否応なく、時代の嵐に飲み込まれていった。

1930 年代後半に入ると、日本の中国侵略をはじめとする国策に対抗する排日運動、非買運動が盛り上がり、現地での事業活動は大な打撃を受ける。さらに 1940 年 7 月、大本営政府連絡会議は、物資獲得を目標に東南アジア地域を占領地とする「南方占領地行政実施要領」を指針として大東亜共栄圏の実現を決定する。この結果、対戦諸国から経済制裁を受け、在外日本人資産は凍結され、事業活動はほとんど休止状態に陥っていった。開戦直前には、多くの海外在留者が帰国を余儀なくされた。その一方で開戦時もシンガポールに残留せざるを得ず、英国憲兵に捕えられることになったのは、パスポートを所属する事業体に抑えられた沖縄漁民たちと、永住により日本に生活の根拠を失っ

た個人経営者「下町族」であった。バッテリー・ロードなどの商業地区の企業のエリート駐在員「グダン族[8]」（go-down＝倉庫地帯の訛ったもの）の多くはすでに帰国していった。しかも漁民たちは漁船と運搬船を、その他の日本人は全財産を「毀損、焼却、没収」された[9]。

約 3000 人の人びとは各地の刑務所など、さまざまな拘束経路を経て、まず英領インドのニューデリーにあるプラーナー・キラー（Purana Qila）と呼ばれる古城の城壁内に集められた。1942 年 9 月には捕虜交換船により、領事館関係者を中心に、商社マン、銀行員、新聞記者、教員など 720 人がメンバーに選ばれ、残りの人びとは 1 年半のテント生活後、1943 年 3 月にラジャスタン州のデオリ収容所（Deoli Camp）へ移送された。死亡者が続出する中で、2125 人（1945 年 2 月現在）が抑留生活を送ることになったのだ。

敗戦めぐり混乱の悲劇

敗戦を迎えてもなお拘束が続いたデオリ日本人収容所では、祖国の敗戦を信じない「勝ち組」と、英字新聞などで敗戦を知る「負け組」が対立、暴動へと発展する。ついに 1946 年 2 月 26 日午後 2 時、勝ち組の暴動にイギリス当局が出動させたインド守備軍の発砲によって、沖縄の幼児を含む日本人 19 人が射殺された。抑留者たちが重い体験を胸に、解放されたのは 1946 年 5 月末のことであった。4 年 5 カ月にわたる苦難の歳月は日本社会から顧みられることはなかった。独立前のインドには日本領事館もなく、この史実は秘録として歴史上からも消し去られるところであった。抑留体験者たちもまた、戦時中の訓令「生きて虜囚の辱めを受けず」という暗黙の強制によって、家族にも話さないという戦後を過ごした。「捉えられることは最大の恥辱とされておりました。たとえそれが外地居留民間人であったとはいえ敵国に抑留されている事は私もまた収容者一同も同じ思いでおりました。これが後で起こる勝ち組と負け組の悲しい争いにつながる遠因でもありました[10]」。

抑留と射殺事件が明るみに出たのは、戦後 30 年たって公開された外務省極秘文書によるものだった。外務省はこれまで完全非公開扱いとしてきた日本と諸外国との関係をめぐる外交機密文書のうち「戦後記録」を順次公開する方針を打ち出した。その第 1 回分として敗戦直後から 1952 年の講和発効以前までの外交文書を 1976 年 5 月 31 日から東京港区の外務省外交史料館で一般公開することを発表した。その中にデオリ収容所に関する文書があり、日本の外務省も知らなかった秘録が白日のもとにさらされることになったのだ。

埋もれたままだったタイムトンネルをくぐって、私は 2014 年 2 度にわたりデオリの地を訪れた。元日本人収容所は、現在インド内務省国家安全局が管轄する中央産業保安部隊（CISF）の訓練センターとして国家の重要な機関となっており、交渉は難航した

が、インド中央政府内務省の許可を得て内部調査が許された。旧バラックや独房が苔むしたまま残され、訓練生が使用している部屋の内部は、当時抑留者が描き残したスケッチそのままだった。

日本人のインド抑留と発砲事件を私が知ったのは 1988 年のことだった。しかし当時の私には調査に立ち向かう財力も家庭環境も持ち合わせてはいなかった。だが中断を余儀なくされていた「インド抑留調査」は、つねに古傷のように私の心にうずいていた。これまでに糸満系漁民の移動と漁労活動は描いてきたが、世界大戦の時代に担わされたもう一つの海人の歴史に目をつぶるわけにはいかないのではないか。2012 年夏、気づいたら私は動き出していた。

漁民の消息をたどるには糸満漁協の協力を仰ぐのが最良の道だった。20 数年来糸満調査にかかわってきた私は、歴代の組合長、参事の方々にお世話になってきた。金城宏現組合長にインド抑留の概略と抑留者名簿から糸満出身者を抽出した名簿を送付、調査協力を依頼した。さっそく元参事の上原隆さんが動いてくださり、長老格の元組合長の金城光栄さん、父系血縁集団である糸満の伝統的門中「下茂腹（スムバラ）門中（ムンチュー)」の代表であり、父が抑留者であった上原悟さんのサポートも加わった。

金城組合長をはじめ各氏は連日携帯片手に、わずかな情報の糸をさぐりながら関係者へとつなげていった。その調査開始は新聞でも「インド抑留の糸満漁民調査―漁協、法大研究員に協力」(『沖縄タイムス』2012 年 7 月 27 日）として報じられた。

漁協は「フィリピン帰りは知られているが、シンガポールへ行った海人たちが英国の捕虜になってインドまで連れていかれたことは知られていない。漁協としても祖先があゆんだ苦難の歴史を埋もれさせるわけにはいかない」と、全面協力を得ることとなった。私としても、もはや尻ごみは許されなかった。糸満漁協の一室で行われた抑留者との面談は初回だけで 20 人に及んだ。その後も上原隆さんと上原悟さんが付き添って下さり、沖縄本島各地を調査に走った。沖縄だけではなく関東圏から青森、シンガポール、マレーシア在住の関係者からの聞き取りと資料収集は現在も続いている。

飢餓と逃避行のフィリピン戦場

国防国家建設のための大東亜共栄圏確立の尖兵として、沖縄漁民が送り込まれた東南アジア海域には、シンガポールとともにフィリピンがある。糸満漁民はフィリピン海域でも独占的に活躍していた。この地もまた、1942 年の日本人漁業者 6718 人のうち沖縄県人が 6164 人で、現地漁業の 90%が沖縄県人でしめられていた [11]。しかし 1899 年以降アメリカの植民地であったフィリピンでは、日米関係の悪化にともない、沖縄の漁師が操業する海の規制は強化される一方だった。「漁業者免許証」は、フィリピンとアメリカの市民のみに操業を許可し、邦人漁業者は指導的地位にいる少数の者に限られた。資本の 70%までが米国人、あるいはフィリピン側の出資であることが操業許可の条件

となった。他方では販売面の立ち遅れ対策として腕の立つ糸満女性が進出[12]するなど、繁栄と衰退の激動の中にあった。

さらに国家間の関係が険悪になると、漁業者免許証がないことを理由に逮捕者が続出した。一方では対外侵略主義に裏打ちされた南方進出奨励、他方では排日政策の強化による漁場からの締め出しという狭間で、糸満漁民はさらに深刻な状況を迎えることになる。

開戦を迎えるやマニラの市街地から民間男女の姿が消えた。第十四方面軍は邦人の現地召集を始め、臨時の大中隊を編成した[13]。戦闘が激しくなる 1945 年初頭に残されたのは、婦女子と老人だけで、その数はルソン島各地だけで総勢 2500 名、マニラ地域で約 2000 名であったとする。第十四方面軍の命を受けて、木原次太郎マニラ総領事代理は、残留組約 2000 名のマニラ脱出に取り組むことになる。1944 年 12 月下旬から 1945 年初頭にかけてのことだ。老人と婦女子はルソン北部の山中へ向かった[14]。米軍の砲撃の中の逃避行。日本陸軍部隊の指揮命令は乱れ、手足まといになる在留日本人は放置された。ジャングル山中は敗残兵、在留日本人がなだれ込み、渓谷は屍体の連なる地獄の道が続いた[15]。異様な臭気が満ち「通路端といわず、山の斜面にも、谷間の渓流にも屍体が転がっていた[16]」。生き残った人びとが停戦を知ったのは 9 月に入ってのことだった。フィリピン地域の戦没者総数は 51 万 8000 人にのぼった[17]。

米軍の砲弾が乱れ飛ぶ山中に放置され、飢餓と逃避行のフィリピンの戦場も、酷熱の砂漠地帯に囚われた英国領の「インド抑留」のどちらも、アジア・太平洋戦争を根拠にした日本の侵略政策に起因している。なぜ沖縄の漁民たちが、大東亜共栄圏確立の尖兵とされたのか。その特殊性を確認していこう。

2. 海峡植民地への漁業進出と受難

日本人街を築いたからゆきさん

かつてシンガポールはマレーの小さな漁村であった。戦前期の「英領マラヤ」は、1895 年にマレー半島南部のマラッカ、ペナン、シンガポールからなる「海峡植民地」としてイギリス直轄植民地となった。行政上は海峡植民地とマレー連合州（イギリスの保護国・西岸ペラク、セランゴール、ネグリセンビラン、パハン）、マレー非連合邦（北部のケダー、ケランタン、トレンガヌー、および東南部のジョホールなどの小首長国）の 3 構成となっていた。海峡植民地は 1851 年にはインド総督直轄を経て、58 年にインド省の所轄、67 年にはイギリス本国の植民地省に移管された[18]。政庁はシンガポールに置かれ、イギリスは海峡植民地を拠点としてマレー半島植民地化を進め、「英領マラヤ」として植民地支配を行った。

そのシンガポールに糸満漁民が出漁し、本格的な漁業をはじめる以前に、基盤づくり

をした「からゆきさん」の進出に、まず触れなければならない。女性たちに寄生するかたちで行商人、写真店、時計修繕業、鼈甲細工店、理髪業、洗濯業、医師、歯科医、薬房などが出店し[19]、越後屋呉服店が隆盛を誇り、商社や商船会社、日本人小学校や日本人倶楽部も開設され、日本人の街となった[20]。

その日本人街は、いまブギス・ジャンクションと呼ばれる日系企業中心のショッピングセンターに生まれ変わった。ファッション＆フード専門街、パルコ、西友、そして高級ホテルのインターコンチネンタルによって構成されている。

かつて多くのからゆきさんを抱えた日本娼館や、沖縄の漁民とその家族が過ごした街は消えた。「MALAY STREET」「MALABAR STREET」など、街角にたつ街路標示やビルにはめ込まれた街区表示板に、その痕跡を残しているだけである。

街の広い道路を「ロード」、住宅や商店をはさんだ通りを「ストリート」という。それぞれに英語、マレー語、中国語に由来する呼び名がつけられている。新嘉坡日本小学校や日本領事館があったミドル・ロード一帯が日本人街だった。その一角のマレー街、マラバー街、ハイラム街の花街は、1920 年に廃娼となるまでストリートが訛って「ステレツ」と呼ばれ、明治 38 年ころの最盛期には 90 軒以上の日本娼館があった[21]。

十五番、二十五番と廊の標識名を付したガス燈の軒下に籐椅子を並べ、五、六人で車座を作って客引きするからゆきさんの姿を、シンガポールの医師、西村竹四郎は『在南三十五年』でこう表現する。「髪は半分を一寸位に刈り込み真直に立てて焼鏝をあて、縮毛となし、後半分の長い髪はぐるぐる巻として花笄であしらっているさまは、一寸見は定九郎の大髪を想はせる」[22]。

出版人であり政治家であった坪谷善四郎が見たマレー街はこんなようすだった。「電車通りを一歩横町へ入れば、右側にも左側にも数町の間は皆日本人の店で、二階もあり三階もあり、屋号は二十五番とか三十番とか呼び、軒先には摺硝子の電燈を掲げ、店先には大抵中央にテーブルを据え、壁際には腰懸を繞らし、テーブルの側には二三の椅子を配置するが、中には店から直ちに二階まで階段に絨毯を敷く所もある」[23]。

1918 年 6 月のシンガポール在留邦人の総数は 2944 人（内子ども 168 人）。シンガポールを除いた「マレー半島及び海峡植民地」は、総数 5638 人（内子どもは 261 人）。さらに 52 種の職業の男女比を従業者別にみると、輸入業者（男 132、女 1）、雑貨商（男 164、女 14）、漁業（男 88、女 2）と、極端に少ない女性だが、その員数を増加させるのが娼妓（女 202）である。52 種の男女比は事業主や妻と子どもを含めた総計は、男 1645 人、女 850 人になっている[24]。

イギリス海峡殖民地の中心であるシンガポールは、アジアの貿易センターとして急速に発展し、港湾労働や都市建設のために多くの単純労働者が必要とされた。その需要を満たすため、中国やインドから、多くの人々が安価な労働力としてこの地に渡った。明治維新前後にマレー半島に進出したからゆきさんの出身地は長崎県島原や熊本県天草

が多く、最盛期の日露戦争期（1904－1905）には「蘭領スマトラ付近も含めた総数は6000人に余り、その稼ぎは1000万ドル」にのぼった。そのからゆきさんに寄生して南洋の邦人商店が発展したのであった[25]。

森崎和江は、「からゆき」は、唐（から）から転じたもので、貧しい男女が海外に働きに出ることを意味したと説明する。それが第二次大戦のあとは出稼ぎの意味合いからはずれ、海のむこうへ売られた女たちを呼ぶようになったとし、「からんくにゆき」「からゆきどん」と呼んだ村びとの思いに添いながら森崎は女性たちの歴史を解き明かす[26]。

当時の出版物や新聞では「醜業婦」「密航婦」「娘子軍（じょうしぐん）」と表記し、差別の視線にさらされたのも事実であった。日露戦争勝利により「一等国日本」にとって、「国辱的存在」そのものであった。廃娼運動の第一人者、山室軍平『社会廊清論』はその典型であった。「日本国民の恥辱」を憂い、「世界第一の醜業婦輸出国たる汚名と事実」[27]から脱出しなければならないと説く。

日本人領事館が、1914 年に出した特別令による「嬪夫（ひんぷ）（楼主）」退治を経て 1920 年（大正 9）、山崎平吉総領事代理によって招集された各地の日本人会代表 29 名によって廃娼が決議された。やがて彼女たちの一部は日本に帰ったが、対策もなく一部は私娼、あるいは現地人との結婚の道を選び、大正末期までに 40 年近い娼館の歴史は閉じられた [28]。

森崎和江はふるさとに帰ったからゆきさんに関して、「外国で働いた経験者を天草の人々は、その血縁に必ずといってよいほど持っている。人々はそのような身うちのものを『外国のおばさん』というふうに読んでいる」とし、シンガポールでマッサージ店とゴム園を経営する元からゆきさんのことばを書き記す。「日の丸は偉か人が外交につかう旗ぐらいに思いよったらおおまちがいばい。わたしは五円玉いっちょにぎりしめて、きもの一枚持たんまま上海に逃げたとき、つくづく思ったね。外人の店に走りこんで、日本人です働かしてください、といったとき身にしみたね。外人はわたしを日の丸だとみたよ。おなごが来た、という顔はせんだった。あげな顔するのは、日本の男たい」[29]。強い祖国愛とは対象的に、日本の男たちの差別感への痛烈な批判であった。

ふるさとに戻れなかったからゆきさんたちは、シンガポール北東の住宅街の一角にある「シンガポール日本人墓地」[30]（910 基）に眠っている。墓地は 1888 年、成功者の二木多賀治郎が、囚人墓に牛馬の骨と共に捨てられていた彼女たちの遺骨を回収して、現在に地に葬ったのが始まりであった [31]。

日本人漁業と沖縄漁民の登場

からゆきさんの時代が終わり、第一次世界大戦を契機に大手商社や海運会社、銀行が進出し、シンガポールにける日本人の操業の登場となる。

中核となるシンガポールにおける日本人の操業の始業は、拓務省拓務局の水産業調査

書[32]によると、大正元年（1912)、山口県人の坂本惣次郎が一本釣漁業を始めたことによった。次いで大正 3 年、染谷浜七、吉野佳好の両人が行った打瀬網、一本釣漁業及び曳縄漁業などを試みていた。

農商務省は遠洋漁業訓練生、石井悌二、永福虎を派遣してその事業を補助させる。さらに永福虎は、大正5年に多数渡来した香川県の流網漁業者の鰆（さわら）流網を援助する。有望とみた永福は、大正6年同志とともに大成漁業公司を興し、香川県の漁夫を雇い流網漁業の経営に当たる。同年10月石津藤次郎は、熊本県人の中村巳太郎、その他15名と漁船3隻を以て渡来、磯漁、一本釣り及び流網漁を行う。その中村は大正7年、南洋漁業の主軸となる「追込網漁業」を創始する。有望な漁法とみた永福は、大正11年、大成漁業公司を退き、自ら「大昌公司」を創立して、漁船3隻、発動機付き運搬船1隻を以て追込漁業を行い、以後鮮魚売買、曳縄漁業などを創め漸次拡張していった。

幾多の変遷を経て、シンガポールにおける邦人漁業はしだいに盛大になり[33]、拓務省拓務局の『南洋ノ於ケル水産調査書』によると、1929年3月現在、1,000人に近い漁業関係者がおり、シンガポール邦人在留者の約3割に相当する。その漁獲高も1カ年200万ドル近くに達する。一般に漁夫は収入の大部分を内地へ送金する。

さらに1928年の済南事件による日貨排斥運動によりふたたび漁獲物の非買運動に遭うが、邦人漁業なくしては成り立たない新嘉坡魚市場でのボイコットは数日で中止され、逆に邦人漁業者の勢力を認めさせる結果となった。したがって今後も中国人による不売運動は慣用的に実行されると思われるが、新嘉坡における鮮魚に関しては邦人の漁獲に頼る以外なく、ボイコットは不可能であると、水産調査は結論づけている。

侵略政策と漁業規制のはざまで

日本は日中戦争から第二次世界大戦にかけて、「南へ！南へ！」と「熱帯を制するものは世界を制す」[34]と、対外発展を目指してきた。1936 年 8 月 7 日の広田弘毅内閣の五相会議で、南方海洋への発展を掲げた「国策の基準」が決定された。大綱にはこうある。「南方海洋殊ニ外南洋方面ニ対シ我民族的経済的発展を策シ努メテ他国ニ対スル刺激ヲ避ケツツ…国力ノ充実強化ヲ期ス」[35]。当初、陸軍の北進論（ロシア、朝鮮半島、中国北部をめざす）と海軍の南進論が対立していたが、海軍の南進論が国策となったのである。「南進は、当時日本の委任統治地域であった南太平洋諸島はもとより、外南洋、すなわち現在の東南アジア地域への進出をもさしていた」[36]。

第一次大戦以降、国際連盟によって委任統治領を託された南洋群島（南洋庁の統括のもとにサイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ、ヤルートの各島に支庁が置かれた）を「内南洋」、それ以外のとくにオランダが領土としていた現在の東アジアやオセアニア地域などの欧米の植民地を「外南洋」とよんで、東南アジアの南方の範囲を表記するようになった。つまり「南洋」は第二次世界大戦までの概念であり、日本と欧米の

植民地支配の最前線をなしていた。

1935 年には那覇市で開催された西部日本水産大会において、南洋漁業の振興を期すべく南洋出漁の助成が要望され、沖縄議案として提出された [37]。「南洋漁業の振興を策すべし」と、拓務大臣の檄が飛び [38]、東南アジア海域は日本の漁場として策定され、その中心は沖縄漁民であった。「南進」の要望に応えて、糸満漁民は東南アジアの海で独占的に活躍していた。

「南洋進出は沖縄人が最適」(『大阪朝日新聞』(1939・9・2)。「“南進沖縄に感謝”／雑誌南進社長山田氏來島」(同紙・同年 9・13) と、糸満漁夫の活躍を報じる記事が連日掲載され、「南進沖縄」は、国策をもって推し進められていく。

1941 年 3 月、金武村に南方の海陸に働く開拓士を養成するための機関として「沖縄県立沖縄拓南訓練所」が開設され、付設機関として糸満尋常小学校に糸満拓南訓練所がつくられた。南進国策にそうもので、国庫と南方関係の有力会社の寄付金で設立されたものであり、日本精神の養成と大東亜共栄圏確立の尖兵としての責務を認識させることが目的であった。

翌 1942 年 11 月には大東亜省が設置され、日本は大東亜共栄圏への夢を追うことになる。その標的とされたのが沖縄の漁民であった。「水産業の発展策特に南方進出の施設は吾人の分担すべき任務である」[39]とされ、東南アジアは「海の生命線」「南方発展の前進基地」として、国防国家建設に重要な地であることが強調されていく。

糸満漁民の大移動さながらの進出ではあったが、糸満および糸満系漁民の大型追込網漁と採貝業とカツオ漁業とでは漁業展開を異にしていた [40]。漁業者の出身地、漁法、漁獲物の商品形態の違いによるもので、大型追込網漁を主体とする糸満および糸満系漁民はシンガポール、フィリピンを出漁先とし、カツオ漁を主力とする渡名喜村、渡嘉敷村、座間味村、宮古、八重山の漁民は南洋群島や台湾、ボルネオを基地に出漁していた [41]。

日本の委任統治領となった南洋群島の日本人は急速に増え、1939 年の沖縄県人の人口は 4 万 5701 に達し、全体の 59.2%を占めた [42]。

1942 年の漁業者数は、日本人漁業者 6718 人のうち沖縄県漁業者 6164 人で、漁業の 90%は沖縄県人の手に把握され、漁場も商店街もほとんど沖縄の延長といった様相を呈していた [43]。

日本の東南アジアへの進出を矢野暢は「南方関与」と規定し、「日本人の南方関与の担い手の大部分が沖縄県人によって占められたという事実」はほとんどの人が知らないのではないか―と指摘している。

英領と米領の排日政策―シンガポールとフィリピン

アメリカ統治下のフィリピンでの漁業はさらに統制が強められ、「漁業者免許証」制は、フィリピンとアメリカの市民のみに操業を許可し、邦人漁業者は指導的地位にいる

少数の者に限られた。続いて追い打ちをかけるように、1933 年「領海漁業規制」（漁撈取締令第二号）の発布、「港湾河川内航船舶に関する法改正」により、資本の 70%までが米国人、あるいはフィリピン側の出資であることが操業許可の条件となった。

したがってマニラ地方における 1940 年の漁業者状況は次のような形態をとることになる。「業主 41 名、漁業従業者 750 名（沖縄県人 6 割、広島県人 2 割、岡山其の他 2 割）、土着民従業者 500 名。漁務種は追込網、手釣、鯖曳縄網、桁網各漁業。漁船 129 隻（内、邦人所有 9 隻、比島人名義のもの 29 隻、其他は比島人所有船を経営するもの及びそれらに所属する小舟を含むもの 91 隻）。以上を漁業種別に見れば、桁網 34 隻、追込網大小合せて 85 隻（17 組）、手釣 9 隻、鯖曳綱一隻」[44]となっていた。

なおフィリピン全体の鑑札所有漁船は、1939 年現在で 227 隻。内訳をみると比島人名義 161、会社商店名義 39 隻、米国人名義 3 隻、日本人名義は 24 隻[45]と少なかった。

漁業法規制により、ほとんどの従業者が漁夫鑑札を所有できず、取り締まりが厳しくなると逮捕者が続出した。日本人漁師はしだいに中継基地のサンミゲール島から上陸できなくなり、監視の目を盗んで母船が日用品を運んでくる以外、食糧はない。ついには飲料水やマッチにまで不自由する状況に追い込まれていった。対応を迫られた日本関係者は、1939 年 3 月「日本漁業連合組合」を結成し対策を検討するが[46]、具体的な対応を見つけられないまま推移していく。一方では対外侵略主義に裏打ちされた南方進出奨励、他方では排日政策の強化による漁場からの締め出しという狭間で、糸満漁民はさらに深刻な状況を迎えることになる。

他方シンガポールでは、先に触れた鹿児島県出身の永福虎が追込漁業のほかに流網漁業、曳縄漁業、えび買付業、採貝業、缶詰輸出業、鮮魚売買などの事業を拡大し、1922 年に漁業部門を「大昌公司」として独立させ、南方漁業の中核をなしていった。沖縄県人の漁業団の多くは大昌公司、石津公司の傘下に組み込まれていたが、沖縄県人の個人資本による大城組、金城組、新里もあり、「三漁団で他県人に負けないよう団結して魚の揚げる日は交替してせり市場の看視を協力しあった」[47]が、新里組は永福産業に吸収され、開戦前の 1936 年当時の漁業状況は、表 1 に見るように、沖縄資本は大城組と金城組のみとなった。

追込漁の組（7〜8 人で組む船単位の操業要員）は大手の永福産業の大昌公司に 4 組、大城組 2 組、金城組 2 組であった。

表1　1939年(昭和14)、沖縄漁夫水産概勢(マレー地区に於ける)

経営者	漁業種	組数	運搬船	機船	魚搬船	全従業者	沖縄県人	年間水揚額	他の日本人	沖縄人	比率	沖縄人水揚・総水揚げ比率
永福産業	流網	3				140	120					
	追込み	4				335	335					
	貝取					65	608					
	沖買					32						
	曳網					13						
	その他		35	25	39	103	10	880万弗	68	630	90	
大城組	追込み	2										
金城組	追込み	2										
その他		2	3	2	42	350		650万弗	0	300	100	
計		13	38	22	81	1038	825	153万弗	68	930	89	シンガポール市場に於いて40～50%

出典:「南太平洋海域に於ける沖縄人漁業実態調査」(昭和23年6月5日)『沖縄県農林水産行政史』第18巻1985年、農林統計協会。

表2　東印度に於ける沖縄県人の水産業趨勢調査（1933～1938）

地方別	組数	経営組名	代表者名	根拠地	沖縄県人従業者	漁業種類	漁船数	生産高	処理方法	日本人	沖縄人	比率
スマトラ方面		玉城組	玉城徳助	サバン	36	追込網	7	¥1,000	鮮魚			
		金城組	金城悟	バタン	35	追込網	6	¥20,000	鮮魚			
	3	大城組	大城徳助	サバン	31	追込網	6	¥19,000	鮮魚	0	35	100%
ジャワ方面		永福産業	永福虎	バタビア	沖縄漁夫95%	追込			鮮魚			
		永福産業傘下組	永福虎	バタビア		追込	10	¥10,000	鮮魚			
		金城組	金城	バタビア			1	¥6,000	鮮魚			
		中尾組		バタビア		釣漁業			鮮魚			
		大城組		バタビア		追込			鮮魚			
		共栄組	安室亀	バタビア		追込			鮮魚			
		中国人経営	元長嶺組	バタビア		追込			鮮魚			
	8	中国人傘下の組		バタビア	60	追込			鮮魚	3	260	99%
セレベス島方面		玉城組	玉城牛太郎	マカッサル	32	追込	6	¥50,000	鮮魚			
		大岩産業		ビートン	180	鰹節	26	¥400,000	鰹節＆缶詰			
		大岩産業		タルナテ	20	真珠	6		鰹節＆缶詰缶			
		鳳敦真珠		ブートン	29	真珠	5	¥80,000	世界各国に輸出			
		玉城組	玉城徳	メナード	18	高セ貝及追込網		¥40,000	鮮魚＆輸出			
		金城組	金城亀	メナード	30	追込			鮮魚			
	7	日蘭漁業		メナード		鰹節			鰹節＆鮮魚	10	330	98%
セラム島方面		玉城組	玉城徳	アンボン	6	鰹節	1		鮮魚			
		渡口組	渡口徳三	アンボン	3	鰹節	1		鮮魚			
	3	金城組	金城亀小	アンボン	4	鰹節	1		鮮魚	1	13	93%
ボルネオ		ボルネオ水産		オタワ	300	鰹節及追込	9	118万貫	鰹節＆缶詰			
		（約半数は沖縄人なる為当会社施設の半数を記録す）										
		大西組	森島定雄	バンゲー（バンギーか）	25	鰹節及追込	1	10万貫	鰹節＆缶詰			
		漁船丸組	本村永却	サーメル（シャミールか）	25	鰹節及追込	1	10万貫	鰹節＆缶詰			
	4	漁船丸組	永峰	サーメル（シャミールか）	25	鰹節及追込	1	10万貫	鰹節＆缶詰	400	375	48%
		江川組	江川	タルナテ		鰹節及追込						

出典：「南太平洋海域に於ける沖縄人漁業実態調査」『沖縄県農林水産行政史』第18巻。

1928年当時の追込網漁業1組の収支計算は次のようになっていた[48]。1組1年間の水揚げ高（1カ月1万円平均）12万円の支出は以下の通り。

1. 漁夫配当（総水揚げ高の半額より氷代の半額を差し引いた金額―5万4000円。
1. 氷代（1カ月1000円の半額―6000円。
1. 漁具費（1カ月平均400円）―4800円。
1. 運搬船消耗費、燃料費その他―1万7280円。
1. 漁船及運搬船修理費―2400円。
1. 事務所費―2400円。
1. 雑費―1200円。

支出合計―8万8080円。

収支差し引き利益金―3万1920円。

賃金形態は大昌公司では販売額から大仲経費（直接操業に必要な経費）経費を差し引いて、会社と漁業者が折半する。漁業者間の配分は漁船ごとに任されており、「船頭が1.2代、他は1.0代、18歳以下は0.7～0.8代である。また親方制の場合はまず船頭が販売額の1.5%を取得し、その上で大仲経費を差し引いた分が漁業者間で配分される」[49]。

［注］

[1] 旧糸満の集落形成過程は、拙文「漁村・糸満における地域共同体としての『門（ジョー）』の形成と機能」（法政大学沖縄文化研究所紀要『沖縄文化研究』13 号、1987 年参照。

[2] 手書き謄写刷りによる玉城伍郎（ママ）「糸満研究」『糸満社会史』祭漁洞文庫、日本常民研究所。後、故玉城五郎稿「糸満概況」として『台湾水産雑誌』1940 年 9 月号及び 11 月号に掲載。

[3] 櫻田勝徳「隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書」『アチック・ミューゼアム・ノート』第 4 巻。後、日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』第 24 巻、三一書房、1973 年、1026～1027 頁。

[4] 水中メガネに関しては、大村八十八「沖縄水産一般」『沖縄県農林水産行政史』第 17 巻・水酸資料 1 、7～8 頁。ここでは明治 19 年となっているが、長田文「水中眼鏡の発明者・父・玉城保太郎を語る」『青い海』1979 年、春季号、100～105 頁（『長田文遺詠集』善興堂医院、より転載）では、明治 17 年になっている。

[5] 沖縄県立水産試験場「島尻郡中頭郡各村漁業調査」1929 年、『沖縄県農林水産行政史』（第 17 巻・水産業資料編 1 ）財団法人農林統計協会、1983 年、662～664 頁。

[6] 「漁場処分意見」前掲『沖縄県農林水産行政史』（第 17 巻）所収、513〜515 頁。
[7] 謄写刷りによる、與世里盛忠「地理的ニ見タ糸満研究」祭漁洞文庫、日本常民研究所、1932 年、73〜75 頁。
[8] 矢野暢『「南進」の系譜』中公新書、1975 年、124〜125 頁。
[9] 渡辺東雄『南方水産業』中與館、1942 年、141〜142 頁。
[10] 石橋總吉郎「ある日系マレイシアンの記録」（川内光治）『日馬和里』マレーシア日本人会、No3、40 頁。
[11] 琉球政府文教局『琉球史料』（第四集社会編 1）復刻、那覇出版、1988 年、128 頁。
[12] 安里延『日本南方発展史―沖縄海洋発展史』三省堂、1941 年、374 頁。及び『大阪朝日新聞』1939・3・9）
[13] 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 捷号陸軍作戦〈2〉ルソン決戦』朝雲新聞社、1972 年、2 頁。
[14] 防衛庁防衛研究所戦史研究センター所蔵の『第十四方面軍戦史史料』（第 1 巻）所収「元マニラ総領事代理木原次太郎の回答書」（手書き史料）木原本人の署名、捺印。及び土屋直敏編『山ゆかば草むす屍』自費集出版、1965 年、36 頁。
[15] 田中義夫『ダバオ懐かしの写真集』ダバオ編集部、1988 年、2 頁。
[16] 玉村一雄「ルソン山岳州に於ける患者収療の状況」前掲『山ゆかば草むす屍』31 頁。
[17] 厚生省援護局資料「フィリピン地域戦没者遺骨収集概況―政府が実施した島別収骨数」（1957 年度から 1989 年度までの集計）。
[18] 生田滋「マレーシア・シンガポール」前掲『世界現代史 6 東南アジア現代史Ⅱ』221〜229 頁。
[19] 南洋及日本人社『南洋の五十年―シンガポールを中心に同胞活躍』章華社、1938 年、144〜146 頁。
[20] 『戦前シンガポールの日本人社会―写真と記録』シンガポール日本人会、1998 年、64 頁。
[21] 上掲『戦前シンガポールの日本人社会―写真と記録』30〜31 頁。
[22] 西村竹四郎『在南三十五年』安久社、1936 年、19〜20 頁。
[23] 坪谷善四郎『最近の南国』博文館、1917 年、168 頁。
[24] 大正 8 年 8 月『南支南洋ニ於ケル邦人状況』台湾銀行調査課、291〜298 頁。
[25] 前掲『南洋の五十年―シンガポールを中心に同胞活躍』143〜150 頁。
[26] 森崎和江『からゆきさん』朝日新聞社、1980 年、19〜22 頁。
[27] 山室軍平『社会廊清論』1914 年、警醒社書店、411 頁。
[28] 前掲『南洋の五十年―シンガポールを中心に同胞活躍』146〜153 頁。
[29] 森崎和江「あるからゆきさんの生涯」『ドキュメント日本人 5 棄民』學藝書林、1969 年、6 頁。
[30] 『シンガポール日本人墓地―写真と記録』シンガポール日本人会、1983 年、8 頁。
[31] 前掲『南洋の五十年―シンガポールを中心に同胞活躍』509〜512 頁。及び前掲『戦前

シンガポールの日本人社会―写真と記録』166 頁。

[32] 拓務省拓務局「南洋ニ於ケル水産業調査書」1931 年。前掲『沖縄県農林水産行政史』（第 17 巻）財団法人農林統計協会、1983 年所収、109～110 頁。及び台湾総督官房調査課「新嘉坡に於ける漁業状況」『南支那及び南洋調査第 165 輯』1929 年、21～27 頁。

[33] 台湾総督官房調査課「新嘉坡に於ける漁業状況『南支那及南洋調査第百六十五輯』1929 年。21～27頁より」。及び渡辺東雄（『南方水産業』中與館、1942年、208～211頁）。

[34] 竹越與三郎『南国記』日本評論社、1942 年、141～149 頁。

[35] 外務省編纂『日本外交年表竝主要文書』原書房、1966 年、344 頁。

[36] 鹿島平和研究所編『日本外交史第 22 巻　南進問題』鹿島研究所出版会、1973 年、5 頁。

[37] 『南洋水産』南洋水産協会、第 5 号、1935 年 10 月、41 頁。

[38] 拓務大臣　大谷尊由「海洋漁業の振興を策すべし」『海洋漁業』海洋漁業振興協会、1938 年 3 月号（第 3 巻第 3 号）、14～15 頁。

[39] 前掲『南洋水産』第 68 号、巻頭言、1941 年 1 月、1 頁。

[40] 片岡千賀之「戦前における沖縄県の南方漁業進出」『漁業経済論集』第 26 六巻、西日本漁業経済学会、1985 年 5 月、32～34 頁。

[41] 同上、「戦前における沖縄県の南方漁業進出」3 頁。

[42] 石川友紀「海外移民の展開」『沖縄県史 第 7 巻 各論編 6 移民』沖縄県、1974 年、388 頁。

[43] 『琉球史料』（第 4 集社会編 1）（復刻）那覇出版、1988 年、128 頁。

[44] 斎藤宗一『南方圏の水産』東京堂、1942 年、191～192 頁。

[45] 武久伊作、前掲、『南洋水産』第 64 号、1940 年 9 月、9 頁。

[46] 同右連載。『南洋水産』第 70 号、1941 年 3 月、21 頁。

[47] 上原剛寿『現代糸満事業人銘々伝』人物銘々伝刊行所、1968 年、98 頁。

[48] 台湾総督官房調査課『新嘉坡に於ける漁業状況』南支那及南洋調査第 165 輯、1929 年、19 頁。

[49] 片岡千賀之『南洋の日本人漁業』同文館出版、1991 年、 67 頁。

第 2 章　海峡植民地の日本人社会

1. 戦前シンガポールに定住した漁民一家

糸満女性のショップハウス

永福産業の漁業部門会社、大昌公司の機関士として追込網漁業に従事していた上原宜英（旧姓玉城 1963.9.4）は、昭和初期にシンガポールに渡り、一時帰国をして沖縄に戻り音代（1904.5）と結婚。音代は長女の美代子を出産すると、赤ん坊を音代の両親に預けて 1928 年、夫の待つシンガポールへ渡航した。祖母に育てられた美代子は、3 歳を迎えた 1931 年、一時帰国した音代の姉の夫（上原清次郎）に連れられて沖縄を後にしたのだった。

漁民一家の上原家は、からゆきさんたちによって形成された日本人街の一角、マレー・ストリート 12 番の 3 階建てに住んだ。1 階がアーケードに連なる店舗で、2 階と 3 階が住居になっているシンガポールの伝統的ショップハウスだ。

長女の田港美代子（1928.5.30）を迎えたシンガポールでは、長男、清英（1932.10.4）、二女（6 か月で美代子が小 2 の時、日射病で死亡）、二男、憲英（1938.1.1）が生まれた。三女、喜久恵（1940.11.1）は帰国の船上で出産、三男、英明（1947.3）は戦後生まれだ。

となりの 13 番には音代の姉一家が住んだ。上原清次郎（1892.4.3）妻、ウシ（1896.12.25）と清一郎（1929.9）と上原清次（1932.12.1）兄弟もシンガポール生まれだ。

清次郎は沖縄資本の大城組の買物係と会計を担当していた。漁民は一度漁に出ると、3 カ月から 5 カ月は漁場（ペナン沖、シャム湾など）にとどまって漁をする。そのため運搬船が彼らの食糧などの物資を補給し、帰りに漁獲物を港に持ち帰って水揚する方法がとられる。その物資を整えるのが、「買い物係」の役目であった。さらに漁民の住居、荷物の管理、病気になったときの介護、経理にいたるまで一切の漁民の面倒を見るなど多忙な仕事だった。漁民たちが長い海上生活から寄港すると、かならず「慰労会」が開かれ、大宴会となる。子どもたちもごちそうにあずかるのを楽しみにしていた。

隣同士に住む従兄弟の子どもたちはいつも一緒だった。姉一家はその後クイーン・ストリートに移り、2 階に漁民の山川宗由（1904.1.9）一家（長男宗幸、1930.1.5）が住んだ。

子どもたちは、制服を着て新嘉坡日本小学校 [1] に通った。男子は白い半袖シャツに紺のネクタイ、半ズボン、女子は白い半袖シャツに青色のネクタイとスカート。男女とも白いソックスとズックが決まりだった [2]。「ぼくらの時代は白い帽子もありましたよ」（上原清次）。日本と同じ教科書を使用し、2 学年から英語の教科が加わり、国際人としての教育が与えられた。「海外発展民としてアジア有色種族のリーダーとして、世界派

遣を争う日本人の真骨頂を心に深く植付けなければならい」[3]として、家庭でも標準語が推奨された。そのため帰国するまでウチナーグチ（沖縄方言）を使う機会はなかった。父は「パーパー」母は「マーマー」と呼んだ。

二人の姉妹マーマーたちは、伝統的に漁家の経済を握ってきた糸満アンマーの気質をそなえていた。外交的な姉のウシは得意なマレー語を駆使して沖縄から仕入れた布地を商い、追込漁のための補充要員の調達にも一役買っていた。大昌公司は多くの漁民を必要としていたので、「ヤトゥイングヮ」（雇い子）と呼ばれる漁民予備軍を集めに沖縄へ出かけることもあった。4 歳ごろの清次は母について沖縄の離島伊江島へついて行った記憶が鮮明に残っている。

他方、妹の音代は多角経営で経済的盤を築いていった。音代マーマーは、住まいとして借り受けた 13 番の洋館の部屋を貸業として活用した。長女美代子の記憶によれば、市から借り受ける権利を、帰省する本土の人から譲り受けたようだった。3 階建の洋館には電話もあり、各階にトイレと洗面所が設置されていた。1 階のアーケード前は沖縄出身の宮城床屋と山形県出身の武田俊夫が経営する十字屋洋服店に貸した。十字屋洋服店の隣の一隅には音代が経営する雑貨店（風邪薬、胃腸薬などの漢方薬、たばこ、歯磨き粉、歯ブラシ）を開き、スロットマシンを設置してゲームコーナーとして経営に当たった。さらに海人の寝巻、浴衣など三枚を一日で仕上げ販売した。家事は中国人のメイドに任せ、商売に精を出した。

下船する海人たちの必需品を提供

漁師たちは長い漁から帰り大金を握ると、まず故郷へ送金し、十字屋洋服店で白いスーツをあつらえ、隣の宮城床屋で髪を整え、音代の雑貨店で日用品を購入し、スロットマシンでゲームを楽しんだ。居住部分となる 2 階の 4 畳半の部屋には、仕事明けの海人や客待ちの中国女性たちがマージャンをしていた。その奥の部屋は日本料亭、新喜楽の芸者、金弥さんが三味線練習部屋に利用した。

家族は 2 階の角部屋で暮らした。となりの部屋には大家族の海人一家も同居し、3 階の大部屋は、音代の夫、宣英と同じ組の独身海人達の宿泊部屋になっていた。下船すると 20 人くらいが寝泊まりしていた。海人たちは「香港箱」（スーツケース）に身の回りの物を詰めて持ち歩いていた。男たちは、子どもたちにメンコや絵本、レコードなど必ずお土産を持参した。屋上は洗濯干場になっていた。

音代の娘、美代子は親しい人びとにあだ名をつけるのが得意だった。床屋の宮城は眼鏡をかけていたので、マレー語で四つの目を意味する、「アンパマタ（四つの目）」、クリスチャンの洋服店十字屋店主、武田俊夫には、刈り上げのヘアスタイルと武田信玄をもじって「武田信玄ボーターヘー」（坊主）と名づけた。

近所には同郷の理髪業の玉城貫吾（明治 27.5.9）一家が住んでおり、6 人家族全員で

インドへ抑留された。妻、ヨシ（明治 18.6.31）、ケイコ（昭和 2.2.1）、三枝（昭和 10.4.5）、典子（昭和 12.6.24）、吉春（昭和 15.3.24）。美代子とケイコは 1 歳違いの友人で、戦後もつき合いは続いた。

馬場商店や越後屋、新喜楽、沖縄出身者のサンシン屋もあった。近くの氷屋（カッテン）で、蜜をかけたかき氷が 1 セントだった。

清英は昨日のことのように語りだす。「中国人が経営する学習塾があってね、塾生たちが中国の国家を歌っていました。そのそばの空地では長いひげを生やしターバンを巻いたインド人の蛇つかいが、見世物をやっていた。ぼくたちは遠巻きにして、籠の中からコブラが頭を動かしとぐろを巻いて出てくるのや、口の左右に針を刺す出し物を、ドキドキしてみていました。その向い側はインド人の喫茶店や中国人のコーヒー専門店があり、毎朝 3 セントのコーヒーを買いに行くのがぼくの役目でした。やかんを持って行って、量り売りで入れてもらうんです。家の外の通りには消火栓の水道があって、朝はインド人が放水して掃除をしていましたよ」。

そうしたシンガポールの日常を詩人の金子光晴は、次のように表現する。「雑多な人間の膏が、じりじりと焦げちぢれているような場所だ」とし、「額に牛糞の灰をぬりこんだヒンヅー人。舢舨（さんぱん）苦力と人力車（チャー）。よだれ掛のついたあっぱっぱのようなものを着た猶太（ユダヤ）街の女たち。混血児。南洋産支那人（ババナンキン）。ベンガルや、アラビアの商人。グダン人種。暹羅（シャム）のかこいもの。煙鬼。馬来土人。出稼人。亡命者と謀者（スパイ）。かれらは、みな生きるために、炎暑や熱病とたたかう」[4]と。

歓楽街マレー・ストリートの住人たち

からゆきさんの時代が終わった花街（ステレツ）一帯は、あらたな歓楽街として生まれ変わった。新喜楽、西京亭、玉川、一富士、東京亭、柳光亭、千鳥、萬歳亭、ふじや、菊水、ふたばなど料亭、仕出し、飲食店が集中していた[5]。

「芸者さん専用の履物屋もあって、草履 1 足 2〜3 ドルで売っていました。料理屋さんもたくさんありましたよ。近所には「ミークルー」という博打をする女性がいて、男たちを集めてオイッチョカブや花札博打をしていました」と美代子は回想する。

そんなアーケード通りは、夕方になると中国女性やマレー女性が、店の横の壁際に籐椅子と丸い白いテーブルを置いて、編物をしながら客を待つ光景が日常だった。

永福産業株式会社の漁業部門に勤務し、漁民の管理を担当していた坂本謙一さん（後出）は、「歓楽地のマレー・ストリートにはサンシンの音が鳴り響き、漁を終えて大金を手にした沖縄の漁民たちを中国女性やマレー女性たちが待ちかねていましたよ。彼らは大モテでしたからね。塩水で茶褐色に脱色された髪で、街中をげたばきで歩く。シンガポールで暮らしが成り立つのは、漁民以外では床屋や写真屋くらいでしたからね。特殊な技能者である漁民は世間から認められていましたよ。

一度出漁すると 3 か月から 5 カ月は操業に出るので、漁民のパスポートは一括して大昌公司で預かる。これは漁民が労働条件や賃金の良い方に流れていくのを防いだり、前借りを踏み倒したりするのを恐れての会社の対策でした」。と語る。

そうした女性の中に、十字屋洋服店主の武田俊夫（1911.4.20）の内縁の妻となり、インドに抑留され銃撃事件に巻き込まれた中国人の武田坤玉（1911.6.20）もいた。デオリ収容所の死傷事件の際は、夫がインド兵の射撃を受けて倒れるのを見かけ、飛び込んで夫をかばい、ともに即死した。小柄でチャイナ服の似合う美しい女性だった。

幼い清栄は女性たちに可愛がられた。一輪車で遊んでいると、必ず声をかけてくれた。よくジャランジャラン（散歩）にも連れて行ってもらった。人力車（チャー）にも乗せてもらった。「家の前のアーケード内でいつも遊んでるわけですからね、女の人たちとはみんな顔見知りで、マレー語で話していましたよ」。

4 歳違いの姉の美代子も、「女性たちが軒下に座って刺繍をしていた姿はとても印象に残っています。とくに女の子の私は、女性たちが糸を顔に当て産毛を抜いているのを、じっと見ていました。これは毛剃りの一種で「糸脱毛」という伝統的な脱毛方法だと話してくれました。元からゆきさんという方もいましたよ。当時は「からゆきさん」ということばの意味は知りませんでしたけど、長崎出身だと聞いていました。やさしくて清楚な方でした。外国航路の船長さんがその方を気に入って結婚していた。私たちは『ヨコオのバーバー』と呼んでいました。その方が弟の清英をとても可愛がって、人力車に乗せてあちこち遊びに連れて行ってくれました」と懐かしむ。美代子は利発な少女だった。多様な人間関係のなかでどんな環境や苦難のなかでも決して誇りを失わずに生きることを学んでいた。

尋常科 [6]第 5 学年の時のことだった。学校の教室の窓から外を見ていた生徒数人が、海水で赤くなった髪をかき上げながら通る海人をみて「あっ沖縄人が通る、ほら見て」といった。明らかに沖縄の漁民に対する差別感だと感じた美代子は、担任の松永先生（佐賀県出身の男性の先生）に、「なんで沖縄の人をバカにするのですか。沖縄人なんて呼び方は正しいのですか」と抗議した。

先生は「その呼び方はダメですよ。あなたは東京出身だけど東京人といわないでしょう。アメリカ人、中国人と、国の違う人を指すのであって、東京の人、鹿児島の人といわなければ正しくありませんよ」と先生に注意され、気軽に口にしたらしい学友はびっくりしてあやまった。そして「ミヨチャンが沖縄の人だって知らなかったの」とうなだれていた。

松永先生は帰国後も良き相談相手で、10 年ほど前に亡くなったが、生涯の師であった。

シンガポール生まれの子ども達の遊び方

クイーン・ストリートには大昌公司の漁民宿泊所があった。漁民たちは「永福」と呼んでいた。「クイン街には禅宗西有寺、大昌漁業公司、高橋屋ホテル、馬場商店、村石タワシ製造元がある」[7]。渡航してきた独身の漁民たちは、この宿舎に身を置いて、漁にでる。

シンガポールの追込漁に参加し、インドに抑留された糸満上之平の玉城亀助（大正9.8.10）が戦後、役所へ届けた書類にも外地居住地は「新嘉坡クイーン街 15-5」となっている。

音代マーマーは海人たちが下船すると、大昌公司の海人宿舎へ煙草や石鹸、歯磨き粉、歯ブラシ、セイロガンどの日用雑貨を風呂敷に包んで、美代子と清英に売りに行かせた。2 カ月か 3 カ月ごとに帰ってくる彼らは大金を握ったばかりで、幼いきょうだいに、釣り銭(7～ 8 セント)を小遣いにくれた。その稼ぎ分は缶に入れ、沖縄糸満の祖父母（母の両親）に年に 1 回まとめて送金した。

「宿舎で独身の海人たちは解放されて花札を楽しんでいました。みんな顔見知りになって、『ミヨチャン来たか』といって、煙草 2 箱で 12 セントなら、20 セントくれておつり分はくれた。おつり分は必ずくれるんです。それを母に渡すと缶に入れて、糸満の祖父母に送るんです。1 年分まとめて、美代子と政英の稼いだお金だよといってね、私を 3 歳まで沖縄で育ててくれた祖母ですから、たとえわずかな金額でも送りたかったのです」。

ミドル・ロードとビクトリア・ストリートの交差点にあった「花屋商会」という文具と書籍の店は、子どもたちの憧れの店だった。少女クラブや少年クラブが置かれていた。美代子は少女クラブを、清英は講談社の絵本を買ってもらうのが最高のプレゼントだった。

辻森民三も昭和初期の「日本人街そぞろ歩き」で「電車路を越せばすぐ花屋書店があり、ギッシリと詰まった書棚の並びに…一驚した」[8]と記している。

漁に出る漁師の家庭では、子どもたちが父親と過ごす時間が少ない。そんな姉弟を、日曜日になると十字屋洋服店の武田青年や日本人街の若い青年たちが、よくピクニックに連れて行ってくれた。シンガポール東部に位置するカトンの植物園に遠出したこともあった。

美代子の父も漁から帰ってくると、従兄弟の子どもたちを引き連れて、お化け屋敷や遊戯施設がある「新世界」へ出かけた。メリーゴーランドに乗って、帰りには中国人の店でみたらし団子やきなこをつけた団子を食べるのが楽しみだった。オペラの藤原芳江がきた時も父が連れて行ってくれた。宝塚歌劇団の天津乙女、水之江滝子など、寄港地のシンガポールは有名人が立ち寄った。

ボクシングも人気があった。「父もぼくもボクシングが大好きで、興行を楽しみに待

っていました。ピストン堀口（1914－1950）なんて大スターも来ましたよ。東南アジアの選手と試合するんですけど、観客は日本人選手に対して熱狂的な、愛国心丸出しの応援をしたものです。観戦の後の子どもたちは握りこぶしを打ち合って、ボクシングごっこに熱中しました」。

清英少年が熱を上げたものに「イカンシャム」があった。マレー語でイカンは魚、シャムはけんかを意味し「闘魚」のことである。それは 8 センチから 10 センチほどの、戦闘機のように相手を追いかける習性のある魚だった。友達と勝負する当日までは容器に入れて暗い場所に置き、黒い布に包んで持参する。勝負の瞬間に明るい水槽に入れると、魚は相手を追いかけ始める。魚同士で背びれを立て、尾びれで相手の体を叩く。その回数で勝負が決まる。背びれは緑に輝いていた淡水魚だった。

多様な異文化の中で日本を学ぶ

元旦、紀元節、天長節、明治節には紅白のおまんじゅうが配られた。姉弟は休校でも必ず、お饅頭をもらいに登校した。「いまも歌えますよ」姉と弟は声をそろえて歌いだす。「今日の吉き日は大君の」（天長節）、「雲にそびゆる高千穂の（紀元節）、「アジアの東、日いずるところ」（明治節）。運動会や学芸会で歌い踊られたのは、日本の物語や唱歌ばかりだった。

新嘉坡日本小学校建設に力をつくした一人であった西村竹四郎医師の 1923 年 2 月 5 日の日誌抄に「海外産れの児童に日本節分行事を行う。豆の代用に落花生を求め、それに蜜柑又は銀貨を混じ、火を消し各室を暗くし、『福は内、鬼は外』…子供等は喜ぶ事、喜ぶ事、大きな紙袋に落花生を拾ひ入れ、嬉々として室中を飛び廻る…三月雛節句、五月節句、七夕の織女祭、観月、歳暮等々、日本を知らぬ子供に、出来るだけ、故国情調を教ふべく務めている [9]』とあり、海外在留日本人の教育には母国の風習、人情を教えることが重要視されたのだ [10]。

しかし現実には、イギリス国王ジョージ 5 世のジュビリー(即位 25 年)の祭典、ヒンズー教の針祭りの行列（タイプーサム)、中国正月の爆竹と喧騒と、ごちゃまぜの異文化の中で育った [11]。

「そう、お寺もたくさんあって、お釈迦様の誕生日には花の祭りで賑わいましたし、日蓮宗のお坊さんにお習字を習いに行き、キリスト教会のピクニックにも参加した」と美代子には楽しい体験だった。

家庭での食事もまた多様だった。「朝食はパンとコーヒーでした。子どもはココアやミルクと砂糖たっぷりの紅茶でした。昼食と夕食は中国人女性のアヤー（メイド）が作りますから、中華風の料理がほとんどで、沖縄料理は知りませんでした。大きな魚を丸のまま油で揚げてたっぷりの野菜と調理した「イカンソープ」は本当においしかった。イカンはマレー語で魚ですからね。その魚料理を大きいまま食卓に出して、ナイフで切

り分けて食べるんです」と、姉と弟は競うように語る。

「組の買物係の清二のお父さんは、仕事で市場へ行くので、さまざまな魚を持ってきてくれました。人力車の上からハイと言って投げてよこす。それをアヤーが上手に調理する。カレーライスもアヤ―が作るのはおいしかった。じゃがいもと人参だけじゃなくて茄子やトマトが入っていて。エスニックなナシゴレン（チャーハン）やミーゴレン（焼きそば）には肉だけじゃなくて魚も入れ、ニンニクや魚醤を使うのでスパイシーでしたよ」。

羊肉や牛肉の櫛カツは炭火で焼いたものをインド人が売りにきた。中国人の中華がゆや「蛙売り」も日常的だった。バケツに入れた生きた蛙を、その場で皮をむいて調理用にさばいてくれる。汁物に調理し、子供の虫グスリだといって定期的に食べさせられた。回虫駆除であり、流行りの病気予防だと聞かされた。

2. 海外引き揚げと熊本疎開

女性と子どもだけの外地脱出

開戦前には日本の海軍もシンガポールに駐留するようになり、町を歩いている水兵に出会う。姉と弟は「兵隊さん、うちにいらっしゃい、コーヒーがありますよ」と声をかけ、家に案内した。1940 年 10 月、戦況は日々厳しくなり、家族には帰還命令が出た。尋常科 6 学年に在籍していた美代子は沖縄県立第一高等女学校進学の希望があり、母、音代自身は一時帰国のつもりで子どもたちを連れて沖縄へ向かった。長男清英は 2 学年、二男憲英は 2 歳だった。身重の音代は船上で四女、喜久恵を出産した。

一家は母の実家の糸満のサンティン毛下の町端区に身を置き、美代子は予定通り、1941 年 4 月に第一高女（沖縄県立第一高等女学校）に入学した。糸満からの通学は無理なので、那覇の叔母の家に下宿。夫と商売のことが気にかかる音代はすぐにもシンガポールへ戻りたかったが、開戦によって沖縄に足止めされてしまう。加えて沖縄戦が迫っていた。非常事態を迎えた 1944 年、第一高女の女学生は「ひめゆり部隊」に動員命令が下され、政英たち学童には沖縄県からの指令で台湾への学童疎開が計画された。危険を察知した母、音代は家族を連れて宮崎疎開を決意する。子どもたちの学童疎開とひめゆり部隊からの防御策をとったのだ。音代は糸満警察へ赴き、警察署長にこう陳情した。「自分は病弱なので、幼い弟や妹の面倒を見させるために、長女、美代子の援助がどうしても必要なのです」。

一家は疎開船に乗り込んだ。那覇から鹿児島につくまでに 3 日間かかった。魚雷を避けてジグザグ航行だった。音代の姉、ウシ一家も一緒だった。

沖縄から九州への学童集団疎開は 1944 年 8 月から集中的に実施され、約 6 千人の学童、引率教員らを九州に移送。宮崎、熊本、大分の 3 県に分散疎開した。日本軍は、ア

ジア太平洋戦争開戦後、しだいに絶望的な状況に追い詰められていった。持久戦に備え、足手まといとなる老人や幼婦女子を南西諸島から疎開させる対策が緊急臨時閣議で決定されたのはサイパン陥落後の 1944 年 7 月 7 日であった。「サイパンの次は沖縄進攻だ」と判断した大本営の要請により、疎開対策は急がれた。

沖縄本島、宮古島、石垣島、奄美大島、徳之島など五つの主要な島から、老幼婦女子の緊急引き揚げ（県外疎開）を決定、これを沖縄、鹿児島両県知事に電命した [12]。

沖縄県に対しては、本土へ 8 万人、台湾へ 2 万人、合計 10 万人を 7 月いっぱいに疎開させるよう命令が下され [13]、上陸地から疎開地までの陸上送費はすべて国庫負担、海上輸送は陸海軍輸送船と艦艇の往復を利用するというものだった。国の至上命令としての県外疎開を実施するに当たって、沖縄県当局は現地軍と協議の上、疎開事務全般を統轄する特別援護室を新設、各市町村は国家の至上命令を実施すべく、所轄警察署長と市町村長が強力に疎開を推進した。

しかし輸送船の不足、米軍潜水艦による海上の危機、見知らぬ土地への県民の恐怖など疎開業務は難航し、沖縄当局は困惑した。短期間の 10 万人の疎開は不可能であった。学童集団疎開と平行して一般の幼老婦女子の疎開も緊急であり、沖縄県は警察部所管の特別援護室を設けて疎開事務を開始するが、当初は希望者の申し出は皆無だった。

沖縄戦前夜の女子挺身隊

鹿児島に着いた一家に公民館が割り当てられ、同行した清次たちの家族 3 人と共に 7 人の疎開生活は始まった。美代子は沖縄の第一高女から　都城（みやこのじょう）　高等女学校 4 年に転校した。長男、上原清英と、二男、憲英は国民学校 6 年と 1 年、幼い二女、喜久恵を抱えて、母は疎開先の農業の手伝いに駆り出され、農業の経験のない美代子も農家の田んぼの手伝いで、ヒルに足をかまれて悲鳴を上げた。支払いは小豆などの現物支給だ。食糧難は当然で、タニシでもなんでも食べた。

1945 年 3 月、都城女学校に転校した美代子は、川崎航空の軍需工場で現図(飛行機の図面を書く)職場へ学徒動員として働いた。青図からセルロイドに書き写し、原図を作る仕事に明け暮れた。胸には「都城高女　4 年　さくら組　血液型Ｂ型　玉城美代子」と書かれたネームプレート、腕には「報国隊」の腕章、「神風」のも文字も勇ましい鉢巻きを髪に巻いた。校長は「お国のために死ぬことは誇り高いことだ」と生徒たちを鼓舞した。

翌年は B29 が飛来、敗戦は明らかだった。街で出会う日本兵はトラックの上から「女学生のお姉さん、何か記念にちょうだい」と手を出した。美代子たちは胸の名札や鉢巻きをはぎ取って投げた。都城も危険地帯となり、一家は熊本の阿蘇へ避難した。

1945 年 4 月 1 日、ふるさと沖縄にはアメリカ軍が上陸、嘉手納沖の広大な海面は、無数の敵輸送船で埋まった。「沖縄は玉砕した」と聞かされた。行き場を失った一家は、

知り合いのふるさと長崎への誘いを受け、敗戦を迎えた。不安の中で過ごしていた一家のもとに、シンガポールで別れて以来消息の分からなかった父、宣英が、インド抑留から解放されて訪ねてきたのだ。もはや戦後 1 年の夏を迎えていた。父と共に一家は 1946 年 10 月、焦土と化した沖縄に引き揚げた。父にインド抑留のことを聞いても、苦し気な顔を見せるだけで何も語ろうとはしなかった。

引き揚げてきた沖縄は米軍の占領下にあり、あらたな困難が待ち受けていた。敗戦によって国や県の行政機能は低下し、物資の入手や働き口も閉ざされていた。

美代子は縁あって生地を扱う仕事に就いた。結婚しても重い布地の束を担いで倉庫を行ったり来たりの重労働に耐えて戦後を生き抜いてきた。

［注］

[1] 新嘉坡日本小学校は 1912 年ミドル・ロードの東洋ホテルの一室を借りて授業開始、1920 年にウォーターロー・ストリートに校舎が完成し敗戦まで続いた。現在、校舎はスタンフォード・アートセンターとして使用されている。

[2] 前掲『戦前シンガポールの日本人社会―写真と記録』53 頁、98 頁。

[3] 前掲『南洋の五十年―シンガポールを中心に同胞活躍』506 頁。

[4] 金子光晴『マレー蘭印紀行』中公文庫、1978 年、119 頁。（初版は 1940 年）。

[5] 田中美紀作成「大正時代・日本人街」（絵地図）、前掲『シンガポールの日本人社会』30～31 頁。

[6] 学校教育法施行以前の旧制学校の課程名称。1941 年の国民学校令により「初等科」と改称。1947 年 4 月 1 日の学校教育法施行によって戦後の新制学校である現行の小学校に移行した。

[7] 辻森民三『新嘉坡てびきぐさ』花屋商会書籍部、1926 年、143 頁。

[8] 上掲、辻森民三著『新嘉玻てびきぐさ』140～141 頁。

[9] 前掲、西村竹四郎『在南三十五年』344～345 頁。

[10] 前掲『南洋の五十年―シンガポールを中心に同胞活躍』506 頁。

[11] 前掲『戦前シンガポールの日本人社会―写真と記録』118 頁。

[12] 浦崎康華『沖縄戦とその前夜』協栄印刷、1977 年、26 頁。

[13] 琉球政府編『沖縄県史 8　沖縄戦通史』1971 年、1989 年復刻、国書刊行会、181 頁。及び前掲『沖縄戦とその前夜』27 頁。

第 3 章　インドの日本人収容所で起きた囚われの秘録

1. 外交秘密文書が明らかにした暴動と発砲事件の真実

敗戦を信じない抑留者

公開されたインド抑留と殺傷事件に関する外交記録文書とは、第二次世界大戦中、中立国であり日本の利益代表国だったスウェーデン総領事館から日本政府に宛てた報告書である。抑留日本人代表との会見記録やインド当局の報告書などを添え、1946 年 12 月 3 日付で GHQ（連合国軍総司令部）を通じて、占領下にあった日本の外務省に報告コピーが届けられたものであった。文書名は「在印抑留邦人騒擾事件に関する瑞典口上書転送の件」（タイトルは外務省訳）で、M・ハレンボルグ総領事がインド当局の求めに応じて事件を調査した報告書「デオリ日本人収容所訪問調査」が含まれている。以下、その内容を紹介する。

〈公開文書 1.デオリ日本人収容所訪問調査〉

1946 年 3 月 30 日付の在ボンベイ（現ムンバイ）のスウェーデン総領事M・ハレンボルグ氏の報告書によると、事件の概要は次のようなものだ。デオリ収容所では 1945 年末になっても抑留者の相当数が日本の降伏を信じていない。インド政庁内務省は敗戦の経緯を説明するために、沢田簾三前ビルマ駐在大使と磯田三郎元陸軍中将を当収容所へ派遣した。

同大使らは抑留者を集めて終戦の詔勅（玉音放送）を朗読したが説得は失敗。インターニー（Internee・民間抑留者はインターニーと呼ばれ、戦争捕虜「Prisoner of War」とは区別された）の中から大使や中将は偽物だとの声が起こった。以来緊張状態は加速し、勝ち組の一団がサレンダー組（負け組）を襲撃して 16 人の負傷者を出した。

その後も内部トラブルは続き、収容所所長のイギリス軍総司令官クレスター中佐は、暴動をしずめるためにインド軍歩兵部隊の派遣を要請、警察署長が騒乱条例を読み上げあげたが騒ぎは収まらず、発砲を命じた。軍隊は 67 発を発砲、インターニー15 人が即死、16 人が重傷を負い病院に収容された（このうち 2 人が病院で死亡。註・実際の死亡者は 19 人）。

発砲事件後の 46 年 3 月 6 日、ハレンボルグ・スウェーデン総領事はデオリに赴き、日本人の各翼長と会見してさらに日本が占領下にあることを説いた。そして各翼長に対し、それぞれの翼に帰って本官の説明を翼員に伝え、それでも疑念のあるものは申し出るように付け加えた。その日の午後、各翼長から状況を理解した旨の文書を受け取った。

しかしキャンプ内はかなりの緊張が残っていると懸念する翼長と所長は、スウェーデン外務省を通じ日本政府に直接彼らを説得して欲しいと依頼したという。翌日、本官は

各翼を訪問した。抑留者たちは暴動により犠牲者を出したことで気落ちしている様子が見られたが、静穏ではあった―と印象を記している。

〈公開文書 2. 日本人抑留者の死亡に関して「日本人抑留者の死亡に関する瑞典口上書」〉

1945 年 11 月 1 日から 46 年 7 月 31 日までのデオリキャンプ内の病院での死亡者 30 人の氏名、性別、死亡日、年齢、死亡原因、出生地、保護者名が記載されている。そのうち「デオリ 2.26 事件」の死亡者は以下の表記で判明する。Date of death（死亡日）が[26.2.1946]、[Died of gun shot wounds]（発砲による死亡）と記されているのが 17 人。発砲を受け後日の死亡者が 2 人である。つまり発砲による死亡者は 19 人（幼児 1、女性 5、男性 13)、うち沖縄出身者はデオリ収容所で生まれた伊礼久雄（14 か月・父太郎、母ウシ、伊平屋村)、大城伊太郎（28 歳・漁夫・読谷村)、名嘉重郎（30 歳・漁夫・伊平屋村)、の 3 人であった。

デオリ 2・26 射撃事件―幼児と乳飲み子の母も

「2 歳くらいの子どもが廊下から外に出ようとしたのを母親が抱き上げた瞬間、弾が当たったらしく子どもは即死、母親の胸から顔は鮮血で真っ赤、その時母親がやられたとばかり思ったが、子どもが身代わりになったのだろう。…一段落して火葬に行く事になった。17 の棺桶を車に乗せて 30 分くらいの郊外に行き、そこの砂原で焼くことになった。薪と灯油は配給の量だけ、砂の上に薪を敷き棺を並べる。その上に薪を合掌させて灯油をかける。火をつけると乾燥し切った砂原の空に真っ黒い煙が立ち昇る。…棺の中から腕が付き出たり、足が棺を蹴飛ばす。…翌日は骨拾い。現場に着くとひどく荒らされている。よく見ると十分焼けていない手や足があちこちに散らばっている。野犬が荒らしたらしい」[1]。

19 人のリストの中には、1 章に登場したシンガポールのマレー・ストリート 12 番の 1 階十字屋洋服店を開いていた Takeda Toshio（武田俊夫・34 歳）と中国人女性、Takeda Kengyo(・武田坤玉・32 歳)の名もみえる。発砲現場にいる夫の姿を目にした中国人妻は、夫を救うべくその渦中に飛び込んで行き共に即死したと語り伝えられている。

収容所で誕生し、デオリ 2.26 事件の日に 1 歳の誕生日を迎えた三重県桑名市の松浦昇（のぼる）さん 1945 年生まれ）もまた、発砲によって母静子さん（当時 25 歳）を失うという過酷な運命を担うこととなった。「私の誕生地と母の他界地は同じなのです。戸籍簿にある私の出生地は、印度アジミール州デオリーと記されていますし、母の死亡地も同じです」。記憶にもないこの事実を松浦さんが知るのは成人してからであった。新たな家庭を営んでいた父、松浦保さん（1915 年生まれ）に確認するのをためらっていた。母の野辺の送りも元収容者から知らされた。今は、まだ乳飲み子だった自分を抱えて帰国した父の苦労が胸に迫るという。

引揚げたとき国民学校初等科の 4 年生だった糸満市糸満の上原忠夫さん（1937 年生まれ）は、この殺傷事件に遭遇している。「神の国の日本が負けるわけがないと信じる勝ち組が負け組を襲う「夜討ち」ということばは、今も記憶しています。父のいとこの大城満仁（1917 年生まれ）は勝ち組で、襲撃に加わった人でした。ひとり者で正義感あふれた元気者で、子ども心に抑留所内の険悪な雰囲気は感じていました。事件の日、棒をもった男たちがゲートに向かって走って行った。僕は何だろうと思って後ろについて行った。ゲート前で騒動になり監視のインド兵が発砲し、バタバタ人が倒れるのをみた。驚いて逃げたけど、おそらく曲がり角の水道パイプにでもぶつかったのか、転んで意識をなくして、気付いたら看護所のような所に担ぎ込まれていた。周りは血だらけの人でいっぱいだった。あの状況だけはいまも鮮明に覚えています」と、証言する。

忠夫少年は、父の上原忠太郎（1906 年生まれ）、母シズ（1906 年生まれ）、妹峯子（1941 年生まれ）、敗戦の日にデオリで生まれた弟忠義と共にそろって沖縄への帰国を果たした一家の長男だ。しかし帰国した故郷は沖縄戦よって衣食住のすべてを失っていた。人びとは生きるために戦場に散乱する砲弾や薬きょう、米軍からの配給物資を海上輸送し取引する密貿易に関わった。忠夫少年の父は 1950 年その密貿易船の責任者として与那国に向かったが遭難。21 人が不明のままだ。現地へ着く前に、ガソリンエンジンが爆発したのではないかといわれている。

外務省により極秘文書公開が発表された翌日の 76 年 5 月 31 日の新聞各社は、これまでまったく知られていない事件が外交文書で明らかになったとして一斉に報じた。「30 年めの秘話」「秘められた事実」「外交記録と戦後秘史」「降伏めぐり日本人同士が衝突」「19 人惨殺の悲劇」など。独立前のインドには日本大使館もなく、この史実は一般国民ばかりでなく、発表時の日本外務省でさえも知らない秘録であった。外交文書公開後の 6 月、当時インド担当の外務省「アジア局第四課」に勤務していた武藤友治事務官は、訪れた記者から取材を受けたが、デオリの事件をまったく知らなかった。記者に見せられた資料を手にして、「『こんな事実は聞いたこともない』と仰天した」（『サンデー毎日臨時増刊』1976・6・15）。

その武藤友治さんは 1954 年に外務省に入省、当時インドの領事館に勤務し、シムラーに抑留された先輩はいた。3 年間の本省勤務の後、1957 年から 1964 年までニューデリーの日本領事館に 8 年。帰ってきた後のことだった。当時外務省の「アジア局第四課」課長の職に就き、おもにインドを担当していた。

公開された外務省極秘文書

「外務省が公開した外交文書の中に、インド関連の文書が存在したことを外務省でインドを担当する私が承知していなかったのは、まことに情けない話ですが事実です。驚いて、戦前からインドに関わり、アジア情勢に詳しい商社関係者に聞きましたが、まっ

たく彼らも知らなかった。これははからずも当時の外務省の情報管理体制の曖昧さを露呈したにほかなりません。まあ、第 1 回の公開文書ということで手続き上、完全ではなかったということですね」と語る。武藤さんは退職後インド史研究に従事し、今年 4 月末にお会いすることができたのだった。

元抑留者にとっては複雑だった。「いまさらこんな事件のことが報じられるのは喧嘩過ぎての棒ちぎれといった感じで、それよりも三千に近い日本人が 5 年近くもインドに抑留されていたという、当事者だけしか知らない事実を、日本全国に知ってもらえたことの方が大きい意義がある」と、自らが編集発行人として編纂してきた『インドワラ通信』（13 号）に記したのは、木村二郎さん（1906-1988）だ。

木村さんはシンガポールの邦字新聞「南洋日日新聞」の記者を経て「シンガポール日報」の記者となり、開戦と同時に妻と共に拘束され、1946 年の帰国後、国内・海外に連絡をとり、約 3000 人の消息をたどった。国内外に広がる会員の近況や消息などを記録した 20 余年におよぶ会員用に刊行された機関誌『インドワラ通信』第 1 号〜38 号(1966-1988)と、『スケッチが語る印度抑留記 』(1982 年)『抑留者名簿』などを刊行してきた。1988 年 6 月、81 歳で亡くなるまで後世に残す記録作りは続き、抑留生活の実態に迫る重要な資料となっている。

かつて全国各地に結成され、2 年ごとに全国大会（関東、関西、九州が交代で会場）が開催されていた「インドワラ会」も、現在存続しているのは「関東インドワラ会」だけで、抑留者の親族も加わって毎年親睦会が開かれている。会長を担っているのはデオリ抑留所で誕生した木村さんの長女、相原俊子さんである。

ちなみに冊子名の「インドワラ」とは木村さんが命名したもので、「ワラ」とはヒンディー語で「人」を意味する。「インドワラ通信」の存在を私が知るのは偶然、木村さんが亡くなった年の数ヵ月後のことであり、ご家族の同意を得てその年の 11 月 7 日、小田急線中央林間のご自宅へ資料を拝見に伺った。主なき仕事部屋には会員の消息をたずねるための戸籍抄本、役所などへの問い合わせ書類など膨大な資料が山積みされ、木村さんが果たしてきた足跡が残されていた。

連行される漁業者と在留民間人

糸満系漁民は太平洋戦争開戦の 1941 年 12 月 8 日の明け方、操業中の海上か港での作業中に所轄警察によって捕えられた。英領のシンガポール、インド、セイロン、ビルマ、マレーに在留した日本の人びとは、性別、年齢に関係なく拘束され、着の身着のままで港の埠頭倉庫に連行され、翌日には貨物船でマレー半島の西部にあるポート・スウェッテンハム（現在のポート・クラン）の簡易検疫所に移され、3 週間留められるが予想外の快進撃を続ける日本軍のマレー半島南下攻撃に、ふたたびシンガポール・セレタ軍港に引き返し、順次 12 月 20 日から 27 日までにチャンギ刑務所に収監される。チャ

ンギで 2 週間ほど過ごした日本人たちは、翌 1942 年 1 月 7 日シンガポールを出港、スンダ海峡を抜けて一部はカルカッタ（現コルコタ）、その他はボンベイ（現ムンバイ）に上陸、両グループとも 1 月 21 日から 24 日にかけてニューデリーへ送られた。

他方、女性と子どもたちは父や夫や兄弟など男性陣とは切り離され、マレー半島のセント・ジョーンズ島の移民検疫所に収容された。1942 年 1 月半ば婦女子たち 870 人はイギリスの軍船エチオピア号に乗せられ、ガンジス河をさかのぼってインドのカルカッタで鉄道に乗り替え、ニューデリーに着いた。1 月 25 日深夜、「プラナキラ」と呼ばれる城壁内の庭園に設置されたテント群で待ち受ける肉親と 1 カ月半ぶりの対面を果たした。

1942 年 7 月 14 日にプラナキラ抑留所へ提出した『馬来、ビルマ、及印度在留邦人被抑留者名簿』よれば、交換船による帰還者合計 731 人（実際は 720 人）、死亡者合計 51 人、残留者合計 2162 人、総計 2944 人の消息であった。残留組 2162 人のうち出身地別では沖縄県人が 457 人にのぼった。

第二次大戦中の日本人捕虜と民間抑留者に関するイギリス関連の資料は、外務省外交資料館に所蔵されている。以下の公開資料と聞き取りによって日本の民間人がどのように抑留されたのかをみていきたい。

「大東亜戦争関係一件　交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係」の中の「在敵国本邦人関係　在英（含属領）本邦人関係」（全三巻）、及び「大東亜戦争関係一件 交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題/在敵国本邦人収容所視察報告/在英ノ部」（全六巻）、「大東亜戦争関係一件 交戦国外交官領事館其他ノ交換関係/日英交換船関係（第一次）」（全六巻）がある。2014 年 1 月インド国立公文書館で資料収集に当たった。[Government of India]（インド政庁）中の External Affairs （外務省）と Home Affairs（内務省）さらに[War]の中に、被抑留者と戦闘捕虜に関連する資料はインデックス（索引）には記録があるが、50%は紛失状態。なかでも戦争捕虜と民間抑留者を担当した内務省のインデックスにはプラナキラ収容時の文書項目が豊富だが、Home Affairs（内務省）はほとんど紛失していた。なお先行研究として、林博史「インドに抑留された日本人民間抑留者」関東学院大学経済学部総合学術論叢『自然・人間・社会』第 25 号、1998 年）がある。

インド国立公文書館に残存する数少ない資料の中で、イギリス側が開戦より 3 ヶ月以上前に日本との戦争の可能性を予測していた電信記録を収集した。1941 年 9 月 1 日、日本人抑留者の取り扱いに関して、シンガポールの英国海峡植民地政庁の総督（Governor）は、インド北部シムラー（Shimla）の防衛局（Defense Departments）へ日本との交戦の可能性と、日本被抑留者（Japanese Internees）の受け入れに関して問い合わせている [2]。ちなみにシムラーは、イギリス植民地時代の「夏の首都」として夏季にはインド政庁の政府機関を避暑移動していた町である。電信送信者の海峡植民地総督

は英国国王の任命によって着任し、陸海軍の総司令官を兼ねていた[3]。「インド政庁（Government of India）は日本人受け入れが可能か。日本と戦争が起きた場合、マレー半島からの被抑留者の経費はすべて、植民地政庁が負担することになる。被抑留者を概算すると、最大で男性 2000 人、女性 750 人」とし、日本兵士捕虜（Japanese Prisoners of war）に関しても検討しており、シムラーの防衛局は 1941 年 9 月 9 日、ロンドンのインド担当大臣に確認している。「すでに確認済がとれた総人数を確定したい。ここに送還されたすべての日本の戦争捕虜は、この総人数の中に含まれていると思われるが、これ以上の受け入れは不可能である」[4]としている。

開戦以前に在留民間日本人の総数 2750 人を把握し、その拘束を検討しているインド側〈英国〉に対して、日本政府が入手した最初の情報は、開戦後の 1942 年 2 月 19 日、東郷外務大臣宛てにシンガポール総領事館委託の篠崎護によって報告された電信（20 日夜着）であった[5]。篠崎報告の冒頭には、日本軍によるシンガポール占領の翌日 1942 年 2 月 16 日午後、チャンギ監獄から他の日本人収容者と共に日本憲兵隊に救助されたとして、本人も含め 27 人の名前、年齢、出身地が記されている（沖縄県人 9 人、本土人 9 人、台湾人 7 人、朝鮮人 1 人）。さらに婦女子総員 1440 人、所在不明者 9 人。婦女子はセント・ジョーンズ島の移民収容所に移し、男子は全員チャンギ刑務所に収容、本館員（篠崎）は 12 月 22 日、他の囚人とともにシンガポール監獄特別禁錮室に移移された。…1 月 7 日、半島方面より合流した邦人を合わせると 1600 人（あるいは 1800 人ともいわれている）はセレター軍港を出発しコロンボ（スリランカ）へ護送された。二週間後に英国は、邦人がセイロン島に着いたことを正式に発表。一方婦女子はいまだ移民収容所にいるといわれていたが、1 月中旬以降にもインドに送られた様子だと報告している。

篠崎はイギリス軍の防衛状況の偵察にシンガポールを訪れていた参謀本部の作戦班長と航空班員の二人を案内したことからスパイ容疑で英国海峡植民地政庁に逮捕され、1941 年 9 月 14 日、禁固刑によってチャンギ刑務所に収監、獄中で開戦を迎えた[6]。

篠崎の報告の通り抑留者たちは、1942 年 1 月末、ニューデリーのプラナキラ城壁内の大庭園に設置されたテントに集められた。およそ 5 万坪の城内に 500 のテントが張られ鉄条網で囲われた。男子は 1 から 3 翼、子どもを含む女性たちは「婦人翼」呼ばれる別ブロックに分けられた。多くの漁業者を抱えた永福虎が経営する永福産業関係者は 2 翼に属し、永福が翼長を務めた。

2. 赤十字国際委員会の収容所視察「変化なし」

急増するマラリア・赤痢・突然死

赤十字国際委員会は各地の捕虜と民間収容所を視察し、条約に反するものには改善を

勧告する活動を行っていたが、日本は、捕虜の人道的扱いを定めたジュネーブ条約を批准しないままになっていた。「生きて虜囚の恥を受けず」という戦陣訓をもつ軍部の反対によるものだった。太平洋戦争開戦直後、民間人の救出を急務としたアメリカ政府はスイス公使を経由し、イギリスその他の政府はアルゼンチン代理大使を通して日本政府に条約の「適用」を要求した。それに対し日本は批准にあたる「適用」を避けてあいまいな「準用」（apply mutatis mutandis ）と回答した。この準用の目的は捕虜ではなく、日、米、赤十字国際委員会のすべてが非戦闘員である抑留者にその目標を置いていた。開戦当初においては、捕虜はともかくまず抑留者をどうするかが当面の緊急問題だったからである[7]。つまり交戦相手国はこの「準用」を、事実上の適用と理解し、それに応えたのが赤十字国際委員会のプラナキラやデオリ収容所の視察であった。

1942 年 7 月 10 日と 10 月 2 日に訪問している赤十字国際委員会の調査[8]では、「726 名ハ帰国シ 89 名ハ死亡セリ。現在ノ人員数 2137 名」そのうち入院中の 263 名、マラリア患者 71 名、赤痢及びその他の患者 19 名。町の病院に在る者は主として脚気を病んでいる。これだけの患者を出しながら「一般的状況ニ変化ナシ、取扱ニ関シテ不満ナシ」と報告しているが、事実とはまったく異なるものであった。

「キャンプに収容された後、バタバタと 160 名が死亡しました。病状の変化は早く、まず口がきけなくなり次に手足に麻痺が起こり、発作後 4 時間くらいで心臓が止まってしまいます。夜一緒に寝た友人が、朝起きたときには隣のベッドで一人静かに冷たくなっていたというふうで、抑留者に不安を起こしました。この様子に驚いた収容所側では、遺体を数体解剖した結果、ビタミン B 欠乏による心臓疾患である事が分かりました」[9]。戦前からの在留歯科医であり、日系マレイシアンとして日本人社会に貢献してきた川内光治氏の体験だけにリアルだ。

城壁内の天幕と洞窟で収容生活

「馬来緬甸印度ニ於ケル邦人抑留状況概要」[10]に記される詳細な記録を要約する。各地の在留邦人は、戦争勃発と同時にその居住地で抑留され、不当にもポート・スウェッテンハム収容所、チャンギ監獄に於いて、所持金、指輪、ネクタイ、ピン、メガネ、万年筆、写真機、安全剃刀などの所持品を取り上げられ、現在はインドニューデリーのプラナキラ抑留所に抑留させられた。輸送船では数百人を船倉に押し込め、不潔な船倉の床は所持の毛布またはアンペラ（むしろ）を敷いて間に合わせた。

プラナキラの抑留者数は、本年〈1942 年か〉3 月 1 日現在で 2912 名、そのうち 2500 名は天幕内に、その他の約 350 名は城壁洞窟内に収容されている。天幕に床張りはなく、地面に直接設けられており、各テントには 6 から 8 名を収容している。「寒気暑気及降雨ノ際ニハ甚ダシキ苦痛ヲ与フル状況」である。

食事は一日一人当たり米 17 オンス（481 グラム）、野菜 6 オンス（170 グラム）、肉

と魚は 4 オンス(85 グラム)、その他の豆、馬鈴薯、砂糖、油、塩、茶、薪なども品質は粗悪で栄養不十分である。医薬の配給も不十分で、赤痢などの蔓延はきわめて迅速で、8 月 5 日現在病人は 50 名。また死者に対する取り扱いも礼を欠き、城壁北部で監視に当たっている警官は収容中の婦女子に対し「投石其の他侮辱的行為セルコト屢々ナリ」と、抑留者の扱いの粗暴ぶりを記している。

同盟通信社の前シンガポール支局長、飼手譽四「印度抑留戦記」[11]は、戦時下に書かれた数少ない報告書である。「肉は半ば腐った水牛の肉だ。ほとんど食えた代物ではない。しかも比較的良い部分は兵隊の方で優先的にとってしまうのだ。我々に配給されるのは、決まって肋骨の部分だ。これを骨ぐるみ計って『これで 200 分』とくる始末だから、不味いうえにほとんど当たらないのが実情だ。野菜というと馬でも牛でも顔をそむけて歩くといった代物、半ば腐敗している。その上一度出始めると 1 週間、10 日はぶつ通しで同じものが配給される。…キャンプでは男 48 人、女約 60 人で一班を組織し、この班が炊事の単位にもなった。…時たま一片の肉がある事がある。ニコニコ顔で引き返す途中、印度の鳶が急降下してきて、バサッという羽ばたきと共に綺麗に肉だけをさらって逃げるのだ。幾度となしにこの頑敵のために悲憤の涙をしぼらされたものだ」。

『同盟グラフ』は戦時下の政府広報を担う機関誌で、戦後 GHQ により回収廃棄処分され「幻の戦時グラフ」といわれたが、現在貴重な文献として復刻されている。なお飼手譽四は、1943 年 4 月 15 日に東京商工会議所が開いた南方懇話会でも「印度抑留を語る」[12]と題して話している。デリーは寒暖の差激しく 1 月は日が落ちると零下になる。収容された 1 月はあまりの寒さに代表者が司令官に談判すると、数日して与えられたのは 1 人当たり 5 ポンドの枯れ草のわら。牛か馬の扱いであり、イギリス人がアジア人を取り扱うときは決して紳士ではないことを思い知ったと語っている。

3. 選ばれた捕虜交換船帰国者

領事館関係者、商社、銀行、教員、新聞記者

民間抑留者がプラナキラに収容される一方で、外交官とその家族の帰還に関しては早期から検討されていた。1942 年 4 月 24 日、バンコクの石井代理大使より東郷外務大臣宛てに「被抑留在マレー邦人帰来交渉促進方ノ件」とする電信が打たれている。日本軍占領の翌日「昭南島（しょうなんとう）」と改称され、軍政が布かれたシンガポールやマレー半島に長年居住し、同地区に精通する在留民がインド方面に抑留されているため、協力を得られず各種工作を実施する上で支障をきたしているというのが理由である。現地軍当局より本省において日英間抑留官民交換促進を要望しているので、取り計らいをお願いしたいとする依頼である[13]。

重要なのは人選の条件だが、日英間の「外交官等ノ交換ニ関スル提案事項」と題され

た文書によると、大使館、公使館員、領事館員、その他の官吏と家族及び従者を第一選考とし、「一般在留民」として 6 項目を挙げている。 (1)公吏其の他官吏に準ずべき者及公共団体より派遣された者並にその家族及び従者、(2)新聞記者並にその家族及従者、(3)商社及銀行の支店員、代表的在留民とその家族及従者、(4)宗教家、学者、学生並にその家族及従者、(5)婦女子及びその従者、(6)特別の事由ある者並にその家族及従者。つまり外交官とその家族、銀行員、商社マン、大企業関係者、教員を優先した。漁業関係者や個人商業者は選択の対象にすらなかった。帰国者は永福虎一族だけだった。永福が雇用者を置き去りにして先に帰還したことは、漁民たちを深く傷つけた。

収容所内の最大の不満はその人選方法にあった。表向きは収容所司令官の命令によるものと発表されたが、実際は商社企業者数人で決めたことが判明したからであった。岡本シンガポール総領事から電文を受けたのは、すでに交換船のメンバーに選ばれていた、三菱商事シンガポール支店長の徳田冨二であった。所長から手渡された電文の用件は、外交官交換船（Diplomats Exchange Boat）の客室にまだ余裕があるので、旧シンガポールの代表的な人たちでマレー、シンガポール方面の抑留者約 400 人の追加人選を委嘱するというものであった。「シンガポールへ来任 2 日にして抑留された総領事は、シンガポール日本人会の理事の顔さえ知らない上に、館員にも古顔が少ない。いくら職務といっても総領事でもやり得ない仕事である。…委嘱された人びとを呼び出して、所長事務所の裏の芝生の上で電文を披露して協議を開いたのである」[14]。

抑留者交換地はロレンソマルケスに決定

1942 年 5 月 4 日に日英間、日米間で抑留者交換の立案が成立し、抑留者の交換地は中立国、ポルトガル領のアフリカ南東部のモザンビークの首都、ロレンソマルケス（現マプート）に決定した。インド政庁は 1942 年 6 月 27 日の文書で「外交官交換船及びその他の救助船に関し、インド赤十字による兵士捕虜と被抑留者への食物及び医療品の早急な発送を検討している。なお日本政府との合意があれば（彼らは異議なしのはずだが）、日本人の手紙を交換船に託す郵便サービスに関しても検討している [15]。

選ばれた帰還者は領事館関係者 64 人、プラナキラ抑留者 720 人であった。他方、交換船に選ばれずに残された側からは当然不満が湧き上がった。収容所内では暴動寸前の様相をていした。この人選問題はと関係者の心には思い影を落としている。

2014 年 3 月 18 日、朝日新聞の読者欄（声・語りつぐ戦争）に「商人の父インドに抑留された」と題された大田武夫さん（岡山県）の投稿が、私の目に飛び込んできた。捕虜交換による人選に関し、こう書き記されていた。「外交官や商社、銀行関係者が優先され、父のような一般人には機会がありませんでした。戦争が終わり、ようやく戻ってきた父はまさに日焼けした骨皮筋右衛門でした」と。

投稿者大田武夫さんの父、大田豊巳さん（1890-1965）は明治期に渡航し、シンガポ

ールで邦人ゴム園用達商を営み、家族を形成していた。1941 年の開戦で抑留され、発砲事件の勝ち組負け組抗争の詳細をはじめ貴重な体験記録を書き残している。私からの連絡に応えて下さった武夫さんは、ていねいなお手紙を添えて貴重な記録を送ってくださった。その記録には帰還人選に関し「残念ながら吾人大部分は大不平の元に居残り組となる。…人選問題に関しては審くべき事柄多きも今更何おかせん此処に略す」と、吐露している。武夫さんは、「戦後の秘話」に終わらせたくないという父の強い意思を感じている。

他方で先の早期帰還要望にあるように、軍政を促進するために抑留者たちの経験と知識を必要としたのも事実で、交換船による先発組の一部は日本軍への協力を要請された。

『インドワラ通信』第 22 号には、前号の「…先発の問題だけがいやな思いとして残っている。…胸糞が悪い」という投稿に応える形で「先発で還ったが―」と題して、11 人の体験が掲載された。1 例として「現役兵として現地入隊、仏印ハノイ勤務となり、高射砲部隊の一員として飛行場の防空任務に従事、幾度かの死線を越え、20 年 8 月 15 日終戦を迎えてふたたび捕虜に身となり、21 年 4 月ハイホン港より日本の土を踏みました」など 11 人の体験が掲載された。元石原産業、正金銀行、三五公司、日本鉱業の社員たちであった。

なお 1942 年 7 月 14 日にプラナキラ抑留所へ提出された㊙史料『馬来、ビルマ、及印度在留邦人被抑留者名簿』（抑留者の小林博技師によって調査作成された名簿で第一次帰還組の小林氏が秘密裏に持ち出した貴重な記録）では、抑留者総計 2944 人で、上記外務省報告の同年 3 月 1 日現在数 2912 人と、3 カ月で 32 人の差がみられるが、誕生による増加、調査漏れなどの誤差と判断される。当名簿では総数のうち第一次帰還者合計 731 名（実際は 720 人）、死亡者合計 51 名、残留者合計 2162 名となっている。第一次抑留者交換船に選ばれなかった残留組 2162 名の内訳をみると、マレー、ビルマおよびインド在留の日本人、台湾人などなどであって、このうち漁業者は家族をふくめて 508 人で全体の 17%を占めた。交換船に関して漁民は最初から選別の対象にすらならなかった。

利益代表国を介して日本政府抗議

プラナキラに立ち寄り、自ら確認したニューデリーの抑留者の状況を知った岡本季正シンガポール総領事は、ロレンソマルケスの途上でスウエーデン公使赴任の命を受ける。1942 年 9 月 2 日、ロレンソマルケスの港で交換船を見送り、抑留者の実情をいち早く日本に知らせるため、同盟国であるイタリア領事に依頼し、現地を統治するポルトガルに駐在する千葉日本公使から日本の東條外務大臣に電報を打ってもらった。翌 3 日夜に届いた電報によって、日本政府はプラナキラ抑留所の具体的な状況を初めて知ったのである。電報の内容は、

（一）本官ら（岡本、磯野両総領事）が、1942 年 8 月 28 日にロレンソマルケスに到着するまでに 720 名の帰国者中、死者 6 名が出たこと。

（二）インドに於ける収容中の邦人 2100 名の邦人テント生活は最下等の扱いで、栄養不足と最悪な衛生設備で赤痢が流行し蔓延し、目下 50 名の患者がいるが医療が行き届かず前途憂慮に堪えないこと。

（三）第二回帰国者に関しては一定の分類をしてあるので、右表の写しは乗船中の瑞典（スウェーデン）代表に依頼し、在印度瑞典領事へ公布方を依頼してある（注・2 回目以降の交換船は実現していない）。

この電信を受けた徳永太郎スイス駐在代理公使は、1942 年 9 月 9 日付ベルン発で東郷外務大臣あてに電信を打ち、英国政府に対し厳重な抗議をするべきだとし、赤十字国際委員会に対しても、岡本総領事らのリスボン到着を待って、再調査を依頼する旨の電信を送り、スイス、スペイン、スウェーデンの日本公使館へ転送したことを付している。

直ちに東郷外務大臣は、1942 年 9 月 14 日徳永スイス駐在代理公使に「在印度抑留邦人ノ待遇ニ関スル対英抗議ノ件」として返信。

英国政府に対し強く抗議するとともに、同政府より印度政府に対し在留邦人の待遇改善を至急指令することを要請するというもの[16]。日本政府から英国政府に対するはじめての抗議であった。

日本政府からの抗議「在印度抑留邦人ノ待遇ニ関スル対英抗議ノ件」はスイス政府を通じて英国政府に伝えられ、英国外務省はスイス総領事を通して返信した内容が、1942 年 9 月 17 日発のストックホルム本省の神田代理公使から谷外務大臣に送られている[17]。

英国政府の対応―日本の要求は誇張

抗議を受けた英国政府から回答が出た。「在ボンベイ・スウエーデン総領事より電報があったので英国外務省より左のとおり回答した」とする通信内容は以下のとおりである。英国同総領事はデリーを往復するたびに日本人収容所を視察しているが、インド当局は寛大な態度で、正当な要求はすべて受け入れているとし、抑留者の取り扱いは人道的であり、収容所当局も種々意を払っている。食事の量と質は改良し、抑留者代表の希望に基づいているので、電報の要求は誇張である。さらに衛生状態は引き続き改良されている。施設の不行き届きは戦争によるもので、病者数の特に多いとは見受けられず、収容所当局が施設をなおざりにしているという報告は根拠がない。この点に関しては同イギリス総領事が抑留者代表との会談の際にも、抑留中の日本人医師達や抑留者自身からも何ら依頼を受けたことはないとしている[18]。

つまり日本側からの要求は「誇張であり」「根拠もない」というのが英国側の調査結果であった。しかし実際には食料不足は慢性的に続き、脚気性心臓麻痺による死亡者は続出していた。見過ごせない状況の中、日本政府は 6 項目に分けた具体的な抗議をスイ

ス政府経由で行った。天幕、食糧、厨房、水浴及び洗濯場、衛生設備、療養施設に整理した抗議に対し、イギリス外務省のコメントが 12 月 17 日付けでスイス政府公使より知らされる [19]。英国側の態度はやや軟化し、改善の姿勢がうかがえる。

1. 天幕、総数は 468 あり、軍隊標準型天幕で 1351 名の男子収容者に対する設備である。この天幕は英仏両兵に使用したものである。火鉢及び日覆は寒気と暑気に対し供給されている。天幕は暴風雨により 2 回倒潰したが、天候は恒久建築でも被害を与えるものだ。
2. 食糧、食糧はインド兵に供給するものと同じ分量だが、3 月から 8 月の期間は陸軍省の配給率に変更した。これにより収容者代表の申し出に一致した。お茶も増量した。
3. 厨房、いずれ新築するが、雨もりおよびその他の故障は報告あり次第修繕する。すべての建物がモンスーン中は雨もりする。
4. 水浴及び洗濯、インド軍と同様の設備で、浴槽 60 個は洗濯両用として与えている。洗濯用建物には 3 から 4 の水栓があり、給水不十分との苦情は正当ではない。6 月と 7 月の濾過水消費量は 1 カ月平均 2690 ガロンから 1417 ガロンとなり、平常許可量の 3 倍になるが、使用量は制限していない。
5. 衛生設備、用便所 90 設けてあり、老齢者および病人に対しては、出来るだけ便所と厨房付近に住まわせるよう努めている。
6. 療養施設、施設満足にして適当との報告を得ており、収容所が不衛生との一般申出に関しては、確かに言われるような非衛生的収容所が首都内にはあるが、ニューデリーの健康が危機に導かないよう指導している。

シンガポールのクイーン・ストリートで上原清次郎一家と同じ住居で暮らした国頭郡本部村出身の山川宗由さん（明治 37 年生まれ）は、抑留されたプラナキラで腸チフスにかかって病死した。シンガポールへ渡航し、追込網の金城組に所属、生活が落ち着いた 1935 年に妻のウトさん（当時 27 歳）と長男の宗幸さん（当時 4 歳）を連れて沖縄本部村を後にした。上原家の従兄弟たちとともに遊び、通学した仲だ。

1941 年家族に帰国命令が出て、宗幸さんと現地で生まれた二男宗信くん母子は沖縄に戻った。そして父の消息が途絶えて 2 年、大城組の責任者だった玉城亀壽さんから、突然、宗由は 1942 年初めにニューデリーの抑留所で腸チフスにかかって死去したとの知らせが、交換船に託されて届く。前出のインド政庁が検討していた手紙を交換船に託す郵便サービスによるものだった [20]。1943 年 4 月 5 日のことだった。一家は宗由さんがインドに抑留されていたことをはじめて知る。この日を決して忘れないと語る長男の山川宗幸さんは、戦後 70 年を経て改めて父への思いを募らせる。

父の死亡知らせを受けた年、宗幸さんは那覇の旧制開南中学に入学した。沖縄県では唯一の私立中学で、校舎が那覇大空襲で焼失、教職員と生徒は鉄血勤皇隊に編成され、多くの者が戦死し廃校となった。戦後旧制中学の校名と敷地を引き継ぐ形で開南小学校

が開校した旧制中校だった。

「その時分、沖縄ではいつも銃声が鳴り響いていました。翌々日から新学期が始まるので、名護から嘉手納まで歩き、軽便鉄道に乗り継いで那覇の下宿にたどり着いた途端、父の死の知らせを受けました。とんぼ返りで名護の家に戻り、仮の葬儀をしました。遺骨は親方の亀壽さんが帰還の折に持ち帰ってくれました。父が生まれた国頭郡本部の生家は貧しく、10 歳で糸満売りされたそうです。長男の父と兄弟姉妹 5 人全員、売られたそうです。父はシンガポール、弟は旧委任統治領であった南洋へ。親父が糸満売りされた話は最近知りました。命綱にくくられて海に投げられて、泳ぎを教えられたそうです。母は本部の出身で紡績に行った経験があります」と、父の悲惨な人生を考えると胸が潰されそうになるという。

3. 砂漠の地デオリ収容所へ移動

死者と誕生の歳月

1943 年 3 月、インド当局は死亡者が続出するテント抑留のプラナキラからアジメール州（現ラジャスタン州）コタ近郊のデオリ収容所に邦人を移すことを決定する。この収容所の前身は反英運動で逮捕されたインド人政治犯を収容する監獄であり、レンガ造りで公的な軍隊用の宿舎であった。第二次世界大戦当時は日独伊など敵国人収容所として機能していた。

移転は 3 月 13 日より開始、4 月 13 日頃までに終了する見込みであることが、在ボンベイ・スウェーデン総領事より電報があった旨の内容である（1943 年 3 月 31 日発）[21]。

抑留者たちは、1943 年 4 月 11 日、1 年 3 カ月過ごしたプラナキラ城を後に、3 台の軍用トラックに分乗してニザムデイン駅へ。護衛付きの三等列車で 13 時間、翌日未明にコタ駅到着。さらに 3 台のトラックにすし詰めにされて 3 時間余り、4 月 14 日の午前 10 時半、3 日間かけてデオリ収容所に到着する。

居住表示の基準となる区画（ブロック）は翼（wing）と呼ばれ、1 翼から 6 翼まであった。開戦当初は日本と同盟国のイタリア人戦闘捕虜が 3 翼、ドイツ人戦闘捕虜が 5 翼に、アジア人の船員とレジスタンスマレー人が一時的に 6 翼にいたが、ドイツ人らはデオリの猛暑は耐えられないとストライキを決行し、日本人が到着した 10 日後にインド北部のデラドゥン（Dehradun）へ全員移動、結果的に 1 翼、2 翼、4 翼を使用した日本人収容所となった。

翼内の集合家屋（棟）はバラックと呼ばれ、1 翼は家族世帯のブロックで 17 棟のバラックからなり、労働力として沖縄出身者を含む独身男子が 16、17 バラックに居住した。2 翼は家族世帯と女性独身者、配偶者のいない母子、台湾人の居住地区で 11 バラックを構成した。4 翼は男子専用のエリアで 13 バラック、全体で 41 バラックであっ

た。

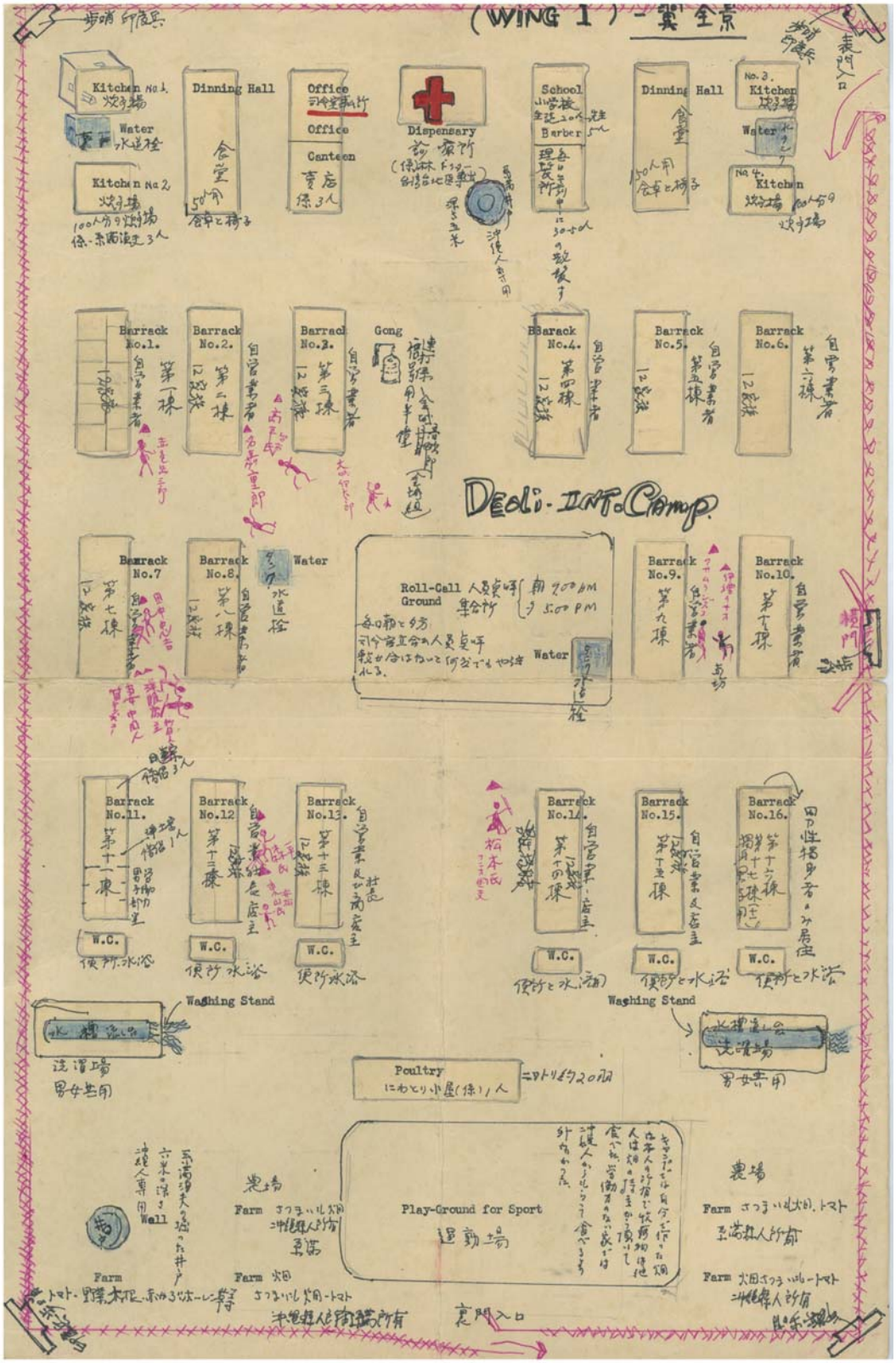


図 1　坂本謙一作、デオリ収容所 1 翼全景

デオリ移動 2 カ月後の 1943 年 5 月 11 日と 12 日の二日、赤十字国際委員会が当抑留所を視察している。訪問者は「エー・デスピンドラー」、収容所の名称は在デオリーアジメール州日本人収容所（Japanese Internment Camp,Deoli /Ajimer）であった [22]。

1943 年 5 月 12 日の収容人員は男子 1343 人、女子 580 人、子供 178 人、全収容人員は 2101 人。うち入院患者は、マラリア 39 人、下痢 7 人、脚気 4 人、肺結核 8 人、がん 2 人など計 78 人となっている。抑留されて 2 年、多くの死亡者を出すと同時にデオリで誕生した子どもたちも増加、178 人の子どもの存在には驚かされる。

さらに調査書は施設と食事に関して以下のように報告する。バラックは改築され、屋根はモンスーンや大雨にも雨もりしないよう修繕された。さらにバラックの様式は気候を考慮して建てられ、屋根は高く両側の壁の上部には新鮮な空気を入れる窓を開けてある。屋根付きベランダはバラックの両側にあり、収容者はこれを利用することができる。バラックの屋根は煉瓦の角柱が 2 列で支えており、両列(棟と棟の)間隔は 6 メートルある。

食事は 1 日 2 回。1 人 1 日の配給は馬鈴薯、野菜、米、肉、魚、調味料、薪など合わせて補給費として 1 アンナ半（16 アンナ＝1 ルピー）。価格が騰貴していることを考慮すれば少ないのは当然である。抑留者によれば、食糧欠乏のため、特別の料理を作ることは不可能だというが、私（デスピンドラー）の印象では炊事班の内部的問題で、炊事班自身の考えで料理を作らず各人の希望を聞くべきである。多数の抑留者は、適切な食物を得ることができないと訴えているが、収容所当局としては、日本人を欧州的または半欧州的様式の生活をした者と、アジア的様式の生活をした者を区別することは不可能である。いかなる食事を作るかについての議論および嫉妬は際限なく、満足な解決を与えることは不可能で、現在の方法が最良であると考える。しかし実態はこの赤十字国際委員会の報告とはあまりに違っていた。

野菜栽培と動物捕獲で栄養補給

持続する食糧不足を補うために抑留者による炊事当番は、キャンプ内の動物を蛋白源の補給として捕獲した。デオリで食べた鳥類、動物として、カラス約 1500 羽、トビ約 100 匹、野良犬約 230 頭、赤犬は沖縄人が好み 3 年間で 200 匹、うさぎ約 50 羽、食用蛙は約 8000 匹を食した [23]。

「熱風黄塵の中で毎日玉ねぎばかりのおかずだった。玉ねぎの天ぷら、玉ねぎの卵揚げ、玉ねぎの煮しめ、玉ねぎの漬物、と玉ねぎ漬けでトイレまでも玉ねぎ臭くなった程だった。そのため栄養が偏りピンピンしていた若者が心臓脚気でバッタリ倒れて亡くなったり、多くの人がシビレになって入院したりが続出した」[24]。

野菜不足を補うためにイギリス軍は、抑留者たちを野菜栽培に従事させた。やがて日

本人好みの白菜、大根が収穫されて、炊事場は大喜びだった。植えたパパイアの種は大樹になって実をつけた。

糸満出身の両親と妹、プラナキラ生まれの弟とともに抑留生活を送ったデオリ収容所内の国民学校初等科の宮城正次くん（1936 年生まれ）も、デオリ第一小学校のつづりかたで「パパヤ」と題した詩を書いている。

「パパヤがなった　おいしそうな　青いパパヤがなった　一日一日大きくなった　うれてから僕達が食べると　パパヤはいたいでせう」[25]

（「デオリー小学校のつづりかた集」『インドワラ通信』第 6 号）

ちなみに沖縄ではパパイアはパパヤと呼称し、熟す前の青パパヤは野菜として用いられる。

さらに、エー・デスピンドラーは、漁夫に関してふれている。「秩序」の項で「収容者中多数の「グループ」特に漁夫は無秩序にして他の収容者との連帯観念もなき様に見受けられたり。収容所長は「デリー」前収容所長と同様所内の秩序を維持する為刑罰の処置を講するの止むを得さるを言ひ居りたり。以前は抑への利く日本人ありて秩序維持につき同所長に援助を与へたるか全部帰国せる為現在右は中々困難なる由」などとのべている。

しかし、肉、魚などの解体を含め炊事の主軸として労働していたのは、沖縄漁民だ。抑留者の坂本謙一さんの絵図メモによれば、農作物に必要な灌水のための井戸も「糸満漁夫が掘った 6 メートルの深さの井戸」があり、労働力のない家では沖縄人からもらって食べる以外なかった」と記録している。

さらに「各翼には沖縄県人（糸満）を配し、労働力の不足を補い」、1.薪割り（材木を燃料とする）、2.炊事場の仕事全般、3.畑仕事、野菜、さつまいも、落花生など、4.料理、山羊の解体、魚の調理など、5.使役の割り当て（当番）や病人の代わりなど、代償なしで好意的に行う、6.食料の配分配給」と記す。抑留寸前まで永福産業漁業部門の社員として沖縄漁民に関わった坂本謙一さんだけに具体的だ。おそらく沖縄漁民に関する記録では唯一の記述といえる。

赤十字国際委員会は上記視察に引き続き、1943 年 11 月 19 日、在ボンベイ・スウェーデン領事館員ポール・エクストレームがデオリ抑留所を視察している [26]。手書きの修正入り訳文を判読すると、エクストレーム領事館員は視察に出発し、当初は週末だけ滞在する予定だったが、諸設備の苦情を完全に調査して欲しいとの所長からの要求で、予定を 3 日超過して視察を行った。抑留者の状況及び福祉に関して、各棟の代表と長時間にわたり会談した。各廠舎は十分な間隔を置き、空き地は庭園と菜園として利用しており、清潔、整然な印象を与えている。

なおインド政庁はデオリを模範的抑留所としようと努力し、莫大な金額を費やしてい

る。イギリス本土から到着したばかりの抑留者は、デオリはイギリス内でも最良の抑留所に匹敵すると述べていることからもその努力は証明されると、同領事館員は評価をしている。設備、食糧、支給金、トイレ、病院、食堂、炊事場、休養、娯楽、教育、宗教についてくわしく視察報告を記録している。抑留所内の患者状況を 10 月 3 日より 30 日までの週別の患者統計を挙げている。10 月最終の 4 週目ではマラリア 68 名、インフルエンザ 2 名、下痢 2 名、精神疾患 1 名、消化不良 2 名であり、10 月週平均の患者数は 2100 名の抑留者中 77 名で、約 3.5%となる。この驚くべき少ない数字は抑留所内の状態が優秀な事、抑留者の健康と福祉が申し分ない証明であるとしたこの報告は、翌 1944 年 5 月 31 日付で、スウェーデン政府の公信を通じて受けた岡本公使は、同年 9 月 9 日、自らの印象を日本の重光外務大臣に打電している [27]。

記録に見える日本占領地の慰安婦

資料で確認できるデオリ抑留所最後の赤十字国際員会視察となる 1945 年 2 月 10 日から 13 日の英文報告書に、収容者に関してこれまでと異なる記述が私をとらえた。日本人が収容されていた 1 翼、2 翼、4 翼のほかに、翼を表す箇所に‘A’Isol（Isolation か＝隔離）Hospital：（A 隔離病棟）と新たなブロックが追加され、ビルマ戦線で日本軍から取り残された Japanes Koreans〈’ex　comfort Bn‘〉（日本占領地の慰安婦）として 22 人を加えて全収容者 2125 としている [28]。

抑留者も「1944 年 10 月 25 日、女子 20 余名（朝鮮籍）到着」[29]と記録し、坂本メモにも「印度に送られてきた女性慰安婦 30 人」と書き記す。

この棟では、彼女たちの他に、「からゆきさんの生き残りや、料理屋の仲居や芸者、外国人のセカンドワイフなどの人びとが約 100 人いて固まって暮らしていた」[30]（『からゆきさん　おキクの生涯』）とある。この書の主人公、おキクさんとは善道キクヨであり、先の『馬来、ビルマ及印度在留邦人婢抑留者名簿』に記載されている実在の人物である。

さらに坂本道弘さんは、「勝ち組の暴動があったとき、サレンダー組は危険ということで兄たち三人は早々にゲート外に移されました。一人残された私も周囲の人たちの勧めで移動しました。その場所が病理棟の敷地内に設置されたキャンプでした。そこから 20 メートルほど離れた棟に女性たちが 2,30 人住んでいました。衣類が上下白い服だったので、一般の抑留者とは異なり、子ども心に不審に思っていました。その人たちが実は朝鮮の慰安婦だということを伝え聞いたのは帰国してかなりたってからでした」と語る。彼女たちもまた、敗戦の翌年まで隔離された拘束は続いた。

4. 糸満漁民の移住地で「抑留者名簿」

マレー出身の抑留女性の出会い

ここで私がインドの「2.26 事件」を知ることとなった経緯と、一人のマレー出身の女性との出会いに触れておきたい。1980 年代中ごろ、私は字糸満の漁民集落に固有に形成された糸満漁民の「門（ジョーウグヮン） 御願」が、八重山の糸満系漁民によって営まれることを知り、何度か石垣島を訪れていた。沖縄本島の糸満漁民は明治期以前から八重山海域に出漁し、やがて定着して漁民集落を形成してきた。

その代表的な登野城地区と新川地区以外に、石垣島の西方約 15 キロに位置する八重山群島の離島でも御願が営まれているという情報を得て 1988 年 3 月 27 日、小浜島に渡った。目的の地は島の岬の突端に形成された 細崎（くばざき） という小さな集落である。明治末期から大正期にかけて糸満漁民を中心に沖縄本島の漁師が入植し、カツオ漁の基地として栄え、労働力として糸満売りによるヤトゥイングヮ（雇い子）が送り込まれた漁村である。88 年当時 23 世帯が住む小さな集落で営まれる旧暦 2 月年頭のジョー御願の現場に臨んだが、それはいささか予想外の展開をみせた。

御願の準備をしていたのは、褐色の肌と大柄な容姿のマレー女性だった。ダラ・ピンチ・マンソールさん（1921 年生まれ）。マレー半島ジョホール州カンポン出身の、日本名・大城テル子、異国出身の糸満アンマーであった。夫である糸満出身の漁師、大城次七郎さん（1912〜85 年）は、細崎一のたこ捕り名人として名をはせた人で、1985 年 2 月 13 日、64 歳で死去。

私が訪ねたとき、ダラさんは次七郎さんを亡くして 3 年目のひとり暮らしの日々だった。周囲からは「テル子おばあ」「テルー」と親しまれ、ジョー御願を迎えたこの日も朝から供え物作りに追われていた。豆腐、大根、魚の天ぷらなどを奇数個詰め合わせたカテムン重（料理の重箱）、セイロで 30 個の餅を蒸かし、地元民もヤマトゥンチュの妻たちも山と積んだ餅を井戸に供えて、テル子おばあのウチナーグチの祈りに従っていた。

私が細崎滞在中、ダラさんは 1 冊の古びた名簿を取り出して見せてくれた。『インドワラ名簿』（第 10 号、1985 年発行）と記されていた。これこそインド抑留者の解明のカギとなった資料だ。細崎から戻ると、私は『インドワラ名簿』から連絡のとれそうな関東圏内からリストアップしたメモの中から、横浜市在住の坂本謙一さん（当時 77 歳）に連絡をとった。

私の近隣地区在住者を条件に選んだだけで坂本さんの経歴はまったくつかんでいなかった。沖縄で会ったダラさんのこと、名簿のことをお伝えすると、ひどく驚かれた様子だったが、早急にお会いしたいとの申し出に私のほうが慌てた。私の取材ノートには 1988 年 11 月 5 日、横浜駅近くのホテルで面談したことが記録されている。

初老の大柄な紳士は、写真やご自身の記録などを持参して現れた。なんと氏はシンガ

ポールの日本人漁業の中心をなした永福虎（鹿児島県出身）が経営する永福産業株式会社の漁業部門に勤務、いわば漁民の管理を担当していた人物だった。坂本謙一さんは用意した記録を片手に一気に話し出した。

「日本人のインド抑留が裏面史として消滅されてしまうのは堪え難い。私も含め捕囚体験は家族にも話さない」。その思いを私に託され、坂本謙一さんは 2000 年 3 月に亡くなられた。

海人と生きたマレー妻の過去

坂本謙一さんからの聞き取りと手渡された資料から、石垣島細崎のマレー女性、ダラ・ピンチ・マンソールさん（日本名・大城テル子さん）の事情も知ることとなる。今は亡きダラさんの夫、次七郎さんは、16 歳でシンガポールのアギヤー（大型追い込み網漁）組織に入り、開戦の日に捕らえられインドへ送られた。他方ダラさんは夫である長崎市出身の理髪師、上本勝国（1919 年生まれ）と共に抑留され、夫はデオリ収容所で勝ち組の急先鋒（せんぽう）として活動し、先の 2.26 事件で射殺された。

収容所内でのダラさんは夫婦者に割り当てられた 1 翼の 14 バラックに住み、次七郎さんは独身男性の 4 翼の 13 バラックが居住地だった。ブロックの異なる翼同士の交流は禁じられていたので、2 人はそこで出会うことは考えられない。しかし引き揚げた戦後を 2 人は細崎で夫婦として共に暮らしたのは事実であった。

ダラさんの外国人登録証明書によると、1946 年 10 月 25 日に沖縄県石垣港に上陸している。抑留当時ダラさんと同じ 1 翼の 14 バックに住んでいた女性が書いた文章がある。

「…14 バラックの死者は 3 名だった。松本さんと勝国君は共に兵隊に突進して行き銃弾に倒れたのだった。翼内での悪夢の日も去って 1 週間程したころ、洗濯場で私の横に近寄って来て腰を下したダラ・ピンチ。…主人勝国君を失ったダラは青黒い顔でバケツの中から紺色のスポーツシャツを出して見せた。蜂の巣の様に射抜かれた弾丸の穴を、サト（マレー語で 1）、ドア（2）、テイガ（3）と一つ一つ指先で確かめながら、最後にスブラス（11）、と力なくいった」（松尾春子『インドワラ通信』第 24 号）。

そんな彼女がなぜ細崎に定着したのか。その真相は知る由もないが、細崎に住む次七郎さんの弟である次八郎さん（1913 年生まれ）と妻のヨシ子さん（1921 年生まれ）によると、次七郎さんはダラさんを「ついてきてしまったんだ」と笑って話したという。路頭に迷うダラさんを見過ごすことができなかったのだろうと、弟夫妻は推察している。

詳細は不明だが、永福産業の追い込み網漁に従事した次七郎さんは、ダラさんを連れて敗戦後石垣細崎に戻った。親族や近隣者は当然驚いたが、次七郎さんは一言の言い訳もせず、伴侶としてダラさんを守りひたすら漁業に精を出したという。

伝統ある糸満の門中墓に葬られる

何度かの細崎訪問の折、テル子さんは私に聞かせるともなくつぶやいた。

「うちも死んだら糸満の次七郎と同じ墓に入るよ、だからさびしいことはないさあ。毎朝、とうちゃんの仏壇に願うよ。うちをしっかり守っておかんと、あんたにお茶を供える人がおらんようになるよってね」。

そしてまたふるさとへの遙拝（ウトゥーシ）も欠かさない。島の東方をマレー半島ジョホール州と定め、前夫と両親に手を合わせると語り、彼女は褐色の頬に優しい笑みを浮かべた。すっかり沖縄のアンマーの顔になっていた。

以来、この人の存在が私の心に重くのしかかっていた。風の便りで訃報を耳にしたが、糸満の門中墓に彼女が入る可能性はあるのだろうか。その行く末が判明しない限り、インド抑留を知るきっかけとなったテル子さんに触れることはできないと心に決めていた。しかし今回の調査で答えは出た。彼女は大城次七郎の妻テル子として宇那志（ウナシ）門中に属し、上米次腹（ウィグムチバラ）（宇那志（ウナシ）、玉城（タマグスク）、保才（フセー）、座久仁（ザクジン）の四門中の共同の墓）に祀られていたのだ。次七郎さんの縁戚にあたる大城政四郎さんから確認がとれた。

「次七郎とテルー夫婦は、宇那志門中の墓に入っていますよ。テルーは次七郎のトゥジ（妻）だから当たり前さね、門中では夫婦として認められているよ。次七郎は、まじめな人だからね。独身でシンガポールに漁に行き、インドに抑留されて、縁あってテルーを連れて帰りトゥジにした。次七郎が亡くなった後も、テルーはきちんとウサカティ（祖先崇拝、祭祀の分担金）は納めて門中シンカとしての義務は怠ることはなかった」と大城政四郎さん。

次七郎さんは八重山での門中行事には欠かさずダラさんを伴った。また 1 年に 1 度は親元である糸満上之平の徳宇那志に出向き、政四郎さんの母、ウシーさんがテル子さんに御願の供え物や祈り方を教えていたという。

習慣に従って数年は細崎仮墓に埋葬されていた次七郎さんとのテル子さん夫婦の納骨に関わったのは、六男弟、満太郎さん（1926 年生まれ）の妻、大城富さん（1941 年生まれ）とその長女、仲宗根信枝さん夫妻だ。毎年旧暦 9 月 20 日に行われるジョーアキー（墓開き）の日に会わせ、糸満市真栄里にあるトーシー墓（当世墓・本墓）に合葬したという。

大城次七郎という寡黙で気骨ある糸満ウミンチュの意思と死生観が浮かび上がり、一気に私の胸のつかえをぬぐい去ってくれた。

5. 初回のデオリ調査依頼は混乱

帰国後に許可再び訪問

糸満漁民が生み出した独自の「ジョー御願」は、私を「インド抑留」という戦中戦後

の史実へと導いていった。一昨年の 2013 年 2 月には糸満漁民が住んでいたシンガポールとマレーシアを訪ねた。

そして昨年 2014 年 1 月にはインド国立公文書館で、インド政庁（Government of India）関連の資料収集にあたった。インドで最初に抑留されたニューデリーの「プラーナー・キラー」（Purina＝古い、Qila＝とりで・城）へも出かけた。16 世紀半ばに建立された古いとりでであり、ムガル帝国第 2 代皇帝フマユーンの都城であったとされる茶褐色の城壁がそびえていた。

広大な庭園の中に 3 千人が収容されたテントがはられたのだ。いまは知る人もなく、古城の西側にあるモスクの礼拝堂（Khair‐U，L‐MANAZIL MASJID）では、祈るイスラム教徒の姿があった。長い祈りを終えたひげが印象的なムスリムに、大戦中古城の中庭に多くの日本人が抑留されていたことを伝えると「聞いたことがない」と、驚きの表情をみせた。

最大の目的は元デオリ収容所（現在はインド内務省が管轄する中央産業安全保障部隊の訓練センター（CISF REGIONAL TRAINING CENTRE（RTC）DEOLI）として国家の重要な機関となっている）の訪問だった。あらゆる手だてを求めて走り回ったものの、交渉の過程は混乱した。当センターの最高責任者から、日本から研究者を迎えるとなると内務省の許可を取る必要があるので「調査依頼を政府に提出してある」との返事が、仲介してくださったネール大学の Sushama Jain 教授から知らされる。

ところが日本のインド史研究の専門家は口をそろえて「内務省の許可などまず不可能だ。とりあえず現場で交渉する以外ない」との進言で、私の二男とその友人でヒンディー語を話し、北インドの打楽器タブラ奏者の広本雄次さんが同行してくれることになった。幸運なことに雄次さんはヒンドゥー教の聖地、バラナシで開催されるコンサートに出演するため訪印中だったのだ。

強力なサポーターを得て、デリー→ジャイプール→トンク→デオリと列車とローカルバスを乗り継つぎ 3 日がかりで現地入りしたのが 2014 年 1 月 27 日。

バスストップから 30 分ほど歩くと、そのゲートはそびえていた。私の胸は高鳴った。これから歴史に埋もれたままだったタイムトンネルをくぐるのだ。前日の 26 日はインド最大の祝祭日、リパブリックデー（1950 年に主権国家となった共和国記念日）で、当日を避けての訪問だったが、この日も継続で閉館。危うく頑強な体格の軍人から門前払いされそうな雰囲気の中で雄次さんの交渉は続いた。

彼はこういったのだという。「私たちは長い時間をかけてそれは遠い国、日本から来たんだ。あなたは日本を知っているでしょう。せめて上官に取り次いで欲しい」と。閉ざされたゲートが開けられ、高官事務所に通された。当番の司令官は労をねぎらい部下に命じてチャイを運ばせ、話を聞いてくれた。

結局内務省への交渉が継続中では、私たちにはどうしようもないということで、内部

取材は受けてもらえなかった。しかし構内の雰囲気と感触はつかめたし、変貌したデオリの町並みを散策しただけでも大きな収穫だと納得することにした。

事実、かつての砂漠の中デオリは CISF の訓練センターが設立されたことで、インターナショナルスクールや映画館、古物店、食品店、日用雑貨店、理髪店などが並び、色彩あふれるにぎやかな町になっていた。

ところが日本に帰国して 17 日目、不可能とされていた許可が届いたのだ。「Ministry of Home Affairs（GOVT．OF．INDIA（インド政庁内務省）によって、ご要望である CISF RTC デオリへのあなたの訪問が承認されたことをお知らせできることは私の喜びです」と、センターの最高責任である Inspector　General（監察総監）の署名入りの文書が添付されたメールを受信したのだ。

訪問を計画し、日程を知らせるようにという文面を繰り返し読みながら私はぼうぜんとしていた。２週間、全精力を使い果たしたあのデオリへとんぼ返りしろというのか。しかしチャンスを逃したくはない。もはやだれの援助も受けられるはずもなく、1 人旅を覚悟してビジネス専用の旅行会社でチケットとヒンディー語通訳（デリーから同行する通訳は男性のみ）の手配をした。そのことを雄次さんに伝えると、彼は猛反対。危険すぎるというのだ。

短期間を条件にふたたび息子の援助を得ることになり、3 月 5 日、エアインディアに飛び乗った。ニューデリーのホテルでわずかの休憩をとり、翌朝はまだ明けやらないデリー駅から予約済みの列車（午前 6 時 5 分発）に乗り換え、ジャイプールからはローカルバスに 5 時間揺られて午後 3 時過ぎにはラジャスタン州デオリに着いた。空と陸の便によるこの神業的移動は旅慣れた息子のプレゼントに他ならない。

バラック内部当時のままの元収容所

デオリでは前回とは違って監察官（Inspector）と副監察官（Sub－Inspector）などの肩書をもつ高官たちの出迎えを受ける。私たちの案内役を担当するシン（Jaspal Singh）副監察官が紹介される。

まず私たちは 1 ㌔半離れたゲストハウスに案内される。イギリス領時代に幽閉されたインドの王と 2 人の妻のために建てられた歴史的建物だ。荷物を置いてそのまま日没まで、シン高官の大きなバイクの後部シートに乗せられ、広大な構内を一回り。訓練を終え宿舎の掃除をしていた練習生たちにカメラを向けると笑顔で応じてくれる。

ゲストハウスでの夕食はカレー料理のフルコース。香辛料の効いたカレーが、機内食と列車食で過ごした体に染み入る。

翌朝はセキュリティー施設の見学である。CISF はインド国内の原子力施設、宇宙施設、空港、メトロ、発電所、政府の建物などの重要な分野の警備とセキュリティーを提供する機関であり、デオリの訓練センターはそうした任務を担う専門要員を教育する研

修期間である。見学の一番の目的はかつて日本人が抑留されていたバラックだ。現在残されている旧バラックは２棟あった。

中心施設から離れ樹木が生い茂る奥地には、さびた鉄の扉が物々しい独房が背丈ほどの草に覆われ、抑留所を象徴していた。訓練生の宿舎として使用されているバラック内部の撮影も許された。外壁は補修されていたが、仕切りのない部屋にはずらりと訓練生たちのベッドが並び、当時の抑留者が描き残したスケッチそのままだった。

１回目の訪問の折に、かつてデオリ収容所に衣料品と食料品を納入し、日本人収容者と接触していたインド人雑貨商の消息を商店で尋ねると、もう、数年前に亡くなったとのことだった。当時の収容所とかかわりを持つ人に会いたいとシン高官に伝えると、その雑貨商ラドゥラム・ナタニ（Laduram　Natani）さんの親族がいるかもしれないからと、心当たりでもあるのか私たちをバイクに乗せ街中へ出た。

収容所に出店していた雑貨商の甥に面談

次つぎと尋ねまわった結果、ナタニさんのおいに当たる印刷業を営む 1957 年生まれのオム・ナタニ（Om Natani）さんを探し当てて下さったのだ。

インタビューはシン高官がヒンディー語で質問し、私の取材ノートに英語でメモしてくださるという方法で進められた。

「叔父のラドゥラム・ナタニは 7 年前に亡くなっています。2006 年のことです。ラドゥラムはキャンプ内に小さな店を営み、食料、衣料、日用品を日本人の抑留者に提供していました。抑留者たちは、収容所内の売店で買い出しに行く自由が認められており、普通の日常生活を送ることができました。私たちはもちろんですが、彼らも私たち地元民に対して非常に親しみを感じてくれていました。抑留から解かれた際に、日本に返されても生活基盤もなく不安だ。帰還せずにこの町に住みたいという人もいたほどだと、叔父は話していました」と、オム・ナタニさんは語る。そして、新たな情報を得たらお知らせすると、ご自身のメールアドレスを記して下さった。２日間にわたり付き合って下さった高官、Singh 氏の職域をこえてのご好意を、私は無駄にはできない。

インド高官の大きなバイクの後部シートにまたがる乗り方にも慣れ、風を切って行き過ぎるデオリの街中で、ふと私は不思議な感覚に襲われた。沖縄でもこうして多くの人びとの助けを得て目的の地へと運ばれてきた。糸満漁民という異質な文化と漁労活動を理解するキーワードが「ジョー御願」であった。

かつて漁業を営むために自力で海を埋め立ててきた糸満漁民たち。その過程で家並みと家並みの間にできたスージグヮー（路地）を一単位として豊漁と安全航海を願う「門御願」が生まれた。そのジョーにこだわった私は糸満漁民が定着し集落を形成した八重山へと連れていかれた。

さらに八重山群島の岬の突端の小さな島細崎で、マレー生まれの糸満漁民の妻となっ

たダラ（照子）さんに出会った。そして彼女はさらにインドまで私を運んできてしまった。糸満の「ジョー」によって、私はバトンのように確実な受け手へと送り届けられてきた。

糸満系漁民をはじめとした日本人が拘束されたインドの抑留生活は、体験者が少なくなる中で人びとの記憶から消え去ろうとしている。しかし他国で囚われの身となった民間日本人の体験は太平洋戦争を根拠にしたものであり、日本の歴史から消し去ることはできない。今日の日本を見つめるとき、今こそインド抑留の実相は重要な課題を突きつけているのではないかと深い思いにかられている。

［注］

[1] 田島義介「悪夢の 2・26 事件」『インドワラ通信』木村二郎発行、第 28 号、1985 年 3 月。

[2] インド政庁: External Affairs. File.No 54(8)-W。

[3] 外務省調査部『英領マレーの統治機構概観』外務省、1942 年、7 頁。

[4] 前掲、インド政庁: External Affairs. File.No 54(8)-W。

[5] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱関係/在敵本邦人関係在英（含属類）本邦人関係」第二巻。

[6] 篠崎護『シンガポール占領秘録』原書房、1976 年、1〜17 頁。

[7] 一又正雄「戦犯裁判研究余論（1）1929 年捕虜条約準用問題」『国際法外交雑誌』66 巻第 1 号）、1967 年、15〜19 頁。

[8] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題/在敵本邦人収容所視察報告/在英ノ部」第一巻第五巻。

[9] 石橋總吉郎「ある日系マレイシアンの記録」『日馬和里』クアラルンプール日本人会、No10、18 頁。

[10] 外外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題/在敵本邦人収容所視察報告/在英ノ部」第一巻二巻中の「馬来緬甸印度ニ於ケル邦人抑留状況概要」。日付と文責は明記されていないが、日本の外務省関係者によってまとめられたものと考えられる。

[11] 飼手譽四「印度抑留戦記」『同盟グラフ』（同盟通信社・現共同通信社）、1943 年 1 月。

[12] 飼手譽四「印度抑留を語る」『南方調査室資料』東京商工会議所、第 13 号、1943 年 7 月（手書き刷り）。

[13] 外務省資料「交戦国外交官領事館其他ノ交換関係/日英交換船関係（第一次）」第一巻。

[14] 徳田冨二『プラナキラの月』徳田八郎衛、1971 年、85〜89 頁。

[15] インド政庁. External Affairs.War.Fil No.39(4)-W/42。

[16] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱関係/在敵国本邦人関係、在英（含属類）本邦人関係」第三巻。
[17] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱関係/在敵本邦人関係、在英（含属類）本邦人関係」二巻・三巻。
[18] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱関係/在敵本邦人関係在英（含属類）本邦人関係」第二巻、第三巻に同資料。
[19] 同上、第三巻。
[20] インド政庁. Home Affairs.War.Fil No.39(4)-W/42）。
[21] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題/在敵本邦人収容所視察報告/在英ノ部」第四巻。
[22] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱関係/在敵本邦人関係在英（含属類）本邦人関係」第一巻第二巻、同第四巻に一部。
[23] 抑留者の坂本謙一メモより。
[24] 澤谷友美『母・伊香房子　遠き空をみつめて』自費出版、2005 年、47 頁。
[25] 前掲『インドワラ通信』第 6 号、1971 年 6 月。
[26] 外務省資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題/在敵本邦人収容所視察報告/在英ノ部」第一巻第四巻。
[27] 同上、第四巻。
[28] 外務省外交資料「交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題／在敵国本邦人収容所視察報告／在英ノ部」第一巻。
[29] 前掲『インドワラ通信』第 22 号、1982 年 8 月。
[30] 大場昇『からゆきさん　おキクの生涯』明石書店、2001 年、176 頁。

第 4 章　フィリピンの沖縄漁業と太平洋戦争

1. アメリカ統治下での日本人漁業の規制

カミアチネーとワタクサー

上原サトさん(1916 年生まれ）は、尋常小学校を卒業すると小さな頭に魚を載せて、13 歳から販売活動に参加してきた。サトさんの生家はサバニを 4 隻所有し、1 日に 3 回は水揚げするアンブシ(建干網)と、パンタタカー（小型追込網）を稼業としていた。祖父は建干網漁業の創始者といわれる屋号、新山戸（ミーヤマテーキン）拝見の三男三女の 6 人兄弟の長女として生まれた。彼女が幼いころは、祖父の屋敷周辺に、長男である父と男兄弟 10 人の一家がともに住み、「浜山拝見チュチョーデー」（一兄弟）を形成していた。男系血縁集団の下位グループとして意味される「チュチョーデー」[1]という兄弟集団を形成し、漁業を繁栄させてきた家筋である。

サトさんは 17 歳で一人前となり、生家の販売を一手に担う腕利きのカミアチネー(頭に魚を載せて行商）として育った。

高級品のシロイカ（あおりいか）や惣菜用のトゥブー（とびうお）などを平均 50 斤（約 30 kg）から 80 斤（約 48 kg）の魚を商った。販売方法は秤もなく、ミージョーレー（目分量）なのだから、すぐ引き抜いて売れるように、魚の頭を下にして籠に隙間がないように収納した。籠の下にはウジン小（グヮー）（盆状の魚の汁よけの板）を土台にし、さらに安定を保つようにガンシナ（ドーナツ状の藁縄の輪）を頭のクッションにする。

「イユコーンチョラニー」(魚を買いませんか)、もっとていねいに「イユコーンソーラニー」(魚を買っていただけませんか）と、使い分けながら那覇や首里の家々を回った。

糸満の女たちには、他のどの地域にもみられない「ワタクサー[2]」(私の銭）という女だけの私財を蓄積し所有する慣習があった。父や夫や兄弟が捕ってくる魚を商い、卸値に当たる元金を父に渡し、自らの技量で得た利益を蓄積する。夫の経済とは別に私財として認められた独自の経済システムであった。

特徴的なのは売り値を売り手が決め、販売終了後に総売り上げから販売マージンを差し引き、残りを卸値にあたる元金として漁民側に渡す点にあった。

サトさんの父は娘にこう言って諭した。しっかり稼いで高額のワタクサーを蓄えなさい。将来結婚するだろう糸満漁師は、素潜りによる海中作業でサメに食いちぎられないともかぎらない。板子一枚下は地獄の危険な仕事を業とする。妻たる糸満の女は経済的にも自立していないと、子どもを抱えて路頭に迷うことになる。したがって明日をも知れない海の男を夫に持つ糸満の女にとってワタクサーは自衛の策であり、将来の生命保

険にあたるものであると。幼いころからの商いへの参加は強い経済観念を植え付け、蓄積したワタクサーをさらに増殖する。方法はムエー（模合）、ユレー（寄合）といわれる相互扶助の金融の仕組みによって増額するか、あるいはその利益をさらに大きな模合に回す。そうしたさまざまな方法で女たちは経済的基盤を確立し広げていった。糸満のマチグヮーや周辺の店舗の多くは、こうした女たちによる行商からの出店であった。

マニラで注目の糸満娘の販売能力

そんなサトさんがふるさとを離れたのは、フィリピン漁業に従事し、販売要員を必要としていた叔父の要請による渡航であった。父の 10 人の兄弟のうち、五男、七男、十男がシンガポール、四男、六男、九男がフィリピンに漁業移民していた。前年には新婚の弟、晧吉さんもフィリピンに渡り、一家の働き手は病弱の父を残して全員が糸満を留守にしていた。

1938 年、22 歳のサトさんは、異国の地で魚売りをするために、三人の叔父と弟の働くマニラへ、ひとり自前で旅立った。魚売りで蓄積したワタクサーで旅費は十分まかなえた。

サトさんたち糸満娘の活躍は、新聞にも報じられた。見出しに「糸満の花“糸満娘”/名売子と好評噴々」(『大阪朝日新聞』[3] 1939・3・9)。記事の内容は、今マニラには約 1000 人の県人漁民がいて漁船 20 隻を所有して活動している。しかし魚市場の販売は比島人の独占であり、価格の乱高下が甚だしい。魚価統制の対策として、魚売りに通じた糸満娘を数十名呼び寄せ市場に進出させた。彼女等は直ちに貨幣の計算を覚えると日比語を混用して販売にあたった。そのため市場の魚価は統制され、価格の変動を食い止めることができた。漁業従事者はいずれも糸満娘の業績を賛美し、一般にも好評を博しているというものであった。

マニラには、デビソリヤ・マーケットやクインター・マーケットなど市営の公設市場が 13 もあった。建物の内部は鮮魚部、獣肉部、鶏肉部、野菜部、飲食部、雑貨部などがあり、鮮魚部は幅 1 メートル、高さ 1 メートルのコンクリート造りの販売台が設けられており、小売人はその売り台を 1 区画 1 日 20 仙(ペソ)から 30 仙（ペソ）の使用料を支払って借り受けるシステムになっていた [4]。

パシグ河口の上流に位置するサンミゲールの水揚場は、午前 1 時からセリが開始される。追込網や釣船など約 30 隻がこのサンミゲールを根拠地としており、追込網の 1 隻の水揚量は約 700 籠（一籠 50 キロ）、このうちマニラ市場に卸されるのは約 400 籠、残りは遠隔地と小売りに向けられる。仲買人は邦人 70 人、比人 15 人となっていた [5]。

サトさんも午前 1 時の早朝セリに出かけ、50 キロの籠を三つ、全部で 150 キロを糸満の漁師から買い付ける。魚は現地人がカルマタ(馬車)に乗せて、10 ペソで運んでくれた。

売り値は仕入れ値から判断して自分で決める。客が値切るのはフィリピンも糸満も同じだ。その対応と切り抜け方はカミアチネー時代にたっぷり鍛えられている。朝 6 時に店を開いて午前 11 時までには売りさばいた。

サトさんがマニラに渡る前年には日中戦争が起きており、この戦闘を境に強固な販売基盤を築いてきた華僑による日本商品締め出しがあり、魚も不買運動の対象とされた。いわゆる市場における「ボイコット」事件[6]であった。しかし全供給量の半数以上が邦人による漁獲であり「脅迫団の執拗なる扇動にも拘らず遂に成功せずして彼等の間より崩壊するに至れり」[7]。魚類に限らず実際に華僑にとっても日本商品を取り扱わなければ成り立たず、ボイコットはかえって自らを締め出す形となり、一時的には日本商品の販売数量を減退せたものの次第に平常に戻りつつあるという複雑な社会状況もからんでいた。

サトさんの働く市場にも、当局の監視の目をくぐって中国人の買い物客が籠の中へ代金を入れ、欲しい魚の名を書いて売り台の下にそっと置いていく。それを見て求められた商品を入れておくと、すっと持ち帰る。

1899 年以降、日米関係の悪化にともない、急速に漁業規制が強化された。「漁業者免許証」は、フィリピンとアメリカの市民のみに許可され、邦人漁業者は指導的地位にいる少数の者に限られたことは、すでに述べた通りである。

さらに国家間の関係が険悪になると、漁業者免許証がないことを理由に逮捕者が続出した。一方では対外侵略主義に裏打ちされた南方進出奨励、他方では排日政策の強化による漁場からの締め出しというはざまで、糸満漁民はさらに深刻な状況を迎えることになる。

表3　1938年頃のマニラ地区に於ける追込網形態

	漁船名	経営者・代表者	所有者
1	ビクトリー	上原賀寧	比島人所有
2	グスマン八号	金城小亀	比島人名義
3	グスマン一号	宮城信之助	比島人名義
4	グスマン七号	玉城正一	比島人所有
5	アッシナー	長嶺亀之助	比島人名義
6	サンデーゴ三号	上原良栄	比島人名義
7	サンデーゴ一号	大城正範	比島人名義
8	クヨー	大城宇志助	比島人名義
9	ルーポ	玉城秀雄	比島人名義
10	ルーポ三号	山内昌徳	比島人名義
11	アルマンド二号	守谷成之助	比島人名義
12	アルマンド一号	大城傳吉	比島人名義
13	クヨー二号	玉城加味	比島人名義
14	グスマン九号	島袋佳介	比島人所有
15	ルーポ二号	上原繁	比島人名義
16	アルホー	名嘉松太郎	比島人名義

出典：渡邊東雄『南方水産業』中興館、147頁
武久伊作『南洋水産』第70号、1941年3月、18頁

表4　1938年頃のフィリピン方面の漁業形態

地方別	組数	団体名	業種	根拠地	従業員数	漁船隻数	水揚	漁獲物	日本人	沖縄人	比率
マニラ		漁業連合会	ビームトロール	マニラ	200	34	110万比	鰹（かつお）、鮪（まぐろ）、赤ムロ			
	17	漁業連合会	追込	マニラ	700	85	180万比	鯖（さば）、鯵（あじ）、			
	9	漁業連合会	手釣	マニラ	150	9	50万比	エソ、鯛（たい）			
	1	漁業連合会	曳網	マニラ	30	1	6千比	ニヒ	500	780	61
ザンボアンガ	2	南洋水産株式会社	鰹、鮪	ザンボアンガ	260		50万貫	鰹、キハダ鮪	110	150	59
ヤブ地方	2		追込		83	12	25万比	エビ、鯛、ギンガワ	0	83	100
その他			真珠	ホロ							
			追込	イロイロ							
			追込	パラワン	300	40		真珠			100

出典:『沖縄県農林水産行政史』18巻、539頁

排日政策による漁民逮捕続出

サトさんの弟、上原晧吉さん（1919 年生まれ）が所属した追込網の「クヨー」や「クヨー12 号」も、船長と機関長は名目上フィリピン人になっているが、熟練した技を必要とする追込漁は、沖縄県人以外には不可能だった。30 人前後の乗組員で構成する沖縄漁民のうち半数が糸満出身者で占めたのもまた当然であった。

船団は 5 人から 6 人を乗せた運搬船と、1 隻に 7 人が乗り込んだサバニ 4 隻のおよそ 30 人が一組である。フィリピンの追込網漁の配当は、名義料と諸経費を差し引き、見習いも機関長も一人 1 口の株を持ち、全員平等の配当金が特徴であった。パラワン島とミンドロ島のほぼ中間にある離島のサンミゲール島を 4 組から 5 組が中継基地として操業していた。この島に組が簡易宿泊所を準備し、漁獲物は運搬船がマニラへ運んだ。

「実際に操業するのは我われですけど、漁業法規制によって身分的には無鑑札ですからね。昭和 16 年に入るとますます取り締まりが厳しくなり、容赦なく逮捕されました。漁師はしだいに中継基地のサンミゲール島から上陸できなくなり、監視の目を盗んで母船が日用品を運んでくるのを待つ以外ありませんでした。どうなるのかとみんな不安でしたよ。食糧どころか、飲料水やマッチにまで不自由する状況に追い込まれました」と、退職後の上原晧吉さんは当時の苦しい体験に思いをはせた。

サトさんがフィリピンの海に働く糸満漁民の上原松助さん（1913 年生まれ）と結婚したのは 1940 年の年の瀬も迫った 12 月のことであった。不穏な空気が漂い、航海制限、鑑札証の有無など、当局の取り調べが増していく時代の結婚であった。

幸せは長くは続かなかった。結婚翌年の 1941 年 2 月、漁夫鑑札不所持で夫は逮捕され、モンテンルパのニュービリビット刑務所へ送られる。

面会に行くたびに、夫は妻に早く沖縄に帰ることを勧めた。シンガポール、マレー半島、フィリピンから、在留邦人は競って引揚げていったが、サトさんは拘束中の夫を見捨てて帰国することはできなかった。郷里の父の胃腸病が悪化しているとの知らせを受けて、弟の晧吉さんだけは最後の引揚船で送り出した。

1941 年 12 月 8 日の朝。サトさんはいつものようにセリ市で魚を仕入れ、市場に立っていた。運搬係のフィリピン人の男に、開戦を知らされる。急ぎアパートへ戻り着替えをすますと、入口に官憲が拳銃を持って立っていた。トラックが待機していて、市内の刑務所に収容された。あっという間のできごとだった。夜になって身体検査が行われ、日本人クラブで在留邦人の共同生活が 1 か月続いた。

そのマニラでサトさんは女の子を出産した。1942 年 12 月のことだ。漁業組合が経営するかまぼこ工場の仕事をしながら不安な日々を過ごしていた。漁師たちのほとんどは海軍に徴用され、軍への食糧供給と護衛船の作業に従事させられた。モンテンルパに収容されていたサトさんの夫、松助さんも軍備員として警備の仕事に就き、間もなく現地

召集を受ける。生活を共にする時間の少なかった妻に、戦争が終わったらいままでの償いをすると約束して、北部ルソンのカワヤン地区の警備兵として出兵したが最後の別れとなった。戦後サトさんに届いたのは、夫の戦死広報だった。

占領地統治とミッキーマウス・マネー

マレー半島北部のコタバルの上陸作戦によって最初の火ぶたが切られたことは先に述べた。1941 年 11 月 6 日、イギリス領マレー方面上陸部として第二十五軍の戦闘序列が命じられる。軍の第一の任務は「シンガポール」を攻略し、英国極東の根拠地を壊滅することにあり、上陸予定地はタイのシンゴラとパタニ、なかでも重要視されたのがマレー半島中部東側海岸、コタバルに上陸し、各飛行場を占領し、敵軍の輸送と上陸を封鎖するという作戦であった [8]。しかしコタバルには「第八インド旅団」が防衛を担当しており、地形的にもマレー半島は降雨量が多く、河川近くにはジャングル地帯を形成している。したがって日本軍がマレー半島に上陸してシンガポールに迫るには、シンゴラ付近から西海岸に出て、その半島を南下せざるを得ないと考えていた [9]。

開戦に向けて、各船団は前日の 12 月 7 日 10 時 30 分には集合地点に達し、シンゴラ、パタニ、コタバルへと各部隊の上陸点に向かって進攻していった。最初に予定地点に到着し、上陸作戦を開始したのが兵力 5300 を要する「佗美支隊」だった。「綾波」先導のもとに、淡路山丸、綾戸山丸、佐倉丸の三隻は、7 日 22 時 55 分、予定泊地のコタバル沖 4000 メートルに投錨。上陸部隊は縄梯子を伝い、鈍い月明りに照らし出された舟艇に乗り移っていった。「約 40 キロの荷物を背負い、そのうえ、軽機、小銃、弾薬箱等を手に提げて、大きく横揺れする舷測の縄梯子を降りてゆくのはなかなか困難で、舟艇の上下動、縄梯子の横揺れによって海中に転落するものもあった」[10]。

日本は「比島攻略作戦」どおりに半年足らずで東南アジアのほぼ全域を制圧する。開戦 17 日めの 12 月 25 日には香港占領、42 年 1 月 2 日にマニラ、2 月 15 日にシンガポール、27 日にミンドロ島、3 月 8 日に蘭印ビルマのラングーン（現ミャンマー連邦第一の都市）、5 月 1 日にラングーンにつぐ第二の都市マンダレー、5 月 7 日に米軍の要塞フィリピンのコレヒドールを占領してフィリピン占領を完了する [11]。

フィリピンは当初から南方占領の主軸におかれていた。東南アジア地域を占領地とする軍政計画は、参謀部研究班によって 1941 年 3 月末には「南方作戦ニ於ケル占領地統治要綱案」「南方作戦ノ場合二於ケル財政、金融、通貨工作ノ根本理念ニ就テ」などの地域別軍政実施要綱案を立案して上司に報告した。

その起案「南方作戦ニ於ケル占領地統治要綱案」[12]中の「対米戦争ニ伴フ比島処理方策案」がフィリピンの位置づけを示している。その方針の第 1 項に「比島作戦ハ比島ニ於ケル米軍ノ根拠地覆滅ヲ主トシ、比島ノ物資獲得ヲ重視ス」[13]とした。

まず、「米軍の根拠地覆滅を主とし、物資獲得を重視」することであった。8 月に入

り、参謀本部作戦当局が南方作戦計画の策定に本格的に取り組むことになる。占領地の自治回復、国防資源の急速獲得、作戦軍の現地自活を三大原則とした「南方占領地行政実施要領[14]」が決定された。開戦直前の 11 月 20 日のことであった。軍政の教本として知られるこの基本要綱にともない大本営は、「南方作戦ニ伴フ占領地統治要綱」と「占領地軍政二関スル陸海軍中央決定」をもって占領地行政を発令した[15]。

第一の占領目標は物資獲得であり、犠牲は当然のこととして現地住民に課し、大東亜共栄圏実現に向けて太平洋戦争に突入していった。

日本軍は各占領地で軍票（軍用手票）を発行した。占領地域によって軍票の通貨単位も異なるため、地域別に記号が付けられた。蘭印（オランダ領東インド）方面は「は号」、マレー方面は「に号」、ビルマ方面は「へ号」、オセアニア方面は「と号」であった。

フィリピンでも 1942 年 1 月賛 3 日からの軍政実施に伴い「ほ号」と名づけられた。種類は拾比手票、5 比手票、1 比手票、1 仙、5 仙、10 仙、50 仙とされ、占領紙幣が発行された。乱発される軍票は物資不足と相まってインフレを増大させた。深刻な戦況を迎えた 1944 年には 50 億円余の軍票を発行によって物価は 100 倍に騰貴し、5 ペソは使用価値を失い、500 ペソ券が発行された。

軍票は貨幣の機能を失い、物々交換が主要な交易手段となり、フィリピンの人びとは無価値になった軍票を「ミッキーマウス・マネー[16]」と揶揄された。アメリカ統治下のフィリピン経済から、日本軍政下の占領経済に転換させるために、日本帝国は通貨、財政、金融に関して次つぎと命令、布告、許可、政令を発令した。「円札並ニ外国貨幣ノ流通禁止ニ関スル件」（1972 年 1 月 10 日）、「金融機関開業ニ関スル件」（同年 1 月 23 日）、「開業命令書」（同年 1 月 23 日）と間断なく規制していった。

12 月に入ると、空襲警報が連日鳴り響き、サトさんはおびえる長女を抱いて防空壕へ逃げ込む日が続いた。陸軍を主体とする「比島攻略作戦」は、南方作戦全般の中でも常に重点をはずされていた。「陸軍の主作戦は、当初はマレー作戦、次いでジャワ作戦に、最後にはビルマ作戦に向けられたために、比島作戦は支作戦方面として終始した[17]」のだった。1944 年 12 月 26 日、ついに主戦場はルソン島に移される[18]。

2. ルソン山中の死の逃避行

非戦闘員のマニラ脱出

1944 年 3 月、日本陸軍によりインパール作戦が開始され、戦略なき作戦により歴史的敗北をなし、以後、戦況は悪化の一途をたどることになる。1944 年 9 月 21 日、米軍機による突然のマニラ襲撃は人びとを驚かせた。日の丸をつけた飛行機が噴煙を吐いてマニラ湾に墜落していくのを見たときでさえ、サトさんは練習だと信じていた。新聞も大本営発表による日本軍優勢を報じ続けた。襲撃翌日の 22 日『マニラ新聞』[19]は、一面

トップに「鬼畜の敵機を断固屠れ　三百余機マニラ来襲　邀撃二四機(午前中)撃墜　我が陸海空一体の奮戦」「わが砲弾の餌食　猛反撃・敵の跳梁許さず　火達磨の敵機」と、戦果を誇る見出しがおどり、マニラ一般市民は最初の空襲にもかかわらずなんら動揺のいろはみえなかったと報じる。しかし空襲は 4 日間続き、住民は不安を抱きはじめる。

フィリピンにおける戦闘は、ひたすら防御に終始した。1944 年 5 月にピアク島(西部ニューギニア)を失い、フィリピン全域が米機による爆撃にさらされることになる。同年 6 月にマリアナ沖海戦を失った大本営は、1944 年 7 月 24 日、フィリピン方面決戦を「捷一号作戦」とする決定をした。その目的は、米軍の本土進攻にそなえ、フィリピンを最前線とする防御態勢の整備であった。捷号作戦発令にともない、これまでフィリピン担当の第十四軍は第十四方面軍に格上げされ、司令官に山下奉文を任命し、決戦準備を急いだ。

もはや米軍の勢いはとどまることがなかった。1944 年 7 月 28 日、ホノルルにおいて次期の決戦場をフィリピンと決定。9 月 10 日にはモロタイおよびペリリユウに同時上陸作戦を開始、日本軍はルソン島部隊の戦力を「尚武(しょうぶ)集団」(北部ルソン)、「建武(けんぶ)集団」(クラーク拠点)、「振武(しんぶ)集団」(南部ルソン)の 3 集団に分け、尚武集団は山下奉文が直轄して防衛体制に入った[20]。

1944 年 10 月 20 日、米軍はレイテ島に上陸。以来マニラはたびたび空襲を受けるようになる。12 月に入ると、空襲警報が連日鳴り響き、泣き叫ぶ長女を抱いて防空壕へ逃げ込む日が続いた。

在留邦人のマニラ脱出がはじまった。サトさんら漁業関係者は 1944 年 12 月 23 日午後 6 時、サンミゲールの漁業組合製氷会社前に集合。老人と婦女子は日本軍のトラックに乗せられルソン北部の疎開地へ向かった。サトさんは妊娠 6 か月の身重であった。

この日のマニラ脱出を想定して準備は整えてあった。どこで出産を迎えても困らないように、ガーゼ、タオル、おしめ、はさみ、糸などのお産用品一式、マッチ、ローソクも用意した。産湯用の大きな洗面器、ばけつ、なべ 2、やかん、食器、毛布や着替え、疎開先で接する村民と物々交換するための着物やブラウス。またミシン針 1 本で鶏 2 羽と換えられるという情報を得ていたので、新しいミシン針 20 本も用意した。大きな袋 3 個に詰めて 100 kgの重さになった。長引く彷徨を覚悟しての荷づくりだった。領事館からは荷物は最低限にと連絡を受けたが、敗戦の色濃い逃避行に身軽な旅立ちとはいかなかった。

ゲリラの襲撃があるかもしれないという警告におびえながら、闇の夜道を北上するトラックに揺られて不安な一夜を過ごしていた。時折、軍の車がすれ違う。その殺気立った疾走に緊張感がただよう。

抗日ゲリラ運動は、日本軍の軍政当初からフィリピン各地で盛んであった[21]。フィリピンの防衛に当たったユサフェ（在極東米国陸軍・USAFFE）は、1942 年 5 月降伏

するが、一部将兵らが住民を組織して抗日ゲリラ運動を組織、さまざまなかたちでゲリラ運動を強化していった。

丘陵地の幾つもの峠を越え、サンホセで降ろされる。教会に収容され一週間の滞在で旧正月を迎える。米軍襲撃の情報が入りさらに険しい山道を奥地に入る。目にするものは迫りくる山並みだけ。疲労と不安でいつも陽気な糸満の女たちも口数が途絶えがちだ。急に視界が開けた田園地帯で車は止まる。ヌエバビスカヤ州のバヨンボンと聞かされ、疎開生活を始めることになった。

一瞬の夢と化した穀倉地帯の集団生活

すでに一般邦人の集団が避難していた。同じコースをたどって日語要員の記録によると、「この地方はルソン島の穀倉地帯、見渡すかぎりの水田に、稲が黄金の波をうっていた。収穫を終えた農家もあると見えて、もみ米をつく杵の音が、のどかに、遠く聞こえてくる。平和で豊かな田園風景だった。ここではマニラと違って、腹いっぱいめしを食うことができた」[22]とある。サトさんもほっとしていた。米が支給され、娘に久しぶりでご飯を食べさせることができ、出産も無事迎えられそうだと胸をなでおろした。

この地で共同生活を始めたのは、非戦闘員の 5〜60 歳以上の男子と、帰国を踏みとどまった婦女子の総勢 1700 人。この移動を担当した木原次太郎マニラ総領事（当時）の行動記録[23]が、逃避行の詳細を伝えている。「私は軍と協議の上 12 月 23 日在留邦人の疎開を開始したが、輸送機関の都合もあり荷物は夫々処分せしめ、各人の携帯数量はリュックサック一個に限った。トラックに分乗してヌエバエシハ州カバナッアン経由マニラを去る 140 キロのサンホセに仮迫し、翌朝バレテ峠を越えてヌエバビスカヤ州バヨンボン（260 キロ）に到着」、学校や空き家に分宿した。木原氏はさらに当時の戦況及び輸送能力の関係から邦人全員を同地に結集させるには半月を要したとし「途中敵機の攻撃による犠牲者も出て、今後の逃避移動の困難と犠牲者の続出を考えるとき内心極めて暗澹たるものがあった」と記す。

報告にあるように、爆撃にさらされる市街地を抜け、疲労の色濃い歩兵部隊と行き交う逃避行だっただけに、到着したのどかな田園地帯は人びとを安堵させた。しかし間もなくその地からも追われることになる。同報告書よるとバヨンボンは「家が密集しているため爆撃による被害の多くなる恐れもあり且つ食糧品の調達も容易ではないので、軍と協議の結果約 5 キロ北上してボンハル部落に移動し、疎開本部を設けて日本病院を仮設し、大和、日向、高千穂、瑞穂の四区に分散せしめた」とある。

のち米軍の攻撃が激しさを増し、4 月 12 にはバギオ在留の邦人も下山し合流したので、朝日村を増設し、収容人数は 2000 人を超えたという。各村には木原総領事の指示で、総領事館員と日本人会役員を置いて、合計 16 町歩（約 16 万平方メートル）の農耕地をフィリピン人から借地し、甘藷や野菜類を栽培して自活態勢を整え、兵站機関から

の配給物に補充に努めたことが記されている。南方の戦場における日本軍の食糧自給政策の一端がうかがえる。

しかし戦況は逼迫していた。5 月 13 日、米軍はバレテ峠に殺到した。サトさんたちが半年前に越えてきた峠である。威力ある米軍がひたひたと追ってくる。6 月に入れば臨月を迎える。せめて出産だけでもこのボンハルでというサトさんの願いは、しかしかなえられなかった。ふたたび逃避行である。5 月 15 日、米軍が近づいているので退去せよとの命令を受ける。ボンハル 250 キロのイフガオ州キャンガン。マニラから 330 キロ。豪雨のため途中河川が氾濫、橋梁が流失していたので、河を渡るのに困難を極める。6 月 10 日ようやくたどり着いた。爆撃に追われて結集したのはパグダンという集落だった [24]。

歩く、ひたすら歩く。しかしいくらせかされても子ども連れは遅れがちで隊列から乱れる。非戦闘員のとぎれとぎれの列が峠を越える。この飢えと恐怖の行軍のなかでサトさんは出産を迎えることになる。背中には 2 歳半のイクちゃん、前にはおなかの赤ちゃん、頭には袋に入れた食料と日用品、両手は洗面器にばけつ、やかんに鍋を持って歩く姿に、同行する兵隊が驚いた。カミアチネーで鍛えた体にもさすがに堪えた。サトさんは数日後に出産を控えた妊婦だった。パクダンに着いて数日後、後続隊でやってきた親戚筋の玉城八重子さん（1907 年生まれ）に出会ったのは心強いことだった。

八重子さんも妊娠しており、サトさんより 1 か月遅れの出産のはずだった。ところがおなかの膨らみが消えている。13 歳を頭に 6 人の子どもを同伴した八重子おばさんは、途中で早産してしまったのだ。ひどくやつれていた。予定日より 1 か月も早い出産で、民家の軒先で生んだこと、栄養失調なので出血もなかったと、せつない体験を話してくれた。しかしその赤ちゃんは、雨に濡れながらの行軍で 1 週間の命であったという。「子もたちがいなかったら死んでしまいたかった」と八重子さんは泣いた。

ニッパハウスで介助なし出産

1945 年 6 月 24 日、サトさんは陣痛に襲われた。彼女もニッパハウスに駆け込んだ。フィリピンはちょうど雨季に入り、連日雨が降っていたので、軒下は避難民でいっぱいだった。上に住んでいる兵隊に場所を貸してくれるよう頼み込む。体を横たえると、男たちはさすが暗闇の中で息をのんでいる様子だったが、苦痛の中で恥も外聞もなかった。

どんな状況であれ、いままさに幼い命が生まれ出ようとしているのだ。段取り通りに事を進めなければならない。サトさんは、陣痛が激しくなるととっさに自分の長い髪を持って口の奥へ突っ込んだ。筋書にはないことだったが、糸満で聞いた話を思い出したのだ。喉を刺激する髪の毛で激しい嘔吐感が起きる。強い力が下腹に加わることで、胎盤が一気に下りるはずだ。もう一度喉もとへ。体が震えて、かすかな嬰児の産声を聞いた。

八重子おばさんを呼んでもらい、用意してあった糸と鋏で、へその緒を切ってもらった。作業がしやすいように、ローソクで明かりをつけ自分の手でしっかり握ってかざした。夫が知ったら喜んだのにとサトさんは思った。待たれた次女の誕生だった。

直子と名付けた。素直に、まっすぐ育って欲しいと願った。小さな命に未来を賭けた。爆弾の止む夕暮れどきを待って、新生児に産湯を使わせることができた。このころ米軍の銃爆撃はパクダンに集中していた。夜明けとともに規則正しい空襲がはじまり、夕刻に終わる戦闘の仕方がいかにもアメリカらしいと彼女は思った。分散仮泊している小屋はほとんど焼き払われた。夜になるのを待って人びとはふたたび避難をはじめた。

生まれたばかりの赤ん坊を抱いて横たわっていたサトさんのところに、日本人会の世話役担当役員がやってきて、産後のこんな状態で先へ進むのは無理だから、サトさん母子を残し、在留邦人の名簿から名前を消すと伝えた。「残されてたまるかと思った。ここで死になさいというわけでしょう。私こうして生きていますのに。消すなんておっしゃらないで下さいと言いましたよ。そしたら、いますぐここを出て、4 キロ先まで歩きなさいというわけ。このジャングルの道を、産後 2 日めによ」。サトさんは生きたかった。二人の子どものためにも死ぬわけにはいかなかった。嬰児を胸に抱き、めっきり小さくなった荷物はリュックに詰めて背負い、幼い姉の手を引いて歩く。雨の降る薄暗いジャングルのなかである。道なき道は滑って幼児はうまく歩けない。いつしか親子は前を行く人を見失っていた。どのくらい歩いただろうか。歩きながらサトさんの意識は遠のいていった。闇の中へ落ちていく。やがて目が覚めると山の中で荷物を枕にして三人は眠っていたのだ。木漏れ日に包まれた静寂の中での目覚めだった。親子はそろって生きていた。

食糧が底をついた。芋を掘りに行こうにも軍によって接収された畑は監視が厳しかった。「芋を盗んだものは銃殺する」と書かれた板切れが畑に建っていて恐ろしかった。しかし、その芋がなければ飢え死する。サトさんは畑に入った。大きな芋が掘れる。夢中で袋をいっぱいにした。それから収穫の終わった水田で落ち穂を拾い集めて、戻ろうとしたところで日本兵に見つかった。没収するという兵隊と奪われまいとサトさんはもみ合いになった。兵隊は短剣を突き出した。彼女はひるむことなくタンカを切った。

「これは私がやっと掘った芋と集めた落ち穂なのに。殺すなら殺しなさい。あんたの心がわたしを殺して済むなら、さあ殺しなさい。確かに芋は盗みました。申し訳ないと思っています。でもそれはあんたにじゃないよ。持ち主のイゴロット族の人に対してだよ。でも戦争に巻き込まれてしまった今は、この芋がなきゃ親子で生きていけない。取り上げられたら殺されたのも同じですよ。ハイ、どうぞ殺しなさい。助けてなんて頼みやしないよ」。

唖然とする日本兵をしり目に、サトさんは収穫物を引きずって娘たちの元に帰った。脱穀前の落ち穂をほぐすと二合ほどになった。それを鉄兜に入れて棒でついて精米にし

た。ルソン山中で誰もが行った精米法だった。

死んだ兵隊のそばに転がっていた鉄兜は、貴重な炊事用具になった。親子は岩のくぼみで煙が漏れないように注意して炊飯した。リュックの底に残っていた下着を薪代わりにして燃やした。わずかに残っていた塩を指先につけて、娘と二人でなめながら久しぶりの食事だった。塩を持っていることを知られたら兵隊に殺されてでも奪われるにちがいないと信じているサトさんは、最後の一つまみを懐深くしのばせていた。

しかし、密かに稲の束や芋を分けてくれた日本兵や心を通わせた本土の小学校教師もいた。弱者の切り捨ても力のない者同士のいがみ合いも、戦争という異常な極限状況が生み出した醜悪な地獄絵であった。

背中で冷たくなっていた 46 日の命

困ったことに母乳が一滴もでない。乳児には水しか与えるものがない。赤ん坊は腕の中で日に日にやせ細り小さくなっていく。砂糖がわずかに残っていたが、それを与えるわけにはいかなかった。砂糖は幼い長女を歩かせる魔法の薬だったからだ。母の指に付いた砂糖をしゃぶらせてもらうことと引き換えに衰弱した幼子はよく歩いてくれた。やがて力つきると、母の体を揺すっていった。「赤ちゃんを捨てて」と。おんぶをねだるのだ。絶望的な気持ちになった。8 月 1 日、腕の中で赤ん坊は冷たくなっていた。46 日間の短い命であった。同じ日に周りで二人の人が死んだ。5 歳の幼女と年配の男だった。スコップを手に芋探しをしていた男性の助けを借りて河原に穴を掘り、三人を埋葬した。作業はたんたんと進められ、誰も涙をみせなかった。

わが子の野辺の送りを済ませた後、仮小屋で待っていた上の娘に「イクちゃん、赤ちゃんがいなくなってしまったよ。明日からはイクちゃんをおんぶしてあげられるね」と伝えると、今まで張りつめていたものが一気に崩れて、涙がとめどなくあふれ出た。「ホントに赤ちゃん捨ててしまったの、かわいそうね」といって、イクちゃんは母の涙を見つめていた。せめて砂糖水だけでも精一杯飲ませてあげればよかった。激しい自責の念が押し寄せてきた。身も心も衰弱したサトさんは、その夜から高熱と腹痛をともなった下痢に襲われた。雨季の野営生活と極度の栄養失調で多くの人が赤痢やマラリアで死んでいった。

一度は存在を抹殺されそうになって以来、サトさんは、自分を守るのは自分以外ないことを強く思い知ってきた。死んでいく人びとを見るたびに自分は生き抜いてみせるというすさまじい執念がよみがえるようになった。わが子を失った悔しさに打ちのめされながら赤痢と闘った。彼女は薬を作った。カンダバー（芋の葉）をゆがいて、赤唐辛子とニンニクを加えたものだ。この特効薬が彼女を救った。体内の毒素を排出する効果があるといわれ、糸満の祖母に教えられた自宅治療法だった。赤唐辛子は知り合いの日本兵がわけてくれたものだった。子の初七日に当たる日、ひもじかったであろうわが子

に供え物をするために、病んだ体で這うようにして掘り残しの芋をさがし出かけた。

ふらふらする体を棒きれで支えながら畑に着く。まず自らに動けるだけの栄養を補給しなければならない。サトさんはまず芋の葉を頬張る。つぎに茎をよく噛んで飲み込み、それからやっと見つけた生の芋をかじる。空腹にいきなり生芋は刺激が強すぎる。「人間の体なんて原始的なもので、食物さえ腹に入れれば動けるようになるものよ」と、サトさんは述懐する。帰り道はリュックの底の屑芋を背負って下ることができた。

イゴロット族の芋に救われて

当時のルソン山中を彷徨した人びとの命をつないだのが、イゴロット族が作った芋であったという。フィリピン先住民族イゴロット族の芋は多くの日本人に重く、深い印象として残っている。

「すぐそばに見える芋山だが、朝出かけて帰りは夕方になる。イゴット族の芋山は、山肌一面を植えっぱなしの畑にしたもの。普通の芋畑とはわけが違う。休みやすみたどりつき、山のふもとから両腕両足を使ってすこしずつ這い上がり、大小の岩の間に掘り残された芋を探し当てる。ここで命を永らえることができたのは、芋採りにいく力が辛うじて残っていたことと、掘り残しの芋を見つけるこつを覚えたからである」（阿利幕二『ルソン戦―死の谷[25]』）。

人びとの飢えと疲労は極限に達した。看護婦としてルソン山中いた清水直子さんの記録がトヨさんの行動を裏付ける。「あちら、こちらと患者の小屋を廻っていた。塩もなく、多くの餓死患者が次々と出た。兵隊の短剣で私たちは穴を掘って死体を埋めていった」「患者も私たちも、芋の葉さえ食べつくした後は油虫、バナナの木の根、アザミの根等食べられそうな物は何でも食べた。猪のように速い野生の野ブタはなかなか捕まらない。このようなときイロゴット族の作った稲穂を見つけ、鉄かぶとで搗いて食べた久し振りのお米の味はわすれられない」（清水直子『比島山中の想い出』）[26]。

8 月に入ってサトさんたちがたどり着いたのは、ホヨという奥深い渓谷であった。道路から 500 メートルも下った谷底で、周囲は米軍に包囲されてもはや袋のねずみ。この渓谷こそが自分たちの死に場所なのだとサトさんは理解した。目を覆うような惨状が展開されていた。

「終戦近くになると、屍体は道の両側に続いた。日の経った屍体には、蛆が発生して蠅がむらがり、屍臭に便臭も加わり、アシンの渓谷には、異様な臭気が満ちみちたのである。…日一日と人数が目立って減って行き、通路端といわず、山の斜面にも、谷間の渓流にも屍体が転がっていた」[27]。

停戦の公式情報は 8 月になっても入らなかった。サトさんが芋探しの途中で会った敗残兵から無条件降伏を知らされたのは 8 月 20 日のことだった。サトさんらは地上に出た。そしてキャンガンからトラックに乗せられ、フィリピン人の罵声を浴びながらマ

ニラの南東、ラグナ州の捕虜収容所へ送られた。ルソン山中の日本人がたどった逃避行の結末であった。その後郷里の糸満に引き揚げたサトさんの元に、夫の戦死公報が届いた。死亡日付けは 1945 年 8 月 5 日、場所は北部ルソン・カワヤン地区という一片の紙切れと遺骨代わりの髪の毛と爪がサトさん手元に残された。

フィリピンに眠る戦没者の組織的な遺骨収集は、1958 年、政府派遣遺骨収集団によって行われ、次いで 1967 年、以降毎年続けられている [28]。厚生省援護局資料 [29]によると 1989 年までの各島別の戦没者と遺骨収集数は、ルソン島の戦没者 29 万 2400 名、遺骨収集数（4 万 5689 柱)、レイテ島 7 万 9100 名（1 万 4704 柱)、ミンダナオ島 6 万 3700 名（6997 柱)、ネグロス島 1 万 1200 名（3219 柱)、セブ島 1 万 1700 名（3302 柱)、パナイ島 1200 名（94 柱)、その他 5 万 8700 名（8208 柱）となっている。フィリピン地域の戦没者総数は 51 万 8000 名、遺骨総数 8 万 2213 柱となっている。

なお、敗戦後フィリピンや南洋諸島などで、農業や漁業に従事していた移民が強制引揚げを余儀なくされたが、沖縄県人は約 5 万人、台湾を含めると約 10 万人と推定されている [30]。

3. フィリピン追憶の日々

門（ジョーウグヮン） 御願 で出会ったルソン戦場体験者

1986 年旧暦 6 月の吉日。西新地ン門（路地の名）で 門（ジョーウグヮン） 御願 が行われていた。かつて漁民集落が形成される過程でできた路地を単位とした漁民の祭祀である。ジョーは路地を意味し、その景観は密集した人家を背に海に向けて 9 本の路地が突き抜け、それぞれに有力者の屋号や地区の特色から門名が付けられている。ニシ（北）から富盛ン門（トゥムインジョー)、長嶺ン門（ナガンニンジョー)、根前小ン門（クンメーグヮーンジョー)、高良小ン門（タカラグヮーンジョー)、町ン門（マーチンジョー)、兼久小ン門（カニクグヮーンジョー)、西新地ン門（ニシミージンジョー)、鍛冶屋小門（カンジャージョーグヮー)、白銀堂下のイービンメーンジョーである。漁民の航海安全と大漁を祈願として継承されてきた。

この日も浜で各拝所へのお通し（遥拝）をすませ、そのあとはアタイ（当番）である上原秀子さんのお宅へ移り、御願のすんだあとのウサンデー（供え物のお下がり）を囲んで、祖先と共食する「ジョー遊び」をする。サンシン（三味線）が弾かれ、琉球民謡のリズムが流れはじめると、だれ彼となく声を合わせる。そして最後はこのジョーだけの「友愛会の歌」で閉められることになっている。

詞を作ったのは玉城八重子さん（1907 年生まれ）だ。西新地ン門の 34 人の仲間は、友愛会と名づけ、月に 1 万円の模合を楽しんでいるが、その席で最年長者、上原としさん（1902 年生まれ）の 85 歳の祝いのために、たった 20 分で仕上げられたという歌で

あった。「いまこそ心をうち合わせて、思いのたけを語り合おう、踊り遊ぼう」と、としさんの長い苦難に耐えた人生を高らかに歌いあげていた。曲は琉球民謡の労働歌「汗水節（アシミジブシ）」（作詞・仲本稔、作曲・宮良長包）にのせられた。

この八重子さんが、ルソン山中の逃避行の途中で自らも嬰児を亡くし、上原サトさんの出産を介助した人であることなど、知る由もない私だった。

一、若さある年や（若い時には）
　成し子生み育て（子どもを生み育て）
　　遊ぶひまねらん（遊ぶひまもなく）
　　年よとたん　年よとたん　年よとたん（年をとってしまった）
二、んまがんちからや（孫を見てからは）
　　世の中のしけん（世の中の世間）
　　うちゆらくらくと（浮世楽々と）
　　遊ぶうれしや　遊ぶうれしや　遊ぶうれしや（遊ぶことは嬉しいことだ）
三、あらし波風ん（嵐波風に）
　　しけんうちわたて（世間を渡って）
　　うまんちゅとともに（仲間と共に）
　　うち世わたら　うち世わたら　うち世わたら（浮き世を渡ろう）
四、となり組どぅしび（隣組の人たちと）
　　心うちあわち（心をうち合わせて）
　　たげにかたらやい（互いに語り合って）
　　うどてあしば　うどてあしば　うどてあしば（踊って遊ぼう）
五、くぁんまがともに（子や孫と共に）
　　あがいてぃだ　うがり（昇りくる太陽を拝み）
　　んかてくるとし（向かってくる年）
　　みよのひかり　みよのひかり　みよのひかり（豊穣の光よ）

私がこの歌を聞いてから 3 年がたった。再会した八重子さんは「口にすれば苦しくなるから、いままで誰にも話さなかった」あのフィリピンでの戦争体験を、セキを切ったように話してくださった。苦渋に満ちた長い証言は、昨日のことのように克明に記憶され、夜を徹してとどまることを知らなかった。

八重子さんは、ルソン山中で出産した赤ちゃんも含めて、連れていた 7 人の子どもたちのうち 6 人を失ってしまった。10 人の子どもをもうけ、敗戦の年、フィリピンで現地招集された夫と長男は戦死。助かったのはルソンの戦場から生還した三女と就学のために帰沖させてあった長女と二男だけである。いまその日常は日々よみがえる逃避行に

怒りをたぎらせ、ルソンに眠る子らの魂をねぎらうことについやしているように見える。八重子さんはいう。「悔しくってね。いまだにジャングルの中に放っておかれて。無責任よ、日本の国は。この苦しみは生涯とけませんよ。まるっきりのムダ死にだもの。させて遺骨でもあれば心が休まるのに。あの戦争をね、8 月の初めに終わらせてくれれば死なせてすんだのに。停戦間際まで生き延びていたの、どの子も。負け戦ははじめから分かっていた。これが悔しいの。たった 10 日間のうちにこれだけの子どもを死させてしまった。みんな食べるものがなくて餓死でしたよ。このうち 3 人は停戦の報告を受けてからですよ。もう、悔しいのよ」。八重子さんは、何度も何度も悔しさを口にした。

戦場に死した幼子らへの祈り

「見せましょうね。これが子どもたちですよ。こんなに死なせてしまって」。仏壇から小さな位牌名写（過去帳）を取り出した。そこには夫と七人の子どの戒名が並んでいた。

喜法常明信士、昭和二十年二月十六日、俗名安喜、行年四十五才
安徳常栄信士、昭和二十年、俗名安広、安喜長男、行年十八才
智光善童女、昭和二十年八月、俗名富美子、安喜二女、行年十三才
静安善童子、昭和二十年八月、俗名ツヨシ、安喜三男、行年九才
念法善童子、昭和二十年八月、俗名タケシ、安喜四男、行年七才
浄香善童子、昭和二十年八月、俗名安彦、安喜五男、行年五才
妙順善童女、昭和二十年、俗名順子、安喜四女、行年三才
如空嬰女、昭和二十年八月、俗名命子、安喜五女、行年一才

子どもは小さい順に死んでいた。一人で産み落とした奇跡の子、五女には命子（めいこ）、いのちの子と名づけた。命子ちゃんはたった一週間の命であった。キャンプ地のボンハル、ソラノからキャンガンへ向かう深夜の避難行の途中での出産であった。昼は息をひそめ爆撃の止む夜中に歩く。予定日より 1 カ月も早いというのに陣痛が襲ってきて、日本兵が接収している原住民の高床式ニッパハウスの軒下に転がり込んだ。産声を耳にした日本兵が、あわてて上から懐中電灯で照らしてくれた。そのわずかな光を頼りに、消毒してビン詰めにしておいた糸で、へその緒を結んで切り離した。上腹部をサラシの腹帯できつくしばって胎盤をおろしたが、栄養失調で出血もなかった。マニラ脱出のときすでに妊娠 4 カ月だったので、フィリピンの産婆さんにあらかじめ教えてもらった方法だった。家庭看護の本も読んではいたが、あわてず人ごとのように処理した自分にあとで驚いた。

翌日から歩き始めた。連日の移動で靴が破れ、一家全員が裸足で、雨期の山中を 8 人

の子どもを連れて歩く。赤ん坊を懐に入れ、うつろな目をした 3 歳の四女の手を引くと、枯れ枝のように細く冷たかった。出産 3 日目に発熱してからだが震えた。震えは規則正しく襲ってくる。2 時間ほど震え、しばらく止む、

その間に歩く。マラリアだった。芋の葉と雑草と、たまに見つけるカタツムリがご馳走だったが、もう子どもたちは空腹を訴えなくなっていた。髪の毛がごっそり抜けて我ながら不気味だった。

気づいたら懐の赤ん坊が冷たくなっていた。途中にはたくさんの死体が転がっていたが、死んでいった人たちが羨ましかった。幼い子供たちは 1 人また 1 人、静かに眠るように死んでいった。3 歳の子が、5 歳の子が、7 歳の子が、9 歳の子が……。その子を自分の手で穴を掘って埋めていった。山中はいつも雨が降っていて土がゆるんでいたから、骨と皮のやせ細った母の手でも簡単に掘ることができた。

八重子さんの胸を締めつけ、いまだにその死を信じられないのは 13 歳の富美子ちゃんとの別れだ。母と子は生き別れになってしまったのだ。停戦後の集結場所のキャンガンまであと 3 キロと聞かされた地点だった。マラリアにかかっていた富美子ちゃんは動けなくなってしまった。仕方なく病気の少女を待たせ、かならず戻ってくるから動かないように言い聞かせ、まだ余力の残っている三女を連れて母は、食糧の配給受けにキャンガンの司令部へ行くことにした。ようやくたどり着き、配給を受けて戻ろうとする母子に、「おばさんのそのからだではとても無理だから待っていなさい。車で連れてきてあげるから」と、司令部の日本兵がいってくれた。

ところがそれっきり車は戻らなかった。母は狂ったように富美子ちゃんを探したが、母子は二度とまみえることはなかった。

「いったいあの子はどうしたんでしょう。停戦で司令部は混乱状態で誰もまともに聞いてくれない。戦争は終わっていたというのに、それが悔しいの。三女が残ったから沖縄に帰ったけど、私一人だったらあの子の姿を見つけるまで帰らなかった」と身悶えする。

そしてまた、英語もタガログ語も話せた自慢の長男は、18 歳でマニラの英語学校から憲兵隊の通訳として現地招集、どこでいつ死んだか不明だ。夫はルニタ公園で戦死という通知が 1 枚。「無責任よ、国は」と八重子さんはもう一度いった。

子どもたちを祀る仏壇には、いつも供え物が絶えない。お菓子や果物が山のように盛られている。「今日はなんの日か」と訪れる人に尋ねられるが八重子さんは答えない。ひもじい思いをさせてしまった子どもたちへの母の償いだ。チョコレート、パパイア、マンゴーなどフィリピンで食べさせた子どもたちの好物を、仏壇に供え供養しているのだという。

若いときには子どもを産み育て、遊ぶ暇もなく年をとってしまった……というあの胸打つ即興詩も、今思えば夫と 6 人の子どもを失い、悲しみに浸る間もなく、年老いた両

親と残された子のために、戦後を生き抜かなければならなかった八重子さんの自らへの鎮魂の歌であったのかもしれない。

尋常小学校を卒業し、数え年 13 歳で魚売りを始め、ワタクサーを貯め、本土の岐阜県で紡績出稼ぎも体験し、誰もがたどる糸満娘時代を過ごしたあと、父の勧めで写真でしか知らない 9 歳年上の夫、安喜さんの働くマニラへ嫁いだのは 1928 年、22 歳の熱い真夏であった。

上原サトさんとはちょうど 1 世代上のフィリピン移住だった。八重子さんの父は大正期にセレベスへ出漁、糸満から海外移民の先陣を切った人であった。後に長男と二男が父に合流し、長女の八重子さんのマニラ行きも父の望みによるものだった。

八重子さんがマニラに渡った 1928 年は、中国山東省の済南で、日本軍と国民革命軍との間で起きた武力衝突事件「済南事件」が起きた年であった。排日運動激化の発端となったといわれるこの事件は、八重子さんの暮らしに暗い影を投げた。不動の販売基盤を築いていた華僑の魚不買運動で、安喜さんたちの漁獲した魚が水揚場に積み上げられ腐敗していくのを見なければならなかった。邦人漁業は最大の苦境に直面していた。

前述のサトさんが遭遇した日中戦争のフィリピン漁業に比べれば、八重子さんの時代は事業体としても弱体であり、たちまち閉鎖、休業、繋船のやむなきにいたった [31]。八重子さん夫婦も漁業に見切りをつけなければならなかった。住まいをマニラからケソンに移し、夫は養鶏業、妻は洋裁とあらゆる仕事して働き、10 人の子どもを育てていたのだった。

怒りの戦後を生きる

そのフィリピンを引き揚げた八重子さんは、戦後の荒地の中でふたたび糸満アンマーとしての闘いを始める。戦禍のあとの糸満には何もなかった。女手一つで、両親と 3 人の子を育てなければならなかった。共に働いてきた夫はいない。現金になるのは密貿易、つまりヤミ商売しかなかった。それまで魚を捕ってきたサバニが密輸船にかわり、沈没船のスクラップや薬きょうを集めて、与那国を経由して台湾や香港に運んでいた。八重子さんは扱えるものは何でも商った。ヤミ米をはじめ、駐留軍から流れるたばこや缶詰、衣類とあらゆるものを扱った。日々警察との知恵比べであった。米を魚のように装って、ワタバーキに入れ頭に載せて那覇へ持っていく途中で警察に捕まった。八重子さんの抵抗はしぶとかった。絶対に没収されないことを自分に課した。

「わたしを捕まえた巡査さん、生き残って威張っている兄さんよ、いまの沖縄の人民が生きられる道がほかにありますか。糸満は海が生産の場でしょう。その海の仕事をしてきた男たちはみんな死んでしまった。あんたに海の仕事ができますか。兄さんよ、こんな世の中にしかならないのなら、いっそこの戦争で男という男がみんないなくなれば良かったさあ、そして平等な世の中にして再出発すればいいのさね、兄さん」。戦争を

呪う八重子さんのことばには迫力があり、「今度は気をつけなさいねえ」といって、捕まえた巡査は八重子さんを見逃したという。

門（ジョー）の形成は地縁組織と安全航海の祭祀と結びつけ、精神的、物理的あふれを受容しつつ現在も機能している。漁村糸満の原点である門に、私はこだわった。そのこだわりが、あらたなテーマとなる、ルソン山中を彷徨した女性たちと、そしてインド抑留の体験者であった八重山のマレー女性へとつなげてくれた。

彼女たちはいくさ世（ゆー）（戦争の時代）を生き抜き、どんな苦難に出あっても自らを低めることなく生きてきた。そしていかなる時代にあっても経済活動の担い手であった。繰り返し開催される祭祀空間の中で新たな活力を再生していく糸満アンマーたち。その高い精神力に私はいつも圧倒されてきた。想像を絶する過酷な戦争体験や戦後の生き方は、ゆがみのない歴史を知るためにも、今後の指針となることを信じたいと思う。

［注］

[1] 比嘉政夫『沖縄の門中と村落祭祀』三一書房、1983 年、36 頁。

[2] 拙書『海の狩人沖縄漁民―糸満ウミンチュの歴史と生活誌』現代書館、2012 年、28～37 頁。

[3] 新聞資料に関しては『糸満市史・資料編Ⅰ・近代新聞資料』（糸満市役所、1982 年）。および同誌によるマイクロ写真からの複製縮刷版に依った。以下も同様である。

[4] 渡邊東雄『南方水産業』中興館、1942 年、155 頁。

[5] 武久伊作「比律賓に於ける水産業」『南洋水産』第 70 号、南洋水産協会、1941 年、20 頁。

[6] 永福虎「『ボイコット』と支那人漁業会社に就いて」前掲『南洋水産』第 36 号、1938 年、49 頁。

[7] 同上、50 頁。

[8] 前掲『戦史叢書　マレー進攻作戦』170 頁。

[9] 同上『戦史叢書　マレー進攻作戦』187～188 頁。

[10] 数井孝雄「コタバルの砂を血に染めて」『増刊　歴史人物』1983 年 1 月（通号 142 号）、132 頁。

[11]「比島攻略作戦関係歴日表」防衛研究所戦史部『戦史叢書　比島攻略作戦』朝雲新聞社、1996 年、（附図第一）による。

[12] 参謀本部第一部研究班「南方作戦ニ於ケル占領地統治要綱案」（1941 年 3 月）防衛研究所所蔵史料（南西-軍政-26）。

[13] 前掲『戦史叢書　大東亜戦争開戦経緯』〈5〉419 頁。および前掲『史料集　南方の軍

政』84 頁。
[14] 前掲『史料集　南方の軍政』91〜92 頁。
[15] 前掲『史料集　南方の軍政』93〜97 頁。
[16] 歴史学研究会編『戦争と民衆』（講座世界史 8）東京大学出版会、1996 年、360〜362 頁。
[17] 防衛庁防衛研究所戦史部『戦史叢書　比島攻略作戦』朝雲新聞社、1966 年、563 頁。
[18] 厚生省援護局編『続々・引揚援護の記録』クレス出版、2000 年、249〜252 頁。
[19] 『マニラ新聞』（1944 年 9 月 22 日付）縮刷・復刻版『マニラ新聞』日本図書新聞、1991 年より）。
[20] 『比島方面作戦経緯の概要』防衛省防衛研究所戦史史料センター所蔵、（1957 年、厚生省引揚援護局調製）。
[21] 池端雪浦「フィリピン現代史のなかの日本占領期」 池端編『日本占領下のフィリピン』岩波書店、1996 年、4〜7 頁。
[22] 木村宗男「生きているものの負債」中嶋静恵編『ルソンの山々－生き残ったフィリピン在留邦人の手記』創映出版、1978 年、38〜39 頁。
[23] 木原次太郎「在留邦人の逃避行」土谷直敏編『山ゆかば草むす屍』財団法人日本遺族会、1965 年、36〜37 頁。
[24] 同上、木原次太郎「在留邦人の逃避行」37 頁。
[25] 阿利莫二『ルソン戦－死の谷』岩波新書、1987 年、126 頁。
[26] 清水直子「比島山中の想い出」前掲『山ゆかば草むす屍』35 頁。
[27] 玉村一雄「ルソン山岳州に於ける患者収療の状況」前掲『山ゆかば草むす屍』31 頁。
[28] 在フィリピン目本国大使館『フィリピン事情』1973 年、78〜79 頁。
[29] 「フィリピン地域戦没者遺骨収集概況－政府が実施した島別収骨数」は厚生省援護局による 1957 年度から 1989 年度までの集計。
[30] 石川友紀「沖縄県出移民史」『沖縄県史 7 ・移民』沖縄県、1974 年、58 ページ。
[31] 前掲、斎藤宗一『南方圏の水産』115〜116 頁。

【付記】第 4 章は初出『糸満アンマー海人の妻たちの労働と生活』ひるぎ社、1990 年、142〜172 頁に加筆、再構成した。

RINDAS ワーキングペーパーシリーズは、人間文化研究機構南アジア地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構（NIHU）http://www.nihu.jp/ja/research/suishin#network-chiiki
人間文化研究機構地域研究推進事業「南アジア地域研究」（INDAS-South Asia）http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/
龍谷大学南アジア研究センター（RINDAS）http://rindas.ryukoku.ac.jp/

RINDAS ワーキングペーパーシリーズ 27

「インド抑留」と「ルソン戦逃避行」への道

——英領と米領における沖縄漁業進出と排日政策——

加藤久子

2017 年 3 月発行　非売品

発行　龍谷大学南アジア研究センター
〒 612-8577　京都市伏見区深草塚本町 67
龍谷大学深草キャンパス 至心館 455
TEL：075-645-8446　FAX：075-645-2240
http://rindas.ryukoku.ac.jp/

印刷　株式会社　田中プリント
〒 600-8047　京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町 677-2
TEL：075-343-0006

ISBN 978－4－904945－64－3

ISBN 978-4-904945-64-3